財団法人 八尾市文化財調査研究会報告101

Ⅰ 亀井遺跡（第２次調査）
Ⅱ 小阪合遺跡（第18次調査）
Ⅲ 小阪合遺跡（第21次調査）

２００７年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告101

Ⅰ 亀井遺跡（第2次調査）
Ⅱ 小阪合遺跡（第18次調査）
Ⅲ 小阪合遺跡（第21次調査）

2007年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

はしがき

大阪府東部に位置する八尾市は、河内平野のほぼ中央部に位置し、東に生駒山地、南に羽曳野丘陵、西に上町台地の景観をみる地域であります。この豊かな自然環境のもとで、生駒山地西麓部に位置する恩智遺跡や羽曳野丘陵先端部の八尾南遺跡では、旧石器時代以降の先人達が残した貴重な文化遺産が数多く残されています。また、平野部においては、古大和川水系による豊富な水量と肥沃な土地柄から、水稲耕作を開始した弥生時代前期以降の人々の営みを示す生活痕跡が連綿と残されています。

かけがえのないこれらの文化遺産を開発による破壊から守り、後世に永く伝承させていくことが現在に生きる我々の大きな責務と認識しております。

そこで私共では、こうした消滅の危機にさらされている埋蔵文化財を、一つでも多く後世に伝えるため、事業者のご理解とご協力をいただきつつ、事前に発掘調査を行い、その記録保存に努めている次第であります。

このたび、平成元年・4年度に実施しました亀井遺跡(第2次)、小阪合遺跡(第18次)、小阪合遺跡(第21次)の3件の発掘調査の整理が完了しましたので、これらをまとめて報告書として刊行することに致しました。

本書が地域史の解明はもとより、埋蔵文化財の保護及び啓発・普及の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して、ご協力いただきました関係諸機関の皆様方に心より御礼申し上げるとともに、今後、尚一層のご理解とご協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

平成19年3月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　岩　崎　健　二

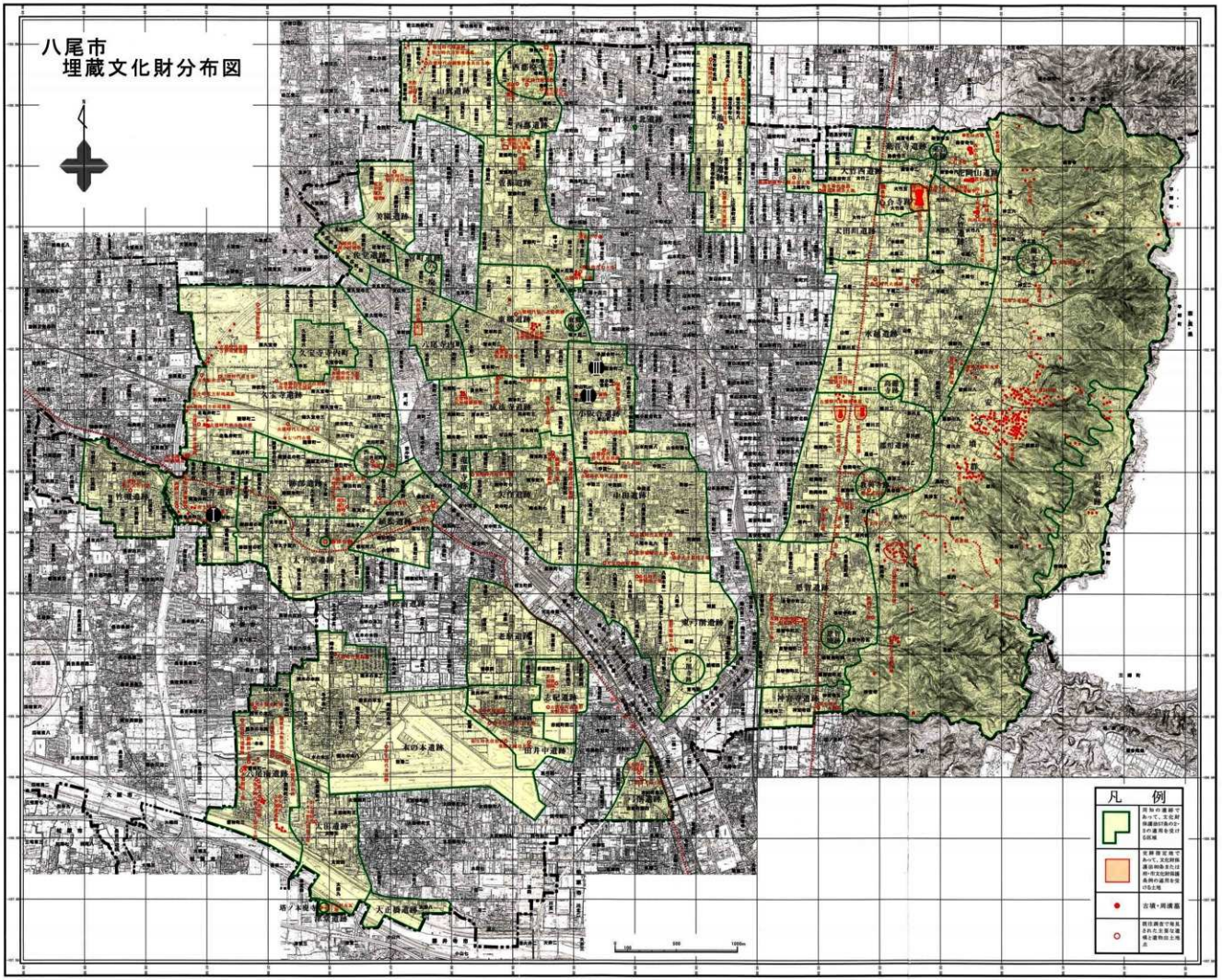
序

1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成元・4年度に実施した発掘調査の報告書を収録したもので、内業整理および本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成18年12月をもって終了した。
1．本書に収録した報告は、下記のとおりである。
1．本書に収録した各調査報告の文責は以下の通りである。Ⅰ河村恵理、Ⅱ・Ⅲ原田昌則。全体の構成・編集は原田が行った。
1．本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の1/2500の地形図(昭和61年測量・平成6年修正・平成8年7月編纂)、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成18年度版)を使用した。
1．本書で用いた標高の基準はT.P.(東京湾標準潮位)である。
1．本書で用いた方位は、磁北である。
1．土色は、小山正忠・竹原秀雄編1997年後期版『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局　監修・財団法人日本色彩研究所　色票監修に準拠した。
1．遺構は下記の略号で示した。
井戸－ＳＥ　土坑　ＳＫ　溝－ＳＤ　小穴・柱穴－ＳＰ　落ち込み－ＳＯ
上器集積－ＳＷ　不明遺構－ＳＸ
1．遺構図面の縮尺には、平面全図1/100・1/200・1/400、断面全図1/40・1/50がある。部分図面の縮尺には1/20・1/40がある。
1．遺物図面の縮尺は、上器類1/4、石器類2/3、金属類1/1・1/2に統一した。断面については、弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器・金属類は白、須恵器・陶磁器は黒、屋瓦・石器・木製品・土製品は斜線を用いた。なお、黒色土器の煤付着範囲については粗い水玉を使用した。
1．調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

目　次

はしがき
序
八尾市埋蔵文化財分布図
Ⅰ　亀井遺跡第2次調査(ＫＭ89－2)…… 1
Ⅱ　小阪合遺跡第18次調査(ＫＳ89－18)…… 31
Ⅲ　小阪合遺跡第21次調査(ＫＳ91－21)…… 69

八尾市
埋蔵文化財分布図



Ⅰ　亀井遺跡第２次調査（ＫＭ89－2）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市南亀井町１丁目で行った、倉庫および事務所建設に伴う発掘調査の報告である。
1．本書で報告する亀井遺跡第２次調査（ＫＭ89－２）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、申請者から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成元年６月12日から７月４日にかけて、成海佳子を担当者として実施した。
1．調査面積は約200㎡を測る。
1．現地調査には宮崎寛子・山内千恵子が参加した。
1．整理作業は随時行い、平成18年10月に終了した。
1．本書の執筆・編集は河村恵理が行った。
1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－宮崎・山内・村井俊子、図面トレース－山内、図面レイアウト－成海・河村、遺物写真撮影－尾崎良史、その他－北原清子・黒田幸代・徳谷尚子・村田知子・藤原由理子が行った。整理作業には上記のほか辰巳智恵美・松田益枝・大島一浩・竹本　香・澤井　幹が参加した。
1．本書で記載した土色名については、「標準土色帖」によるマンセル表色で示されたものと独自の層名を付すものが混在しているが、あえて統一せず調査時点の表記のまま記載した。
1．土器の形式・編年で参考文献とした文献については、Ｐ26に提示した。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1
第２章　調査概要 …… 4
　第１節　調査の方法と経過 …… 4
　第２節　基本層序 …… 5
　第３節　検出遺構と出土遺物 …… 8
　　１）第１面（弥生時代後期後半） …… 8
　　２）第２面（弥生時代後期前半） …… 12
　　３）第３面（弥生時代前期） …… 16
　　４）包含層出土遺物 …… 18
第３章　まとめ …… 30

挿 図 目 次

第１図　調査地周辺の発掘調査位置図 …… 2
第２図　調査地地区割模式図 …… 4
第３図　調査地西壁断面図 …… 6
第４図　第１面調査地平面図 …… 8
第５図　第１面ＳＤ101・102断面図 …… 8
第６図　第１面ＳＤ101出土遺物実測図 …… 10
第７図　第１面ＳＤ102出土遺物実測図 …… 11
第８図　第２面調査地平面図 …… 12
第９図　第２面ＳＫ201・202、ＳＤ201・202平面図・断面図 …… 13
第10図　第２面ＳＰ201～204平面図・断面図 …… 15
第11図　第２面ＳＰ201・203・204、ＳＤ201～203、ＳＫ201・202出土遺物実測図 …… 15
第12図　第３面調査地平面図 …… 16
第13図　第３面ＳＤ301断面図 …… 17
第14図　第３面ＳＤ301出土遺物実測図 …… 17
第15図　自然河川出土土器実測図 …… 18
第16図　第７・８層出土土器実測図 …… 19
第17図　第９～11層出土遺物実測図 …… 21
第18図　第11層上面～13層出土遺物実測図 …… 23
第19図　第13～16層出土土器実測図 …… 25
第20図　第14層出土遺物実測図（１） …… 27
第21図　第14層出土遺物実測図（２） …… 28
第22図　第15層出土遺物実測図 …… 29

表 目 次

表１　周辺の発掘調査一覧表 …… 3

図 版 目 次

図版一　第１面全景
　ＳＤ101検出状況
　ＳＤ102検出状況
図版二　第２面全景
　第２面遺構検出状況
　第３面全景
図版三　ＳＤ101、ＳＤ102出土遺物
図版四　ＳＤ203、ＳＤ301、自然河川出土遺物
図版五　第７・８層、第10層、第10・11層
　第11層、第13層、第14層出土遺物
図版六　第13層、第14層、第15層出土遺物
図版七　石製品

第１章　はじめに

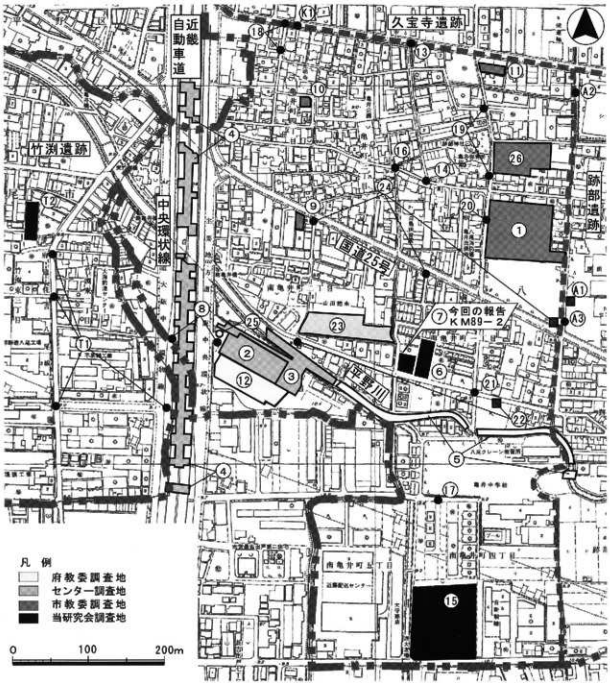
亀井遺跡は、八尾市南西部の亀井町１～４丁目、南亀井町１～５丁目一帯から大阪市東部にまたがる範囲に位置し、旧大和川の支流である長瀬川右岸の沖積地に立地する。当時の地形は、既往の調査で検出した遺構面の検出深度に差異が認められることから、小規模な河川等によって、微高地(自然堤防)が広く形成されていたことが想像できる。当遺跡は、弥生時代から近世に至る複合遺跡であり、特に弥生時代は、集落の拠点として最も繁栄した時期であった。また、周辺には東に跡部遺跡、西に竹渕遺跡、北に久宝寺遺跡・亀井北遺跡・加美遺跡(大阪市)、南に長原遺跡(大阪市)などの遺跡が立地する。

当遺跡は、昭和43(1968)年に行われた平野川改修工事の際、多量の弥生土器が出土したことによって発見された遺跡である。発見と同時に工事と並行して発掘調査(石神1971)が行われ、多量の遺物を含む黒色粘土層が確認された。畿内第Ⅰ～Ⅴ様式の土器が混在し、直下の青灰色砂層中からもⅤ様式の土器が出土したことから、旧大和川の氾濫による２次堆積の包含層と結論づけられた。その後、昭和44(1969)年～47(1972)年に、大阪府教育委員会(以下「府教委」)によって４回にわたる遺跡範囲確認調査が行われた。その結果、遺跡の範囲は、大阪中央環状線と平野川の交差する付近を西限とし、この地点から平野川に沿って南東約250m、南北50～100mと確定された。ただし、弥生時代前期・中期のピットを検出したほかには明確な遺構はなく、弥生時代後期以前・後期以降・弥生時代後期～古墳時代後期(６世紀中頃)までの３時期の遺物包含層の存在が明らかにされるに留まった(石神1971、田代・中井1972)。一方、昭和48(1973)年、近畿自動車道予定地内では、(財)大阪文化財センターによる試掘調査が行われ、遺跡の範囲は南北500mに拡大するに至ったが、遺跡の性格等は明確にできないままに終わった(中井1973)。昭和53(1978)年からは長占ポンプ場築造工事に関連する発掘調査が行われ、それまで２次堆積と考えられてきた遺物包含層は、遺構の重複によって遺物の一部が混合した結果であることが判明した。特に弥生時代を通じては、複数の遺構面・多くの遺構・膨大な量の遺物が検出され、近接地域にまで拡がる大きな集落遺跡であることが明らかにされた。また、古墳時代以降も活発な活動が展開されていたことも明らかにされた(表１－②・③)。昭和55(1980)年からは近畿自動車道建設に伴う発掘調査が(財)大阪文化財センターによって行われている。その結果、当遺跡が東西・南北500m以上の範囲をもつ複合遺跡であり、弥生時代の拠点集落として位置付けられることとなった。以後、昭和63(1988)年の平野川改修工事、平成３(1991)年ポンプ場建設工事に伴う大規模な発掘調査が府教委によって行なわれ、多大な成果が挙げられている(⑤・⑫)。

次に、八尾市教育委員会(以下「市教委」)と当調査研究会が行った調査成果について概観したい。昭和53(1978)年、亀井町１丁目で市教委がおこなった発掘調査では、顕著な遺構・遺物は検出されなかったが、調査地が、跡部・亀井両遺跡の中間地点に立地することから「農耕地として最大限の利用があったことと思われる」と報告されている(①)。平成元(1989)年以降、市教育委員会・当調査研究会では、小規模な発掘調査を続けて現在に至っている。国道25号以北では、古墳時代の遺物を含む埋没河川(旧大和川)を検出しており、⑧・⑨・⑬・⑭では河川埋没後に構築された室町時代以降の遺構を検出している。当調査研究会が調査を行った第１次調査と今回の調査地は、

平野川の北約100m地点に位置し、第３次調査地は近畿自動車道高架下（１区）および長吉ポンプ場の敷地内（２区）に位置する。第１次調査では、弥生時代後期の土坑・溝・落ち込み状遺構などと、弥生時代中期の土器棺墓（方形周溝墓）を検出しており、特に弥生時代後期の遺物の出土量が多かった。

一方、西に隣接する竹渕遺跡は、行政区画によって遺跡名を異にしているが、亀井遺跡とは一連のものと考えられるもので、遺跡東部で実施した第２次調査（ＴＫ89－２）（㉔）では、深層部において弥生時代前期～中期の墓域が検出されている。第３次調査（ＴＫ92－３）（㉓）では弥生時代前期の土坑、古墳時代後期の方墳、平安時代中期の土坑、近世の井戸なども検出されている。



第１図　調査地周辺の発掘調査位置図

表1　周辺の発掘調査一覧表

番号	略号	調査期間	所在地	調査原因	文　献	発行
①		197804	亀井町1	亀井小学校建設	山本昭編　1981「1.亀井遺跡」『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市文化財調査報告7	市教委
②		19780524 ~19800325	南亀井町3	長吉ポンプ場建設	寺川史郎・尾谷雅彦編　1980『亀井・城山』	センター
③		19800601 ~19811031	南亀井町3	長吉ポンプ場建設関連	中西靖人・宮崎泰史・西村尋文編　1982『亀井遺跡』 宮崎泰史編　1984『亀井遺跡II』	センター
④				近畿自動車道建設	高島　徹・広瀬雅信・畑　暢子編　1983『亀井』	センター
		19820601 ~19830831	亀井町・南亀井町		広瀬和雄・石神幸子編　1986『亀井(その2)』	センター
		19850601 ~19860215	南亀井町		藤永正明・阿部幸一編　1987『亀井(その3)』	センター
⑤		198809 ~198903	亀井町1・跡部南の町1	平野川改修	森井貞雄　1989『1988年度亀井遺跡発掘調査概要－八尾市南亀井町・跡部南の町所在』	府教委
⑥	KM1988-1	19881107 ~1124	南亀井4	工場建設	近江俊秀他　1989『亀井遺跡－南亀井町4丁目41-1の調査－』(財)八尾市文化財調査研究会報告19	研究会
⑦	KM1989-2	19890612 ~0704	南亀井町1	倉庫建設	本誌所収	今回報告
⑧	KM1990-3	19901030 ~1122	南亀井町3	公共下水道	成海佳子(財)八尾市文化財調査研究会　1991「亀井遺跡第3次調査」『平成2年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』	研究会
⑨	88-586	19890526・27	南亀井町2	事務所建築	青木勘時　1990「6.亀井遺跡(88－586)の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告20　国庫補助事業	市教委
⑩	89-041	19890918	亀井町4	共同住宅建築	岡田清一　1990「8.亀井遺跡(89-041)の調査」同上	市教委
⑪	89－284	19890901	亀井町1	工場建設	岡田清一　1990「10.亀井遺跡(89－284)の調査」同上	市教委
⑫		199205 ~199411	南亀井町3	長吉ポンプ場増設	森井貞雄編　1994『1992・1993年度亀井遺跡発掘調査概要－八尾市亀井町所在－』	府教委
⑬	KM1996-4	19970217 ~0221	亀井町1・2・跡部本町4	公共下水道	吉川晴久　1997「V　亀井遺跡(第4次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』	研究会
⑭	KM1997-5	19970512 ~0519	亀井町1・2・跡部本町4	公共下水道	吉川晴久　2000「II　亀井遺跡(第5次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告66』	研究会
⑮	KM1997-6	19971022 ~1030	南亀井町4	配送センター建築	高萩千秋　1999「IV　亀井遺跡(第6次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告62』	研究会
⑯	KM1998-7	19990212 ~0223	亀井町3	公共下水道	成海佳子　2000「VI　亀井遺跡(第7次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』	研究会
⑰	KM1998-8	19990323 ~0326	南亀井町4	公共下水道	岡田清一・樋口　薫　2000「VII　亀井遺跡(第8次調査)」同上	研究会
⑱	KM1999-9	19991206 ~1220	亀井町4	公共下水道	成海佳子　2001「V　亀井遺跡(第9次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』	研究会
⑲	KM1999-10	20000306 ~0331	亀井町1・2	公共下水道	高萩千秋　2001「VI　亀井遺跡(第10次調査)」同上	研究会
⑳	KM2001-11	20010426 ~0428	亀井町1	公共下水道	成海佳子　2001「III　亀井遺跡(第11次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告71』	研究会
㉑	KM2001-12	20010618 ~0630	南亀井町1・4	公共下水道	樋口　薫・金親満夫　2002「II　亀井遺跡(第12次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告73』	研究会
㉒	KM2002-13	20020520 ~0706	南亀井町1・3	公共下水道	樋口　薫　2003「IX　亀井遺跡(第13次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』	研究会
㉓	2003-178	20031118 ~1210	南亀井町2	分譲住宅建築	岡田清一・西村公助　2004「15.亀井遺跡(2003－178)の調査」『八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告49　平成15年度国庫補助事業	市教委
㉔	KM2003-14	20030423 ~1203	亀井町1～4・跡部本町4・跡部南の町1	公共下水道	高萩千秋　2004「II　亀井遺跡(第14次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告78』	研究会
㉕		20031022 ~1228	亀井町3	公共下水道	藤田道子　2004『若江北・亀井・長原(城山)遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2003-3』	府教委
㉖	2005-344	20051212	亀井町1	分譲住宅	西村公助　2006「6.亀井遺跡(2005-344)の調査」『八尾市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告53　平成17年度国庫補助事業	市教委
㉗	TK1989-2	19890112 ~0311	竹渕東2	公共下水道	坪田真一　1992「III　竹渕遺跡(第2次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告35』	研究会
㉘	TK1992-3	19920907 ~0926	竹渕東3	工場建設	原田昌則　1993「XIV　竹渕遺跡(第3次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告39』	研究会
㉙	KH90-5	19900415 ~0422	北亀井町2	公共下水道	高萩千秋　1991「I　久宝寺遺跡(KH90－5)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告32』	研究会
㉚	AT1992-8	19920820 ~0905	跡部本町4	鉄塔新設	岡田清一　1993「II　跡部遺跡(第8次調査)」同上	研究会
㉛	AT1998-28	19980629 ~0706	跡部本町4	公共下水道	森本めぐみ　2000「I　跡部遺跡(第28次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』	研究会
㉜	AT1998-30	19990120 ~0127	跡部本町4	公共下水道	森本めぐみ　2000「III　跡部遺跡(第30次調査)」同上	研究会

第２章　調査概要

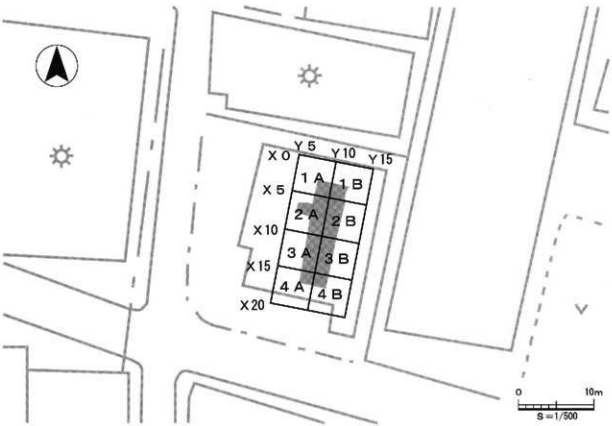
第１節　調査の方法と経過

今回の調査は、倉庫および事務所建設工事に伴うもので、当調査研究会が亀井遺跡内で実施した２度目の調査にあたり、当調査地は第１次調査地の西に隣接する。

調査対象としたのは、敷地面積588.3㎡のうち、南北20m×東西10mを測る。総面積（上幅）約200㎡である。

調査方法については、第１次調査の結果を踏まえ、現地表下2.2～2.5mまでに堆積する弥生時代後期の遺物包含層上面までを機械掘削、以下の1.5～2.0mを人力掘削とし、３枚の遺構面を捉えた。掘削方法は、壁面保護等を行わないいわゆる素掘り（オープンカット）のため、安全を考慮し、壁面の勾配を約45度に保った。また、機械掘削終了後、壁面に段を設け、その内側に側溝をめぐらせたため、調査地下幅の規模は４×14m程度となった。人力掘削時、調査地南部の河川からの湧水が特に激しく、危険と判断されたため、河川部分の調査は十分に行えなかったことから、調査面積はさらに縮小している。一方、調査中第１面で検出した２条の溝状遺構の先後関係を明らかにするため、調査地北寄りの一部約20㎡（上幅）を西へ拡張した。拡張部分では、第２面以下の調査は実施していない。平面的な調査終了後、最終的に重機によって1.2m程度を掘削し、下層部分の地層観察を行った。

地区割については、調査地の中心部を基点に設定した。この基点は調査地南東隅の敷地境界杭



第２図　調査地地区割模式図

から西へ９ｍ・北へ15ｍの地点にあたる。区画の設定軸方向は、正確な国土座標値が不明(南北の基準線は庫標北からおおよそ10度東に振る)であることから、便宜上、調査地長辺軸に平行して南北軸を設定した。調査地中心部の基点をＸ10・Ｙ10と呼称し、調査地を囲むように、東西10ｍ(Ｙ５～Ｙ15)、南北20ｍ(Ｘ０～Ｘ20)の区画を設定した。１区画の単位は５ｍ四方で、東西方向をアルファベットのＡ・Ｂ、南北方向を数字の１～４とし、地区名を北西端から南東方向へ「１Ａ～４Ａ」、北東端から南西方向へ「１Ｂ～４Ｂ」と呼称した。なお、調査地西側に張り出す拡張部分は、２Ａ地区に含む。

高さの基準は、調査地南東150ｍの平野川にかかる新生橋南詰のベンチマーク(Ｔ.Ｐ.＋9.974ｍ)から移動した。

第２節　基本層序

調査地の旧地形は、調査地南端から北方向へ５～９ｍ地点まで河川(旧平野川)が流れ、調査地の1/4～1/3を占める。河川は、数時期にまたがって存続しており、古い時期ほど北へと拡張する。時代とともに平野川が縮小していく様子が窺える。調査地北部は、北西から南東に向かってゆるやかに傾斜しており、調査地中央部は窪地状になっている。

現地表面はＴ.Ｐ.＋9.2ｍ前後で、盛土は0.4ｍ程度堆積する。ここでは、旧耕土以下第20層までの地層を確認した。なお、第17層以下は、下層トレンチで確認した地層である。以下、確認できた層位について特徴を記したい。

第１層：近世以降の旧耕土層。土質は黒灰色礫混粘土質シルトを呈する。ほぼ水平に堆積する。層厚0.3ｍ前後を測る。当該層上面はＴ.Ｐ.＋8.8ｍ前後。

第２層：旧耕土に伴う床土層。土質は青灰色礫混粘土質シルトを呈する。層厚0.3ｍ前後を測る。

第３層：土質は黄褐色礫混粘土質シルトを呈する。層厚0.2～0.3ｍを測る。

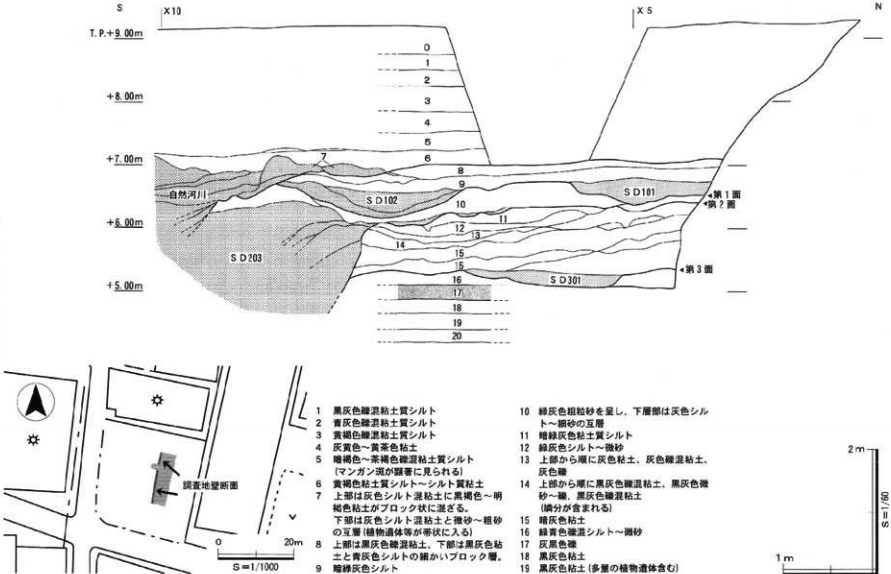
第４層：土質は灰黄～黄褐色粘土を呈し、特に北東部では灰黄色、南西部では黄褐色を呈する。層厚0.2～0.3ｍを測る。

第５層：古墳時代中期～後期の遺物包含層。土質は暗褐～茶褐色礫混粘土質シルトを呈する。マンガン斑が顕著にみられる。層厚0.3ｍ前後を測る。

第６層：古墳時代中期の遺物包含層。土質は黄褐色粘土質シルト～シルト質粘土を呈する。層厚0.3ｍ前後を測る。当該層上面はＴ.Ｐ.－7.1ｍ前後。

第７層：自然河川の流路堆積物層。当該堆積層はさらに２枚に細分できる。上部は灰色シルト混粘土に黒褐色～明褐色粘土がブロック状に混ざる。下部は灰色シルト混粘土と微砂～粗砂の互層に、植物遺体などが帯状に入る。当該層内の含水量は極めて多い。最深は1.0ｍ以上を測る。堆積層上部から古墳時代中期の須恵器が出土している。当該河川の北側岸辺に、黒灰色礫混粘土がブロック状に混ざって堆積した畦状の高まりが見られる。直下層(第８層)を巻上げたと推察でき、河川の流水量の激しさが想像できる。

第８層：弥生時代後期後半(中相)の遺物包含層。当該堆積層はさらに２枚に細分できる。上部は黒灰色礫混粘土、下部は黒灰色粘土と青灰色シルトの細かいブロック層である。層厚0.5ｍ前後。


S
N
X10
X5
T.P.+9.00m
+8.00m
+7.00m
+6.00m
+5.00m
自然河川
SD102
SD101
SD203
SD301
第1面
第2面
第3面
調査地壁断面
0
20m
S=1/1000
2m
1m
S=1/60
S=1/40
1 黒灰色礫混粘土質シルト
2 青灰色礫混粘土質シルト
3 黄褐色礫混粘土質シルト
4 灰黄色～黄茶色粘土
5 暗褐色～茶褐色礫混粘土質シルト
(マンガン斑が顕著に見られる)
6 黄褐色粘土質シルト～シルト質粘土
7 上部は灰色シルト混粘土に黒褐色～明褐色粘土がブロック状に混ざる。
下部は灰色シルト混粘土と微砂～粗砂の互層(植物遺体等が帯状に入る)
8 上部は黒灰色礫混粘土、下部は黒灰色粘土と青灰色シルトの縞かいブロック層。
9 暗緑灰色シルト
10 緑灰色粗粒砂を呈し、下層部は灰色シルト～細砂の互層
11 暗緑灰色粘土質シルト
12 緑灰色シルト～微砂
13 上部から順に灰色粘土、灰色礫混粘土、灰色礫
14 上部から順に黒灰色礫混粘土、黒灰色礫砂～礫、黒灰色礫混粘土
(植物が含まれる)
15 暗灰色粘土
16 緑青色礫混シルト～微砂
17 灰黒色礫
18 黒灰色粘土
19 黒灰色粘土(多量の植物遺体含む)
20 青灰色灰色粘土にシルト～微砂が入る。

第3図 調査地点断面図

第９層：弥生時代後期後半(中相)の遺物包含層。直下の第１面に対応する遺物包含層である。土質は暗緑灰色シルトを呈する。炭化物を多量に含む。当該層上面はT.P.＋6.5～6.7mで、南東部が高い。層厚0.2～0.3mを測る。

第10層：弥生時代後期前半(河内Ⅴ－３様式)の遺物包含層。土質は緑灰色粗砂を呈し、特に下部層は灰色シルト～細砂の互層で含水量は極めて多い。当該層上面を「第１面」と呼称した。当該層上面はT.P.＋6.9m前後。

第11層：弥生時代後期前半(河内Ⅴ－２様式)の遺物包含層。土質は暗緑灰色粘土質シルトを呈する。当該層上面を「第２面」と呼称した。当該層上面はT.P.＋6.3m前後である。層厚0.4m前後。

第12層：弥生時代後期前半(河内Ⅴ－２様式)の遺物包含層。土質は緑灰色シルト～微砂を呈する。層厚0.15m以下、第14層まで北西方向に盛り上って堆積されていることから、第12～14層は土手の役割を備えた盛土であったと推測できる。

第13層：弥生時代中期後半～後期前半(河内Ⅳ－３～Ⅴ－３様式)の遺物包含層。土質は上部から順に灰色粘土(層厚0.1m)、灰色礫混粘土(層厚0.2m)、灰色礫(層厚0.2m)を呈する。南東下がりに堆積している。

第14層：弥生時代中期後半(河内Ⅳ－３・４様式)の遺物包含層。土質は上部から順に黒灰色礫粘土(層厚0.3m前後)、黒灰色微砂～礫(層厚0.05～0.2m)、黒灰色礫混粘土(層厚0.2m)を呈する。前期(第Ⅰ様式)のものもわずかに包含するほか、鏃分(ヴィヴィアンナイト－藍鉄鋼)が含まれる。地形は、第13層同様北西から南東方向へ下がっている。層厚0.1～0.4mを測る。

第15層：弥生時代中期後半(河内Ⅳ－３・４様式)の遺物包含層。土質は暗灰色粘土を呈する。調査地北西部のみに堆積が確認できた。層厚0～0.4mを測る。

第16層：土質は緑青色礫混シルト～微砂を呈する。当該層上面を「第３面」とした。第３面では弥生時代前期(河内Ⅰ様式)の遺物を包含する遺構を検出した。当該層上面はT.P.＋5.2～5.4mで、地形は南東方向へ下がっている。層厚0.2mを測る。

第17層：土質は灰黒色礫を呈し、硬く締まっている。層厚0.25mを測る。

第18層：土色は黒灰色粘土を呈する。層厚0.2mを測る。

第19層：土質は黒色粘土を呈する。植物遺体を多量に含む。層厚0.25mを測る。

第20層：土質は青灰色粘土にシルト～微砂が入る。植物遺体を含む。層厚0.3m以上に及ぶ。

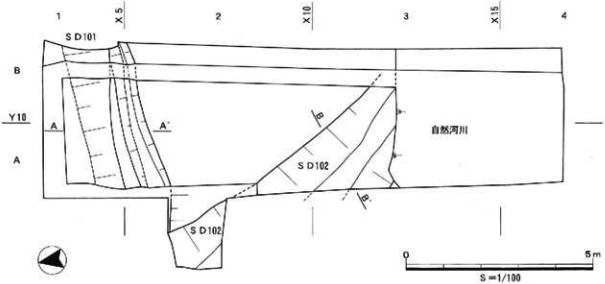
第３節　検出遺構と出土遺物

１）第１面（弥生時代後期後半）〔第４～７図、図版一〕

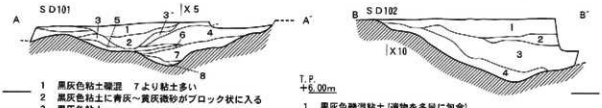
弥生時代後期後半（中相）の遺物を多量に包含する層（第９層）を除去したところ、炭化物を多量に包含する暗緑灰色シルト層（第10層）上面で、弥生時代後期中頃～後半に比定できる溝２条（ＳＤ101・102）を検出した。現地表面下約2.2～2.4m（T.P.＋6.6～6.8m）地点に広がる。

検出したＳＤ101は、調査地北半部を西から東へ流れ、ＳＤ102は、調査地中央部を北西から南東方向へ流れる。当初設定した調査地内で行った平面調査では、この２条の溝の先後関係を確認することは出来なかった。この為、調査地西側を拡幅し（５㎡）、更に調査を行った結果、ＳＤ101は、ＳＤ102に切られていることが確認できた。なお、両溝埋土からそれぞれ出土した土器を観察したところ、若干ＳＤ102から出土した土器に新しい様相をもつものが多く含まれるように感じられたが、明確でなく切り合い関係を判断する資料としては弱いものであった。

以下、当該遺構面を「第１面」と呼称し、検出した各遺構の詳細と、出土した遺物について概観する。



第４図　第１面調査地平面図



第５図　第１面ＳＤ101・102断面図

溝（ＳＤ）

ＳＤ101〔第５・６図一１～53、図版一・三〕

１Ｂ－２Ａ地点にかけて検出した溝である。検出幅1.9m以上、深さ46cm、検出長5.2mを測る。調査地北半部を東流するが、溝の北側肩部を調査地内では確認できなかった。

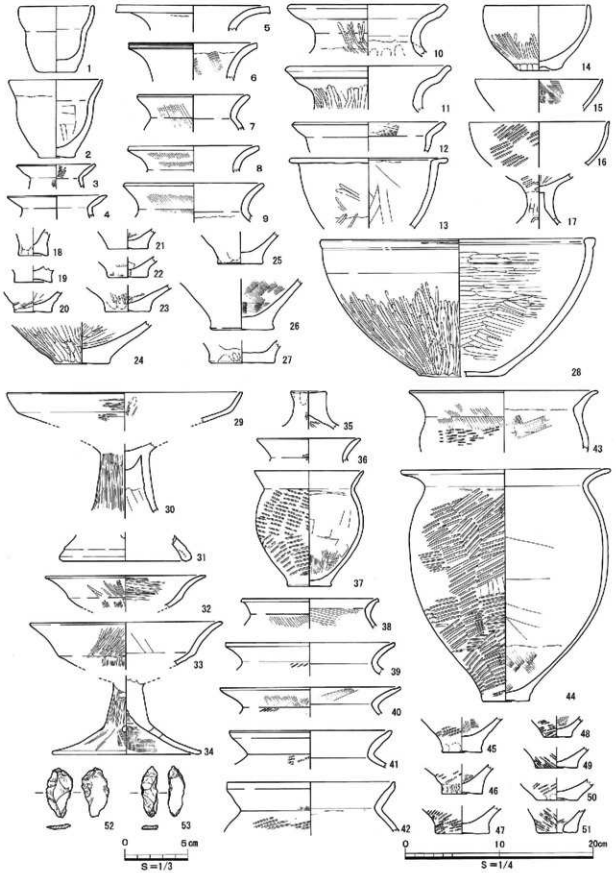
何条もの溝が複合、あるいは掘り直されており、少なくとも３つの輪郭が捉えられる。以下、各溝の埋土について概観したい。埋土１・２は、黒灰色粘土をベースとし、ブロック状に微砂及び礫を包含する。当該溝から出土した遺物は、大半がこの埋土内から出土した。埋土３～６は、暗灰色粘土をベースとする。埋土６は下層部に樹皮（半截して刳り抜いた木か）を貼り付けた状態で検出しており、溝の性格を知る上で興味深い資料の１つとなった。埋土７・８は、黒灰色礫～粗砂をベースとする。

当該溝埋土からは、弥生時代後期の土器や、サヌカイトの剥片が出土した。これらの遺物は主に、埋土６の下層部で検出した樹皮を貼り付けた箇所より上部で出土した。

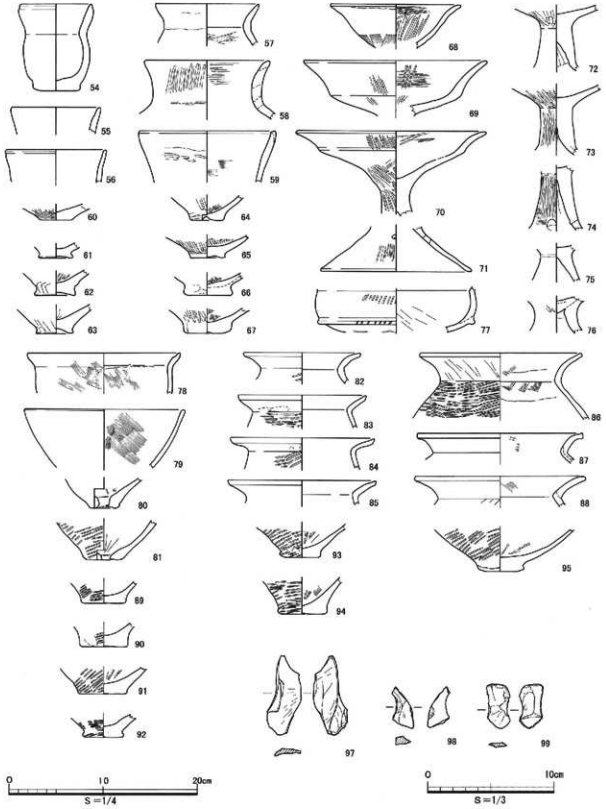
出土した弥生時代後期の土器には、甕（１～11）、鉢(12～17・28)、高杯(29～34)、蓋(35)、甕(36～50)、有孔鉢(51)、壷又は鉢の底部(18～27)、がある。１～４は小形壷。手づくねによって作られたもので、調整は内外面全体にナデ調整を施す粗雑なものである。口縁部形態は、内湾して立ち上がるもの（１・２）と、僅かに肥厚させて外反するもの（３・４）がある。４は底部外面が煤ける。５～11は、広口壷の口縁部。口縁端部形態は、上下に僅かに肥厚させ端面をもつもの（５・６）、下方に僅かに肥厚させ端面をもつもの（８）があり、丸くおさめるもの（７・９）、受口状口縁をもつもの(10・11)がある。外面調整は丁寧な縦方向のヘラミガキを施す。12～16は鉢の口縁部～体部。口縁部形態は、外折するもの(12・13)と、直口して口縁端部を丸くおさめるもの(14・15)がある。17は台付鉢の脚台と推定。残存部分に透孔が残る。18～27の底部の中で、21は内面に煤が付着。26は内面が煤け、底部面に籾圧痕が見られる。28は椀形を呈す大形鉢で、口径29cmを測る。口縁部形態は内湾気味に立ち上がり、端部に面をもつ。底部は突出しない平底を呈す。調整は内面全体に横方向、外面体部～底部に丁寧な縦方向のヘラミガキを施す。内面下半部に黒斑が見られ、外面底部面に煤が付着する。29・32・33は高杯の杯部。杯部形態は、浅い皿形を呈するもの(29)、緩やかに外反するもの(32・33)がある。30・31・34は高杯の脚部。30は円板充填が残る。34は内外面裾部端に黒斑が見られる。35は甕用の蓋。36・38～43は甕の口縁部、37・44は甕の完形品。口縁部形態は、緩やかに外反し、口縁部端部を丸くおさめるもの(36・37)、下方に肥厚し端面をもつもの(38)、「く」の字状に屈曲し、端部を上方に肥厚し端面をもつもの(40・41)、端部を上方につまみ上げたもの(42)、端部を丸くおさめるもの(43・44)がある。37は内外面下半部、39は内外面口縁部が煤ける。44は内面底部に煤が付着し、外面全体が煤ける。45～50は壷又は鉢の底部、51は有孔鉢の底部である。45は外面、46は内外面が煤ける。47は内面に炭化物が付着する。以上の上器から溝の埋没時期は弥生時代後期中頃(河内Ⅴ－３様式)に比定できる。

ＳＤ102〔第５・７図－54～99、図版三〕

３Ｂ－２Ａ地点にかけて検出した溝である。検出幅2.3m以上、深さ6.8m、検出長7.6mを測る。調査地中央部を南東流するが、古墳時代中期以降に派生した自然河川によって削平されており、溝の正確な規模は分からなかった。幅や深さから想定すると大形の溝であったことは確かである。当該溝埋土からは、弥生時代後期の土器や、サヌカイトの剥片が出土した。弥生時代後期の土器



第6図　第1面ＳＤ101出土遺物実測図



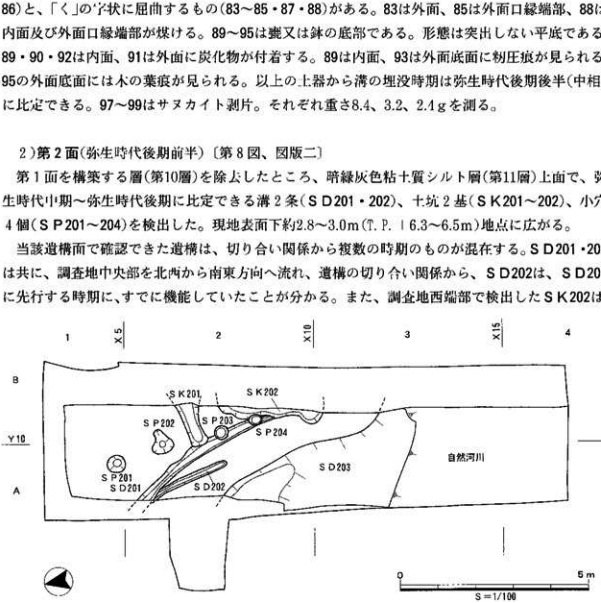
第７図　第１面ＳＤ102出土遺物実測図

には、壷(54～59)、鉢(68)、高杯(69～76)、手焙形土器(77)、鉢(78～81)、甕(82～95)、鉢又は壷の底部(60～67)がある。54は小形壷。手づくねによって作られたもので、調整は内外面全体にナデ調整を施す粗雑なものである。口縁部形態は内傾した後立ち上がる。55～59は直口壷の口縁部。口縁部形態は外反するもの(55・58)と、内湾して立ち上がるもの(56・57・59)がある。57は頸部に粘土継ぎ足しの痕跡が見られる。59は生駒西麓産。69・70は高杯の杯部。杯部形態は、椀形で口縁部が緩やかに外反するもの(68)と、深い皿形で口縁部の外反度が顕著であるもの(69・70)がある。68は外面、69は外面口縁部に黒斑が見られる。71は高杯の裾部。72～76は高杯の脚部。脚部形態は、筒状の脚部をもつもの(73・74)と、円錐台形脚部をもつもの(75・76)がある。74は外面が煤け黒斑が見られる。77は手焙形土器の体部。突帯部分に刻目を施す。内面は煤け、外面底部面が煤ける。78・79は鉢の口縁部～体部。口縁部形態は、外反するもの(78)と、直口して口縁端部を丸くおさめるもの(79)がある。78は内外面に黒斑が見られる。80・81は有孔鉢の底部。ともに径1cm前後の孔を穿つ。82～88は甕の口縁部。口縁部形態は、緩やかに外反するもの(82・86)と、「く」の字状に屈曲するもの(83～85・87・88)がある。83は外面、85は外面口縁端部、88は内面及び外面口縁端部が煤ける。89～95は甕又は鉢の底部である。形態は突出しない平底である。89・90・92は内面、91は外面に炭化物が付着する。89は内面、93は外面底面に刺圧痕が見られる。95の外面底面には木の葉痕が見られる。以上の土器から溝の埋没時期は弥生時代後期後半(中相)に比定できる。97～99はサヌカイト剥片。それぞれ重さ8.4、3.2、2.1gを測る。

2)**第2面**(弥生時代後期前半)〔第8図、図版二〕

第1面を構築する層(第10層)を除去したところ、暗緑灰色粘土質シルト層(第11層)上面で、弥生時代中期～弥生時代後期に比定できる溝2条(SD201・202)、土坑2基(SK201～202)、小穴4個(SP201～204)を検出した。現地表面下約2.8～3.0m(T.P.+6.3～6.5m)地点に広がる。

当該遺構面で確認できた遺構は、切り合い関係から複数の時期のものが混在する。SD201・202は共に、調査地中央部を北西から南東方向へ流れ、遺構の切り合い関係から、SD202は、SD201に先行する時期に、すでに機能していたことが分かる。また、調査地西端部で検出したSK202は、



第8図　第2面調査地平面図

調査地東側方向へ大きく広がると推定でき、当該遺構もＳＤ201廃絶以降に構築されたものである。北西から南東方向に、ほぼ一列に並ぶＳＰ201～204は、当該面で検出した遺構の中で最も時期が新しいものと推定できる〔ＳＤ202→ＳＤ201→ＳＫ202→ＳＫ201→ＳＰ201～ＳＰ204〕。

以下、当該遺構面を総称して「第２面」とし、検出した各遺構の詳細と、出土した遺物について概観する。

溝(ＳＤ)

ＳＤ201〔第９・11図－109、図版二〕

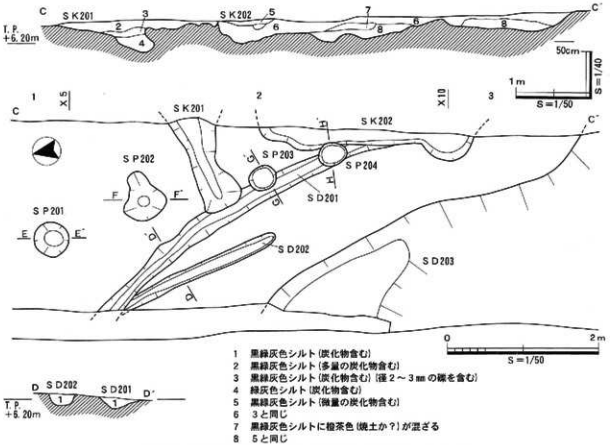
２Ａ－２Ｂ地点にかけて検出した溝である。幅30cm、深さ15～16cm、検出長4.0ｍを測り、調査地中央部を北西から南東へ流れる。

当該溝の埋土は、炭化物を含む黒緑灰色シルトを呈する単一層である。当該溝埋土からは、弥生土器の高杯(109)が１点出土した。109は高杯の杯部。調整は内外面共にヘラミガキ調整を施す。内面に黒斑が見られる。溝の埋没時期は、弥生時代後期前半に比定できる。

ＳＤ202〔第９・11図－110～112、図版二〕

２Ａ地点で検出した溝である。幅16cm、深さ15～16cm、検出長2.3ｍを測り、調査地中央部を北西から南東へ流れる。

当該溝の埋土は、ＳＤ201の埋土と同じ炭化物を含む黒緑灰色シルトを呈する単一層である。当該溝埋土からは、弥生時代後期の壷(110)と、甕(111・112)が出土した。110は長頸壷の口縁部。



第９図　第２面ＳＫ201・202、ＳＤ201・202平面図・断面図

調整は外面に粗雑なヘラミガキ調整を施す。111・112は甕の口縁部。口縁部形態は、内湾気味に立ち上がるもの(111)と、緩やかに外反するもの(112)がある。111は内面に煤、外面に炭化物が付着する。112は外面口縁端部に煤が付着する。溝の埋没時期は、弥生時代後期前半に比定できる。

ＳＤ203〔第９・11図－113～130、図版二・四〕

２Ａ－３Ｂ地点にかけて検出した溝である。検出幅2.1m、検出深度1.2m、検出長4.7mを測り、調査地南部を東流する。肩部南側は、後世に派生した自然河川によって破壊されており、確認できなかった。また、危険深度に達する為、溝の底まで確認することはできなかった。

当該層溝埋土からは、弥生時代後期の土器(113～130)が出土した。113・114は広口壺の口縁部。口縁部形態は下方にやや肥厚し、口縁端部に面をもつ。調整は、113は内面に横方向のヘラミガキ調整を施し、口縁端部面と肩部にヘラ状工具による刻み目を呈する。114は頸部外面に縦方向のハケ目を施す。外面が煤ける。115・116は高杯の杯部で、外反する口縁部をもつ。調整は外面に横方向のヘラミガキ調整を施す。116は有段高杯の名残が見られる。117・118は高杯の脚部。形態は筒状の脚台から裾部が広がるもの(117)と、円錐台形のもの(118)がある。調整は柱状部外面に縦方向のヘラミガキ調整を施す。117の裾部端面には刻み目が見られる。柱状部に煤が付着する。119は小形壺の体部。体部やや下半部に最大径をもつ。調整は外面上半部に粗いハケ目、下半部にヘラミガキ調整を施し、粘土紐接合痕が顕著に残る。内面全体が煤ける。121は椀形の鉢。調整は全体にナデ調整で、粘土紐接合痕が顕著に残る。外面に黒斑が見られる。122～125は甕の口縁部。口縁部形態は、「く」の字に屈曲するもの(122・123・125)と、緩やかに外反し、口縁端部に面をもつもの(124)がある。123は外面が煤ける。124は内面に煤付着。126は内面に炭化物が付着し、外面底部を除く部分が煤ける。127は蓋のつまみ部分。128は甕の底部。129・130は有孔鉢の底部。129は内外面全体が煤ける。130は外面が煤ける。129は生駒西麓産。溝の埋没時期は、弥生時代後期前半(河内Ⅴ－３様式)に比定できる。

土坑(ＳＫ)

ＳＫ201〔第９・11図－105・106〕

２Ｂ地点で検出した土坑である。検出長辺1.3m、検出短辺60cm、深さ40cmを測る。調査地西端で検出した為、正確な規模は不明であるが、調査地から東側へ広がると推定できる。

当該土坑の埋土は、３枚(埋土２～４)に分けることができる。埋土２は、黒緑灰色シルトに、炭・灰・焼土などをわずかに包含する。埋土３は、埋土２をベースとし、径２～３mmの礫が多量に混ざる。埋土４は、緑灰色シルトに、炭・灰・焼土等を包含する。

当該土坑埋土からは、弥生時代後期の高杯(105)、甕(106)が出土した。105は高杯の杯部。口縁部の外反度が顕著である。調整は外面にヘラミガキ調整を施す。106は甕の口縁部。受け口状の口縁部をもつ。外面が煤ける。

ＳＫ202〔第９・11図－107・108〕

２Ｂ－３Ｂ地点にかけて検出した土坑である。検出長辺2.35m、検出短辺20cm、深さ30cmを測る。ＳＫ201と同様に、正確な規模は不明であるが、調査地から東側へ広がると推定できる。

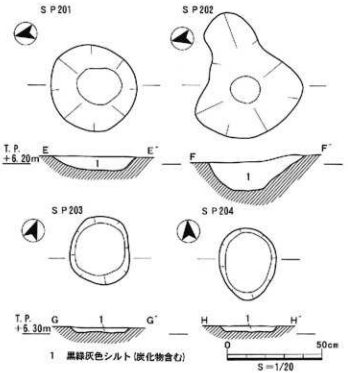
当該土坑の埋土は、４枚(埋土５～８)に分けることができる。埋土５は、黒緑灰色シルト層に、微量の炭化物を包含する。埋土６は、埋土３をベースとし、径２～３mmの礫が多量に混ざる。

埋土７は、黒緑灰色シルト層に焼土と思われる橙灰色土が混ざる。埋土８は、埋土５と同じ。

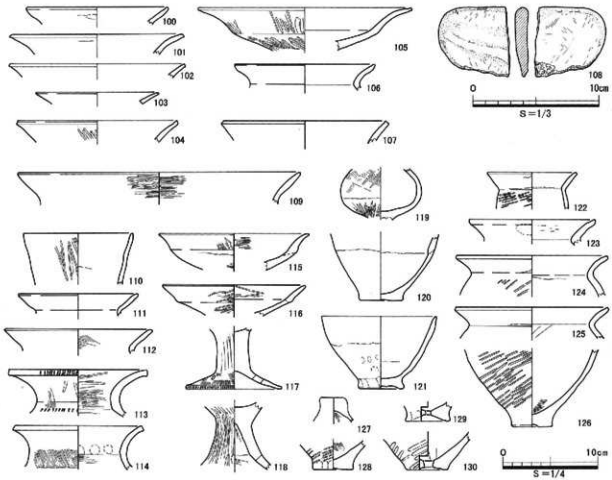
当該土坑埋土からは、弥生時代後期の甕(107)と、砂岩(108)が出土した。107は甕の口縁部。上方に肥厚し口縁部端部に面をもつ。外面に煤が付着。108は扁平で楕円形を呈する。下端に刃こぼれ状の加工痕が見られる。

小穴(ＳＰ)

これらの小穴は、径40～60cm、深さ５～15cmを測る。調査地中央部で検出した小穴で、北西から南東方向に、ほぼ一列に並ぶ。これらの小穴埋土は、炭化物を含む黒緑灰色シルトの単一層である。



第10図　第２面ＳＰ201～204平面図・断面図



第11図　第２面ＳＰ201～203、ＳＤ201～203、ＳＫ201・202出土遺物実測図

ＳＰ201〔第10・11図〕

１Ａ地点で検出した小穴である。半裁して断面を観察したところ、柱の痕跡が確認できた。当該小穴埋土からは、弥生時代後期の甕(100～102)が出土した。100～102は甕の口縁部。口縁端部形態は、丸くおさめるもの(100・101)、ド方に肥厚し、端面をもつもの(102)がある。

ＳＰ202〔第10図〕

２Ａ－２Ｂ地点にかけて検出した小穴である。半裁して断面を観察したところ、柱の抜き取り痕の可能性がある窪みが確認できた。当該小穴埋土からは、遺物は出土しなかった。

ＳＰ203・204〔第10・11図〕

共に２Ｂ地点で検出した小穴である。柱の痕跡等は確認できなかったものの、ＳＰ203の埋土から弥生時代後期の甕(103)、ＳＰ204の埋土から壷(104)の口縁部が出土した。口縁部形態は、103は端部を丸くおさめる。104は上方に肥厚し端面をもつ。

３)第３面(弥生時代前期)

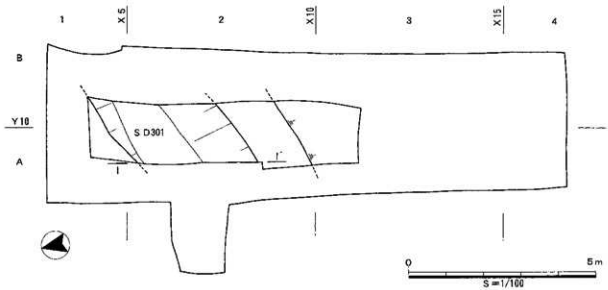
弥生時代中期～前期の遺物を包含する層(第14・15層)を除去したところ、緑青色礫混シルト～微砂層(第16層)上面で、弥生時代前期に比定できる溝１条(ＳＤ301)を検出した。現地表面ド約3.8～4.0m(T.P.＋5.2～5.4m)地点に広がる。当該遺構面は、北から南方向へ緩い傾斜状に低くなる。この為、ＳＤ301は調査地中央部を北東～南西方向へ流れるものと推察できる。

以ド、当該遺構面を「第３面」と呼称し、検出した遺構の詳細と、出土した遺物について概観する。

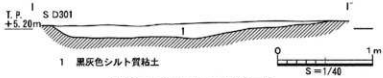
溝(ＳＤ)

ＳＤ301〔第13・14図－131～139、図版四〕

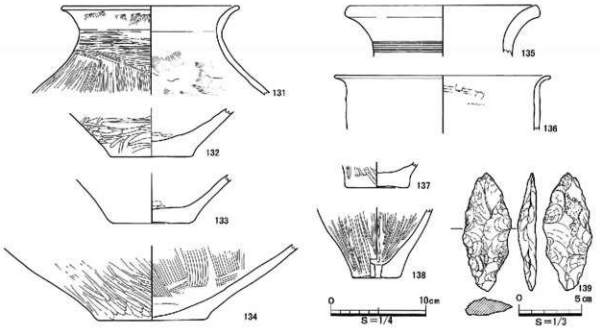
１Ｂ－２Ａ地点にかけて検出した溝である。幅2.6m、深さ16cm、検出長1.8mを測る。調査地中央部を北東～南西方向へ流れる。



第12図　第３面調査地平面図



第13図　第３面ＳＤ301断面図



第14図　第３面ＳＤ301出土遺物実測図

当該溝の埋土は、黒灰色シルト質粘土を呈する単一層である。当該層埋土からは、弥生時代前期の土器(131～138)と、石製品(139)が出土した。131・135は広口壷の口縁部。口縁端部形態は上下にやや肥厚させ丸く終わる。135は頸部に６条の沈線文を施す。時期は弥生時代前期(河内Ⅰ－２様式)に比定できる。132～134は壷の底部。132は、外面調整でヘラミガキ調整を施す。外面全体に黒斑が見られる。133は、器壁の摩滅が著しい為、調整不明瞭である。底面を除く外面全体が煤ける。134は、内面に縦方向のハケ目、外面に縦方向のヘラミガキ調整を施し、底面にはヘラケズリを施す。136は甕の口縁部。屈曲する口縁部を持ち、端部を丸く終わる。外面に煤が付着する。137は底部。138は有孔鉢の底部。調整は内外面全体に丁寧な縦方向のヘラミガキを施す。133・135～137は生駒西麓産。139は石槍の未成品。断面は菱形で、側縁には上下両面からの粗い剥離が見られる。重さ43.0ｇを測る。サヌカイト製。

4)包含層出土遺物

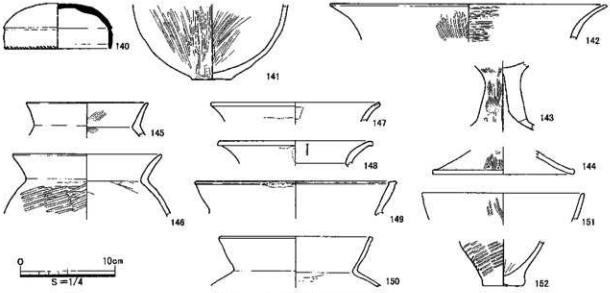
自然河川出土遺物〔第15図－140～152、図版四〕

今回の調査では、当該河川構築面については平面調査しなかった為、ここでは包含層出土遺物として取り上げ、出土した遺物について概観したい。なお、当該河川は、古墳時代中期の遺物を包含する暗(第6層)を除去し、現地表面下約2.1m(T.P.＋7.0m前後)地点から構築されたものである。規模は、調査地外にさらに広がることから不明であるが、調査地南半部を北西から南東方向へ流れる。

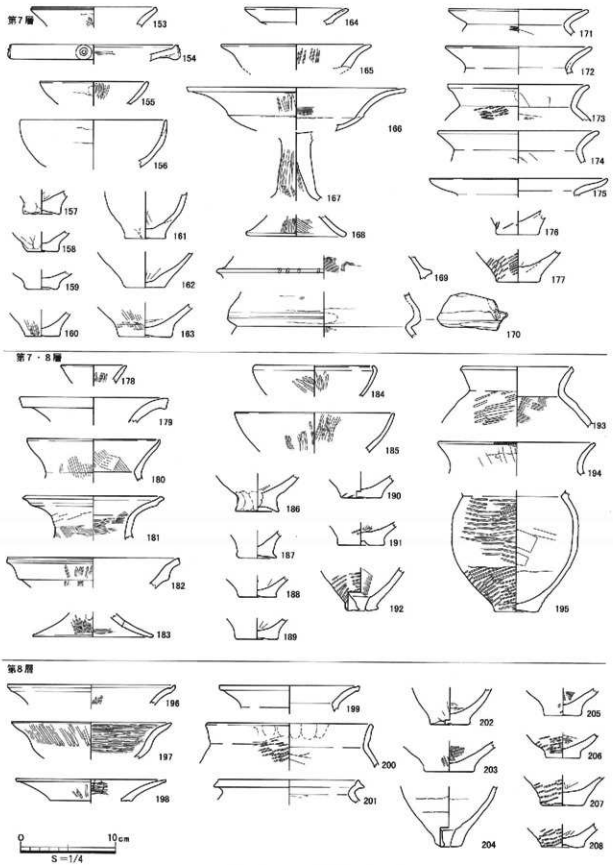
当該河川埋土から、弥生時代後期～古墳時代中期までの幅広い時期差のある土器(140～152)が出土した。140は須恵器の杯蓋。時期は古墳時代中期に比定できる。141～152は弥生時代後期～古墳時代前期の土器。141は壺又は鉢の底部で、体部下半部は丸く、突出しない平底をもつ。調整は内外面に丁寧なヘラミガキを施し、底面にはヘラケズリを施す。体部外面には黒斑が見られる。142は高杯の杯部、143・144は脚部である。142は外反度が顕著である口縁部をもち、調整は内外面に丁寧なヘラミガキを施す。143・144の外面にもヘラミガキが見られる。145～150は甕の口縁部で、149は布留式甕、150は布留式傾向甕である。口縁部形態は、「く」の字に屈曲し端部が丸くおわるもの(145～147)、下方に肥厚するもの(148)がある。143は外面全体が煤け、頸部に煤が付着する。147は外面に煤が付着、149は外面に煤付着。152はドーナツ状の平底をもち、調整は内面に工具痕がみられ、外面にタタキを施す。外面に煤が付着する。151は鉢又は高杯の口縁部で、口縁端部は丸く終わる。河川の埋没時期は、古墳時代中期に比定できる。

第7層出土遺物(第16図－153～177)

当該層が包含する遺物は、弥生時代後期後半(中相)の土器が大半を占める。153・154は、広口壺の口縁部。口縁端部形態は、受け口状を呈するもの(153)と、上下に肥厚するもの(154)がある。154は口縁部端面に竹管文を施した円形浮文を貼り付ける。155・156は椀形を呈する鉢の口縁部。接合痕が顕著に残る。164～166は有稜高杯の杯部。杯部形態は、口縁部が緩やかに外反するもの(164・165)と、口縁部の外反度が顕著であるもの(166)がある。166は内外面に黒斑が見られ、167



第15図　自然河川出土土器実測図



第16図　第７・８層出土土器実測図

は内外面が煤ける。167は生駒西麓産。169・170は手焙形土器の体部片。体部の捩れ部分が残存する。171～175は甕の口縁部。口縁部形態は、「く」の字状に屈曲するもの(171・173～175)と、緩やかに外反するもの(172)がある。171は口縁部外面に水分が噴出したような痕跡、172は外面に黒斑が見られる。157～162は壺または鉢、163は壺、176・177は甕の底部。163は外面に黒斑が見られ、177は内面全体が煤ける。176の内面底部は炭化物が残り、底面に木葉痕が見られる。

第7・8層(側溝)出土遺物(第16図－178～195、図版五)

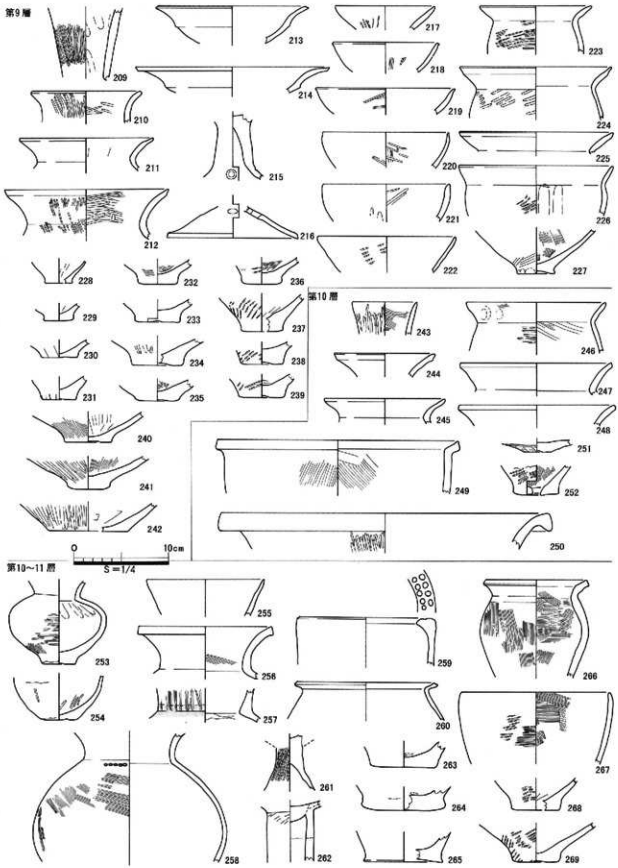
当該層が包含する遺物は、弥生時代後期後半(中相)の土器が大半を占める。178は壺の口縁部。179は広口壺、180は直口壺、181は二重口縁壺の口縁部。181は内面全体に煤ける。182は高杯の杯部。皿形を呈し、口縁端部に面をもつ。内外面が煤ける。184・185は椀形の鉢で、184は内湾する口縁部をもつ。186は鉢、187～189は壺又は鉢、190・191は甕の底部。189は底面を除く外面全体に煤が付着、191は外面が煤ける。187・189は生駒西麓産。192は有孔鉢の底部。193は甕の口縁部。口縁部形態は、緩やかに外反し端部を上下に肥厚する。195は底部内面に炭化物が残る。外面は底面を除いて全体に煤ける。

第8層出土遺物(第16図－196～208)

当該層が包含する遺物は、弥生時代後期後半(中相)の土器が大半を占める。196は広口壺の口縁部。受け口状を呈する。生駒西麓産。197は台付鉢。内面口縁部から外面口縁端部にかけて煤ける。198は有稜高杯の杯部で、皿形で口縁部の外反度が顕著である。199～201は甕の口縁部。口縁部形態は、「く」の字状に屈曲するもの(199)と、ほぼ直立するもの(200)と、屈曲して上下に肥厚する口縁端部をもつもの(201)がある。201は口縁端部外面に煤付着。199は外面全体、201は口縁端部外面に煤付着。200は外面全体が煤ける。204は有孔鉢の底部。202・203・205～208は、甕の底部。207は外面に黒斑、208は内外面が煤ける。

第9層出土遺物(第17図－209～242)

当該層が包含する遺物は、弥生時代後期後半(中相)の土器が大半を占める。209は細頸壺の口縁部で、外面に丁寧なヘラミガキ調整を施す。210～212は、広口壺の口縁部。口縁端部形態は、面をもつもの(210)と、受け口状を呈するもの(211)と、先端を細くするもの(212)がある。210は口縁端部外面が煤ける。211は外面に黒斑が見られる。213・214は高杯の杯部。杯部形態が、椀形で口縁部が緩やかに外反するもの(213)と、皿形で口縁部の外反度が顕著なもの(214)がある。215・216は高杯の脚部。215は外面屈曲部に竹管文を施す。216は裾部に1孔残存する。217～222は椀形の鉢。220・221はやや内湾する口縁をもつ。218は外面に黒斑が見られる。223～225は甕の口縁部。口縁部形態は、丸くおさめるもの(223)と、受け口状を呈するもの(224)がある。223は内外面、224は口縁端部、225は外面が煤ける。227は鉢、228～231は壺または鉢、232～235・240は壺、236～239は甕の底部。229・235は底面に籾圧痕が見られる。232・237・239は外面、236は内面が煤ける。231は外面に黒斑が見られる。



第17図　第９～11層出土土器実測図

第10層出土遺物(第17図－243～252、図版五)

当該層が包含する遺物は、弥生時代後期前半(河内V－3様式)の土器が大半を占める。243は小形長頸壺、244は小形広口壺の口縁部。243は外面にヘラミガキ調整、内面にハケ目を施す精製品である。245～248は甕の口縁部。口縁部形態は、内湾するもの(245)と、端部を丸くおさめるもの(246)と、端部に面をもつもの(247・248)がある。246は外面に煤が付着。249は大形鉢の口縁部～体部。全体にハケ目調整を施す。250は大形広口壺の口縁部。下方に肥厚する口縁部をもつ。頸部内面に煤が付着。生駒西麓産。251は底部で、内面全体が煤ける。252は有孔鉢の底部である。

第10～11層出土遺物(第17図－253～269、図版五)

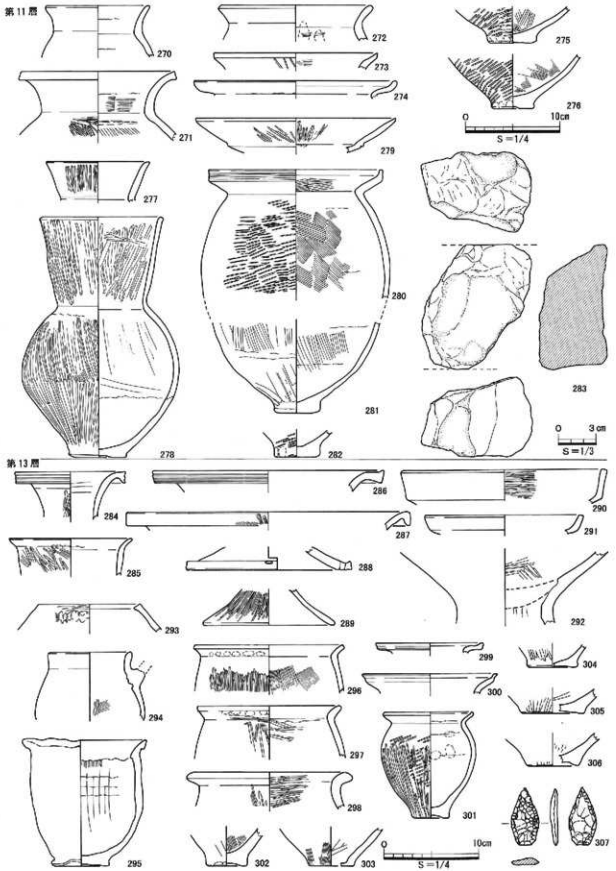
当該層が包含する遺物は、弥生時代後期前半(河内V－2様式)の土器が大半を占める。253・254は小形壺の体部～底部。254は内面に煤が付着、外面に黒斑が見られる。255は直口壺、256・257は広口壺の口縁部で、頸部外面に朱が残る。258は広口壺の頸部～底部。外面にハケ目調整、体部上半部に竹管文を施す。外面に煤が付着。259は鉢の口縁部の可能性が考えられる。口縁端部に面をもち、2列に円形浮文を貼り付ける。生駒西麓産。260は甕の口縁～肩部。口縁形態は受け口状を呈し、肩部に最大径をもつ。口縁部内面及び外面に煤が付着する。261・262は高杯の脚部。短い柱状の脚台をもつもの(261)と、太い柱状の脚台をもつもの(262)がある。261は外面が煤ける。262は円板充填をもつ。263～265は壺、268・269は甕の底部。268は内面が煤け、外面に黒斑が見られる。269は内面に炭化物が付着する。266は甕の口縁部～体部。口縁部は緩やかに外反し、端部に面をもつ。内外面共に細かいハケ目調整を施す。内外面全体が煤ける。267は椀形の鉢。口縁部は未調整である。263・266は生駒西麓産。

第11層上面～13層出土遺物(第18図－270～307、図版六)

第11層上面の精査時及び第11層内から出土したもの(270～283)と、第13層内から出土したもの(284～307)に分けて概要を述べたい。

第11層上面及び第11層内から出土した遺物は、弥生時代後期前半(河内V－2様式)の土器が大半を占める。270は小形直口壺、271は広口壺、277・278は長頸壺。270は口縁端部を丸くおさめ、調整は、内外面全体をナデ調整で仕上げる。頸部には粘土紐接合痕が残る。271は上下に肥厚させる口縁部をもつ。調整は、外面にヘラミガキ調整、内面にハケ目調整を施す。頸部の粘土紐接合痕が顕著に残る。277・278は、口縁端部を丸くおさめる。277は外面に縦方向のヘラミガキ調整を施し、頸部外面に朱が残る。278は内外面に縦方向のヘラミガキ調整を施す。底面～体部下半に黒斑が見られる。生駒西麓産。279は有段高杯の杯部。内外面共にヘラミガキ調整を施す。272～274は甕の口縁部。口縁部形態は、緩やかに外反する口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめるもの(272)と、受け口状の口縁部をもつもの(273・274)がある。272は外面に煤が付着。273は口縁端部内面と外面が煤ける。281はほぼ完形の鉢。口縁部は未調整であるため、甕の製作途中に鉢へと転用したものと推察できる。生駒西麓産。275・276・282は甕の底部。275は外面が煤け、276は内面に黒斑が見られる。280・281は生駒西麓産。283は砥石。3面を使用。重さ55.0g。砂岩製。

第13層内から出土した遺物は、弥生時代後期前半(河内V－2様式)の土器が大半を占める。284は小形広口壺、285は長頸壺、286・287は広口壺の口縁部。口縁部形態は、下方に肥厚する口縁部を



第18図　第11層上面～13層出土遺物実測図

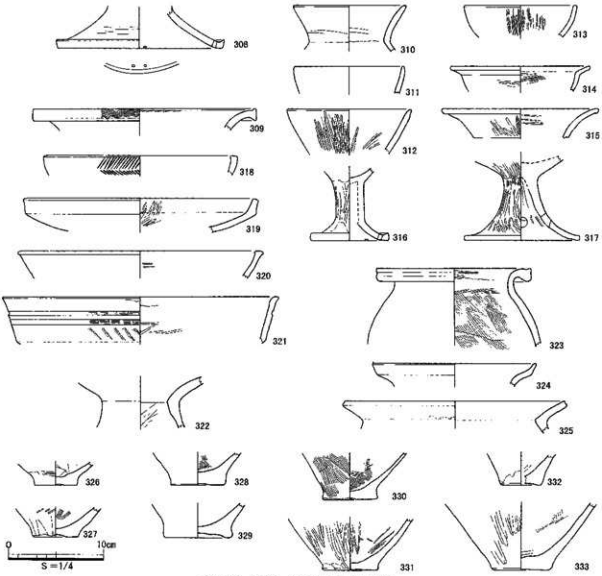
もち、端面に擬凹線(284)や櫛描き簾状文(287)を施すものや、上下に肥厚する口縁部をもち、端面に擬凹線を施すもの(286)がある。284・285は外面が煤ける。286・287は生駒西麓産。288は甕の蓋で、端部に面をもつ。生駒西麓産。289は高杯の脚部、290～292は杯部。289の形態は裾広がりで、外面に丁寧なヘラミガキ調整を施す。290・291の形態は皿形を呈する。292は円板充填が残る。293は無頸壺の口縁部。外面に粗略化された櫛描き波状文が残る。生駒西麓産。294は小形水差し。内面が煤ける。生駒西麓産。295～301は甕。口縁部形態は、緩やかに外反し、丸みを帯びた短い口縁部をもつもの(295～298)、受け口状口縁部をもつもの(299・300)、上方に肥厚し端面をもつもの(301)がある。295は外面に煤が付着する。296は外面が煤ける。298は口縁部外面に黒斑が見られる。302・303は壺または鉢、304は甕、305は壺の底部。303は内面、304・305は外面が煤ける。304は生駒西麓産。307は石鏃の未成品。周縁に細かい押圧剥離がみられる。重さ1.6g。サヌカイト製。

第13～16層出土遺物(第19図－308～333)

当該層が包含する遺物は、弥生時代中期後半～後期前半(河内Ⅳ－3・4～Ⅴ－2様式)の土器が見られる。308は甕用の蓋。裾部端部を上下に肥厚し、端面をもつ。裾部には2孔を穿つ。端面を含む裾部に朱が残る。生駒西麓産。309は広口壺の口縁部。口縁端部は上下に肥厚し、端面に櫛描き波状文を施す。310・311は直口壺の口縁部。共にナデ調整で仕上げる。312～314は鉢の口縁部～体部。形態は、深い椀形(312)や、丸い椀形(313)や、椀形で外反する口縁部をもつもの(314)がある。315・318～321は高杯の杯部。形態は、口縁部が広がるもの(315)と、皿形で口縁部端部に面をもつもの(318～321)がある。316・317は高杯の脚部。形態が、柱状の脚台をもち裾部に6孔を穿つ(316)と、柱状の脚台をもたず4孔を穿つ(317)がある。316は内外面全体に煤が付着。生駒西麓産。322は台付鉢。323～325は甕の口縁部。口縁部形態は、上下に肥厚し、端面に擬凹線を施すもの(323)や、受け口状のもの(324)や、「く」の字状に屈曲し、端面に面をもつもの(325)がある。323は内外面に煤が付着。324は外面が煤ける。326～333は底部。326は内外面、330は内面が煤ける。327は外面に煤が付着する。328は内面、331は外面に黒斑が見られる。

第14層出土遺物(第20・21図－334～392、図版六・七)

当該層が包含する遺物は、弥生時代中期後半(河内Ⅳ－3・4様式)の土器が大半を占める。334は短頸壺の完形。形態は体部上半に最大径をもち、口縁端部は下方に肥厚する。調整は、内面にケズリを施し、外面全体に丁寧な縦方向のヘラミガキ調整を施す。体部外面に黒斑が見られる。335～339は広口壺の口縁部。口縁部の形態は、上下にやや肥厚しているもの(335～338)、下方に肥厚するもの(339)がある。口縁部端面には、縦方向の刻み目を施すもの(335)、櫛描き簾状文を施すもの(336)、4条の沈線を施すもの(337・338)がある。335・336・339は生駒西麓産。340・341は無頸壺。体部は丸みをもつ。340には紐孔が1孔残存する。342は長頸壺の体部。2条の突帯文を施す。調整は、内面はナデと指頭圧痕がみられ、外面は丁寧なヘラミガキ調整を施す。内面全体が煤け、外面下半部に黒斑が見られる。343～348は高杯の杯部で、皿形を呈する。口縁端部の形態は、肥厚して端面をもつもの(343～345)、丸くおさめるもの(348)がある。343は外面に黒斑が見られる。348は外面に煤が付着。生駒西麓産。349・350は高杯の脚部。裾部端面は上方に肥厚



第19図　第13～16層出土土器実測図

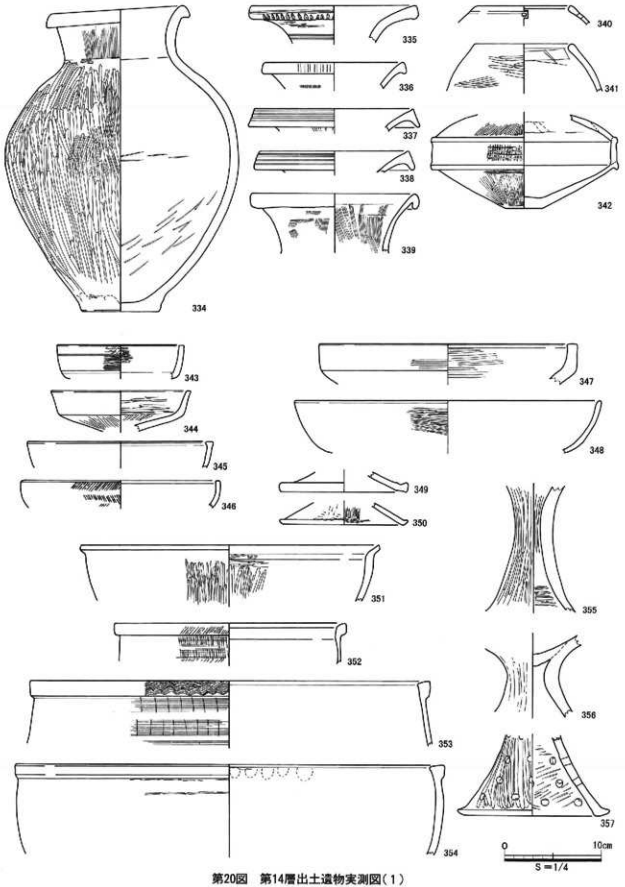
し、端部に面をもつ。350は端面が煤ける。351は鉢。口縁部は外反し、口縁端部をつまみあげる。調整は、内外面にヘラミガキ調整を施し、外面は煤ける。352は台付鉢。調整は、外面にハケ目を施す。生駒西麓産。353・354は段状口縁をもつ大形鉢。353は口縁部に櫛描波状文、体部上半に簾状文を施す。口縁部外面に黒斑が見られる。354は内側に肥厚する段状口縁をもつ。口縁体部外面が煤ける。生駒西麓産。355～357は台付鉢または高杯の脚部。357は3段の円孔を穿つ。358・359は椀形の鉢。調整は内外面にヘラミガキ調整を施す。360は有孔鉢で、突出しない平底をもつ。調整は、内面に丁寧なハケ目、外面にヘラミガキ調整を施す。外面に黒斑が見られる。361は把手付鉢の底部で、突出しない平底をもつ。生駒西麓産。362は甕用蓋で、つまみ部分が残存する。内外面が煤ける。363～369は甕の口縁部。口縁端部の形態は、丸くおわるもの(363・365)、端部に面をもつもの(366)、下方に肥厚するもの(368・369)がある。368・369は共に大形甕。363は外面下半部と口縁部に煤が付着、365は外面全体に煤が付着、内面に炭化物が付着。366は内面、367は外面が煤ける。365・368・369は生駒西麓産。370～378は壺または鉢、379～386は甕の底部。370・386は外面、384は内面に煤付着。372は底面、373は外面、378・380は内面が煤ける。376・377は

外面に黒斑が見られる。378・380は生駒西麓産。387は土製円板の未成品。周囲を粗く割りとったものである。388～392石製品。388は砥石。周囲を粗く割り取り3面を使用。389は、周囲を粗く削り取る。側面に煤付着。溝状の窪み2条あり。388・389は砂岩製。重さ110.0、4.1ｇ。390～392はサヌカイト剥片。それぞれの重さ12.3、100.0、34.4ｇを測る。

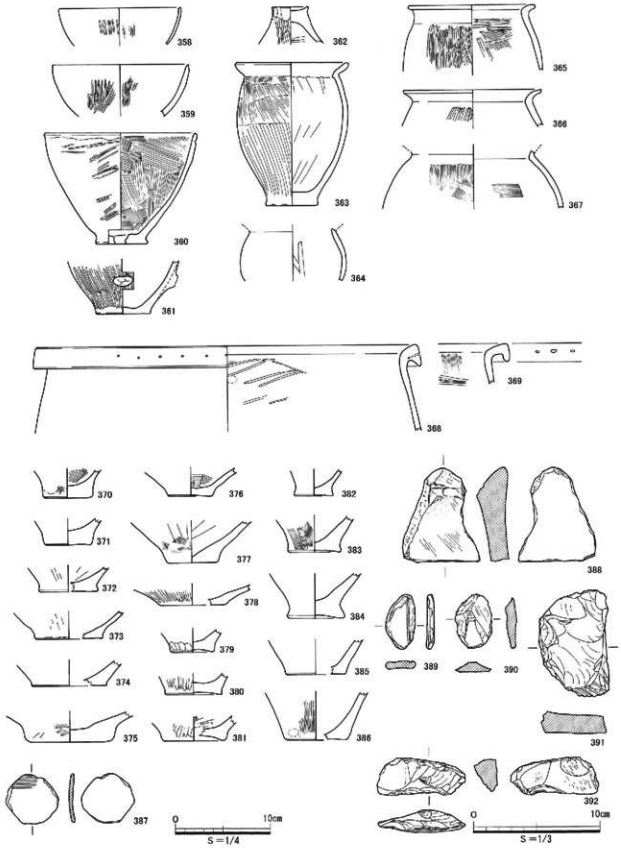
第15層出土遺物（第22図－393～426、図版六・七）

当該層が包含する遺物は、弥生時代中期後半（河内Ⅳ－3・4様式）の土器が大半を占める。393～395・418～421は広口壺、396は短頸壺の口縁部。口縁端部形態は、下方に肥厚するもの（393～395・419～421）、上下に肥厚するもの（396・418）がある。さらに口縁部端面に、縦方向の刻み目を施すもの（393・418）、円形浮文を貼り付けるもの（394）、櫛描簾状文を施すもの（395・419）が見られる。なお394は円形浮文部分に朱が残る。393は外面端部煤け、396は外面に炭化物付着。393～395は生駒西麓産。397は椀形の鉢。外面全体に煤ける。398は大形鉢で、段状口縁をもつ。399は皿形の高杯。外反する口縁部をもつ。400・401は高杯または台付鉢の脚部。402～406は甕の口縁部。形態は、体部上半部に最大径をもつもの（402・403）、体部下半部に最大径をもつもの（404～406）がある。口縁端部形態は、屈曲して口縁端部に面をもつもの（402・403・406）、丸く終わるもの（404）がある。402・419は口縁端部、404は外面が煤ける。402・403・405は生駒西麓産。407～413・422・423は壺、414・415は甕の底部。409は底面、414は外面に煤が付着。414は外面が煤ける。409～411・415は生駒西麓産。416・417は土製円板の未成品。周囲を粗く割りとったものである。417は生駒西麓産。424～426は石製品。424は砥石。1面を使用。周囲の欠損は著しい。重さ244.5ｇ。砂岩製。425は敲打石の可能性が高い。重さ190.0ｇ。砂岩製。426はサヌカイト剥片。重さ13.6ｇ。

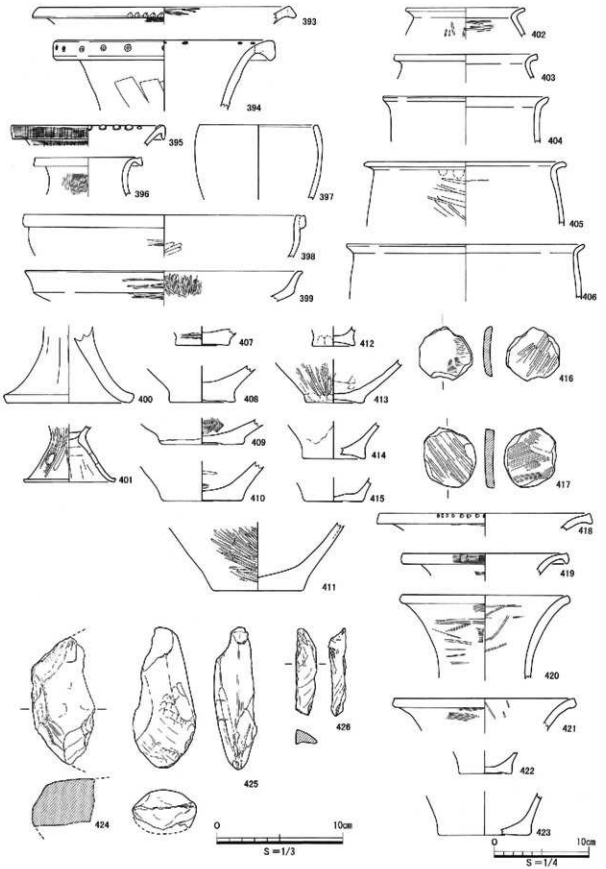
参考文献
石神　怡　1971『八尾市亀井遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
田代克己・中井貞夫　1972『亀井遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会
山辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
　1981『須恵器大成』角川書店
寺沢　薫・森岡秀人　1989『河内地域』『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅰ』木耳社
中井貞夫　1973『亀井遺跡発掘調査概要・Ⅲ』大阪府教育委員会
原田昌則　2003『第5章第1節中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半（庄内式古相）の土器の細分試案について』『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会
広瀬和雄　1986『第6章第2節弥生時代の集落』『亀井（その2）』大阪府教育委員会（財）大阪府文化財センター
若林邦彦・一ノ瀬和夫・岡山清一　2000『大阪の弥生遺跡Ⅲ－遺跡検討会の記録－』大阪の弥生遺跡検討会



第20図　第14層出土遺物実測図(１)



第21図　第14層出土遺物実測図(２)



第22図　第15層出土遺物実測図

第3章　まとめ

今回の調査では、弥生時代後期後半（第1面）・弥生時代後期前半（第2面）・弥生時代前期（第3面）の時期に該当する3枚の遺構面を確認した。また、下層掘削で確認できた第17層の礫層が地山にあたることが推測できた。なお確認した第17層は、調査地中央部で窪地状に著しく下がっている為、当該層上面の平面的な調査は不可能であり、直上層である第16層の上面を最終調査面とした。調査地中央部で確認できた窪地は、弥生時代後期まで影響を及ぼしていたことが堆積状況より推察できた。

以下、これらの地形の特徴や、検出した遺構から、当時の土地活用の様子を時期別に考察したい。

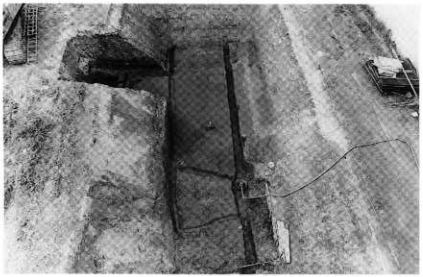
弥生時代前期になると、亀井遺跡では各地で集落跡が確認されており、小規模な集落が点在するようになる。今回の調査地でも人為的に掘削された溝を2条検出した。しかし、当該時期の堆積層は、弥生時代中期以降にみられるような多量の遺物を包含する遺物包含層とは異なり、数点の遺物を包含する層であった。今回の調査成果により、当該時期における集落形態が、大規模で広範囲に広がるものではなく、小規模な居住空間をもって点在していたことを再度裏付けることとなった。調査地で確認した遺構によって、亀井遺跡南東部に位置する当該調査地周辺にも居住域が点在していたことが明らかとなった。

弥生時代中期になると、当該調査地東部で行った第1次調査では土器棺及びそれに伴なう周溝を確認しているが、今回の調査では溝を検出するのみであった。この溝はおそらく周溝の一部の可能性が高い。近畿道周辺調査地より墓域としては希薄な地域であった。近畿道周辺調査地では、当該時期の濃密な遺物包含層が確認できるが、今回の調査地周辺地域では弥生時代後期以降に、より濃密な遺物包含層が目立つ。以上より、当該地域は弥生時代後期に最も栄えると推察でき、亀井遺跡内で考えると、近畿道から徐々に東地域へ集落が広がっている可能性が推測できる。

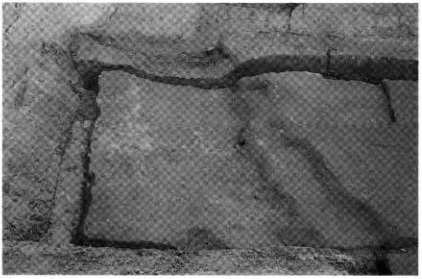
弥生時代後期前半になると、立地環境が最も安定した時期をむかえる。今回の調査では、最も遺構が顕著に確認できた時期であり、何枚もの遺物包含層も確認できた。当該遺構面では、小穴や土坑などの居住域の存在が示唆できる遺構を検出しており、当調査地が居住域であったことは明確である。当該時期に堆積した数枚もの遺物包含層（第7～13層）には、約1mにわたって遺物が切れ目無く含まれており、この中に何時期もの生活面が複合して存在していることは明確である。

弥生時代後期後半になると、自然環境が再び不安定となり、既往の発掘調査でも洪水堆積物層が顕著に見られる。今回の調査では、何度も掘りなおされた溝（ＳＤ101）を確認するに留まったことから、従来の説どおり、当時期を境に、人が生活する上で不向きな地盤となりつつあることが想像できる。さらに上層部では、古墳時代中期以降の流水堆積物層が確認できたことから、当時期以降、調査地周辺は集落部から離れていたことは明らかである。

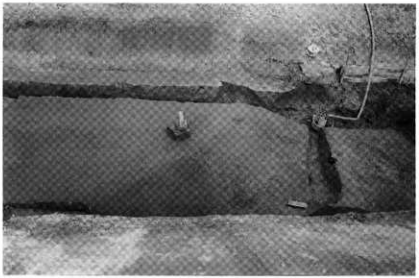
図　版



第１面全景（南から）

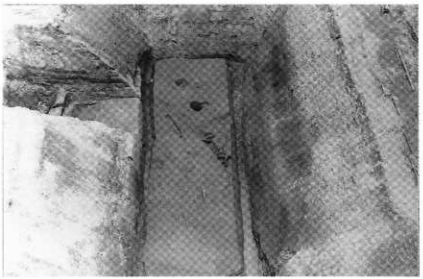


ＳＤ101検出状況（西から）



ＳＤ102検出状況（西から）

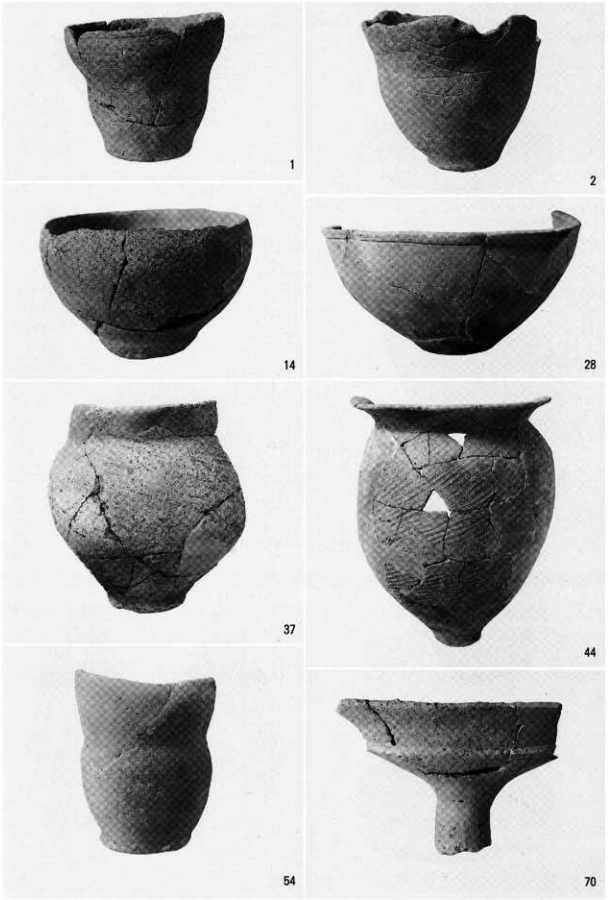
図版二



第2面全景(南から)

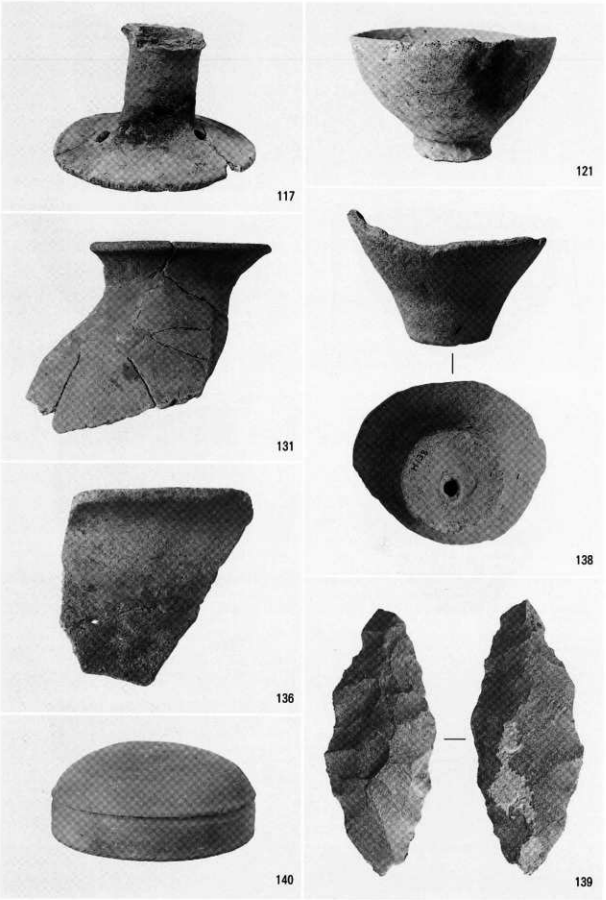
第2面遺構検出状況(西から)

第3面全景(北から)

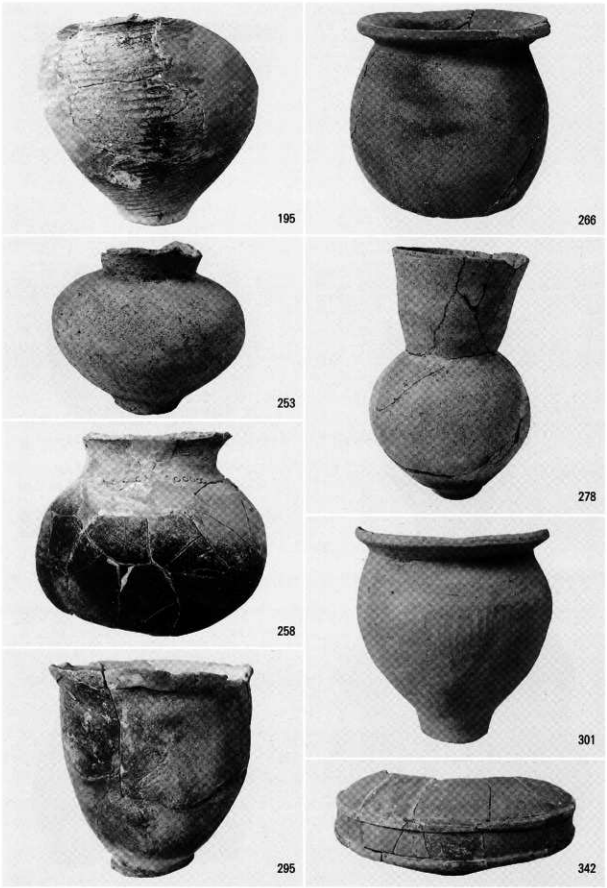


SD101(1・2・14・28・37・44)、SD102(54・70)出土遺物

図版四

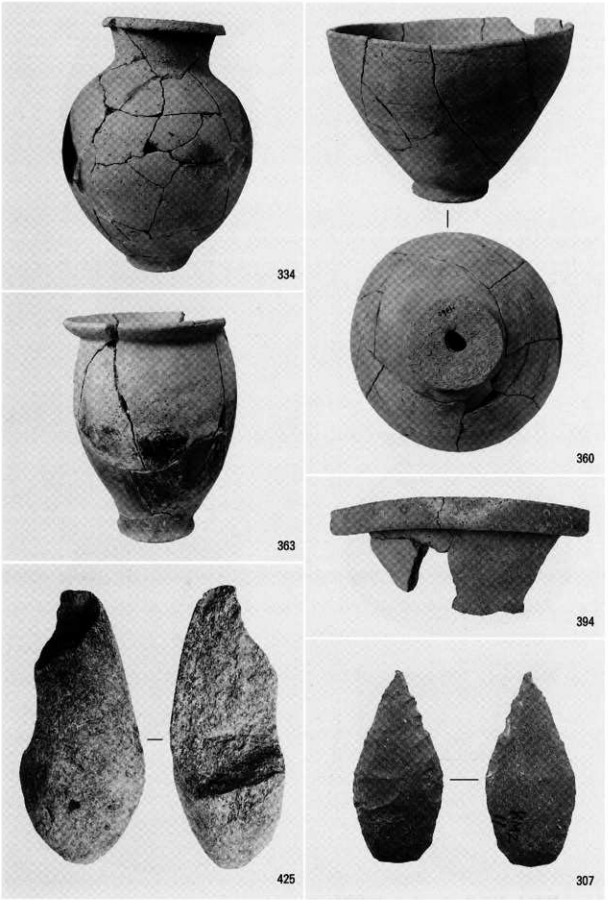


S D 203(117・121)、S D 301(131・136・138・139)、自然河川(140)出土遺物

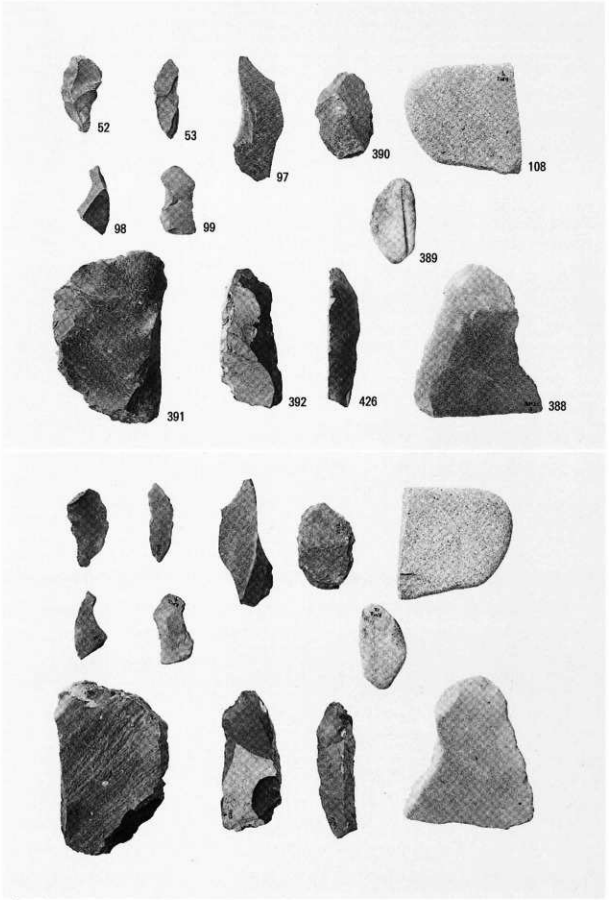


第7・8層(195)、第10層(245)、第10・11層(253・266)、
第11層(278)、第13層(295・301)、第14層(342)出土遺物

図版六



第 13 層(307)、第 14 層(334・360・363)、第 15 層(394・425)出土遺物



石製品(52・53・97～99・108・388～392・426)〔上〈A面〉、下〈B面〉〕

Ⅱ 小阪合遺跡第18次調査（ＫＳ89－18）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市青山町３丁目で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告である。
1．本書で報告する小阪合遺跡第18次調査（ＫＳ89－18）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は平成元年４月４日から４月28日（実働22日）にかけて、成海佳子を担当者として実施した。調査面積は約200㎡を測る。
1．現地調査においては小西博樹・山内千恵子が参加した。
1．整理業務は、現地調査終了後、随時実施し平成18年12月に完了した。
1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－北原清子・棚橋佐知子・長野琢磨・宮崎寛子・村田知子・山内、図面トレース－山内、遺物写真撮影－尾崎良史・原田昌則が行った。
1．本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに……31
第２章　調査概要……31
　第１節　調査の方法と経過……31
　第２節　基本層序……35
　第３節　検出遺構と出土遺物……36
　　１）検出遺構……36
　　２）遺構に伴わない出土遺物……62
第３章　まとめ……66

挿 図 目 次

第１図　調査地周辺図……32
第２図　調査位置図……34
第３図　調査区設定図……35
第４図　ＳＤ121出土遺物実測図……36
第５図　第１トレンチ西壁、第２トレンチ東壁断面図……37－38
第６図　第１面検出遺構平面図……39
第７図　ＳＤ122出土遺物実測図……40
第８図　ＮＲ101出土遺物実測図……41
第９図　第２面検出遺構平面図……43
第10図　第４面検出遺構平面図……45
第11図　ＳＥ401出土遺物実測図……46
第12図　ＳＫ402出土遺物実測図……46
第13図　ＳＫ404・ＳＫ405出土遺物実測図……47
第14図　ＳＤ402出土遺物実測図……47
第15図　ＳＤ412出土遺物実測図－１……49
第16図　ＳＤ412出土遺物実測図－２……50
第17図　ＳＤ412出土遺物実測図－３……51
第18図　ＳＤ412出土遺物実測図－４……52
第19図　ＳＤ412出土遺物実測図－５……53
第20図　ＳＤ412出土遺物実測図－６……54
第21図　ＳＰ401・ＳＰ417・ＳＰ427・ＳＰ444・ＳＰ477出土遺物実測図……57
第22図　ＳＰ344・ＳＰ345・ＳＰ377出土遺物実測図……58
第23図　ＳＷ401出土遺物実測図－１……59
第24図　ＳＷ401出土遺物実測図－２……60
第25図　ＳＷ401出土遺物実測図－３……61
第26図　第２トレンチ　第11層出土遺物実測図－１……63
第27図　第２トレンチ　第11層出土遺物実測図－２……64
第28図　第２トレンチ　第11層出土遺物実測図－３……64
第29図　第２トレンチ　第11層出土遺物実測図－４……65

表 目 次

第１表　周辺調査一覧表……33－34
第２表　第４面　小穴（ＳＰ）法量表……55－56

図 版 目 次

図版 一　第1トレンチ　第1面全景
　　第1トレンチ　第2面全景
図版 二　第1トレンチ　第4面全景
　　第2トレンチ　第4面全景
図版 三　第2トレンチ　第4面遺構検出状況
　　第2トレンチ　第4面SE401検出状況
図版 四　第2トレンチ　第4面SD412検出状況
　　第2トレンチ　第4面左SP472、右SP473
図版 五　SD121、SD122、NR101出土遺物
図版 六　SE401、SK402、SK404出土遺物
図版 七　SD412出土遺物
図版 八　SD412出土遺物
図版 九　SD412出土遺物
図版 一〇　SD412出土遺物
図版 一一　SD412、SP444、SP445、SP477出土遺物
図版 一二　SP401、SP417、SP427、SP444、SP477、SW401出土遺物
図版 一三　SW401出土遺物
図版 一四　SW401出土遺物
図版 一五　SW401出土遺物
図版 一六　第2トレンチ第11層出土遺物
図版 一七　第2トレンチ第11層出土遺物
図版 一八　第2トレンチ第11層出土遺物

第1章　はじめに

小阪合遺跡は大阪府八尾市のほぼ中央部の若草町、小阪合町1・2丁目、南小阪合町1・2・4丁目、青山町1～5丁目、山本南7・8丁目一帯の東西0.9km、南北0.9kmに広がる弥生時代中期から近世に至る複合遺跡である。地理的には旧大和川水系による河成堆積で形成された河内平野南東部に位置している。平野内には、現在の八尾市南東部にあたる二俣地区を基点として旧大和川の上流であった長瀬川から玉串川が東に分流し北西方向に流下していた。小阪合遺跡はこの2大河川に挟まれて、南北方向に展開する低位沖積地上に位置し、さらに遺跡内の東部では中河川である楠根川が南東から北西方向に流下しているため、現地表面の標高は北部に行くに従って低く、南部で9m前後、北部で8m前後を測る。小阪合遺跡の成立を見たこの低位沖積地は、水稲耕作を生活基盤とする弥生時代前期以降、比較的安定した地理的条件を背景として数多くの遺跡が密集する形で成立している。当遺跡周辺に限っても、北西に東郷遺跡、西に成法寺遺跡、南西に矢作遺跡、南に中田遺跡が隣接している。

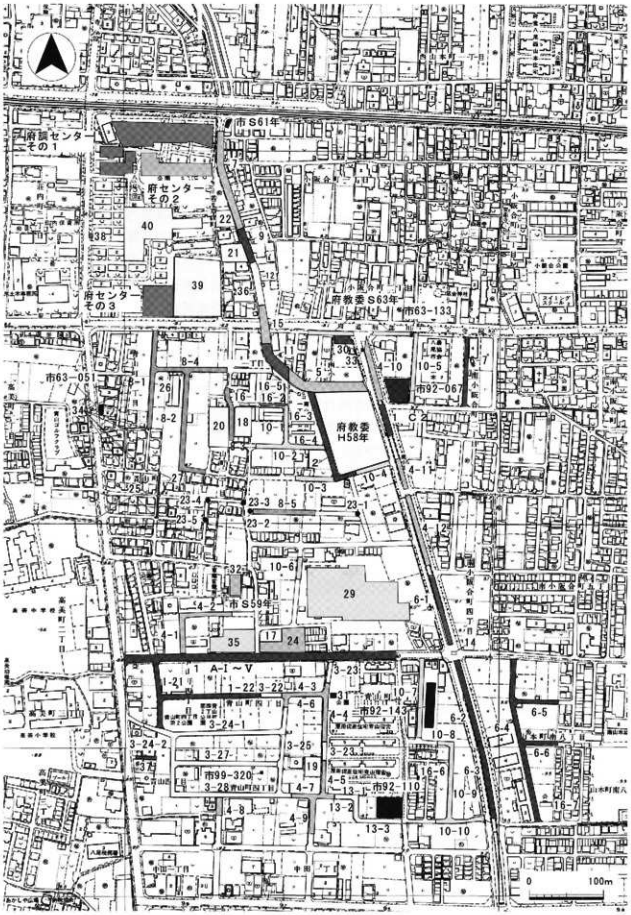
小阪合遺跡は昭和30年に若草町で行われた、大阪府営住宅供給公社の建設に際して、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器等の土器が多量に出土したことに端緒を発するものものである。考古学的な調査は、昭和57～63年に実施された南小阪合地区を中心とした区画整理事業に伴う発掘調査が嚆矢である。これらの調査では、弥生時代中期～近世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。なかでも、古墳時代初頭～前期における集落の広範囲な分布や数多くの他地域から搬入された外来系土器の存在は、当時の地域間交流の一端を知るうえで貴重な資料を提供する結果となった。

第2章　調査概要

第1節　調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅の建設に先立って実施したもので、建物の基礎構築部分に合わせて南北方向のトレンチを2本設定した。各トレンチの規模は東西幅3m、南北幅34mで調査面積は約200㎡を測る。掘削深度は、既往調査や試掘調査の結果を参考にし、機械掘削0.6m、人力掘削0.4m前後の約1mまでとし、概ね古墳時代前期までを調査対象とした。

調査区内の地区割りについては、北西隅に任意の地点(X0・Y0)を設け、そこから5m単位に区画した。地区の呼称方法は東西方向がアルファベット(西からA～C)、南北方向が算用数字(北から1～7)で示し、1A地区～7C地区とした。地点の表記については、X・Y軸の交点の数値で示した。西側のトレンチを第1トレンチと呼び、調査を進めた結果、現地表以下約0.8～1.0m付近で、古墳時代前期(布留式期)の溝・河川と平安時代末期～鎌倉時代の小溝等を検出した(第1面)。第1面の調査終了後、第1面下0.3～0.5mで、弥生時代後期の水田遺構を検出した(第2面)。第2面への移行中の側溝掘削により、弥生時代中期の遺物包含層の存在が認められたため、第2



第1図　調査地周辺図（S＝1/5000）

表1　周辺の発掘調査一覧表

調査名	略号 調査主体	調査原因	所在地	調査期間	調査面積(㎡)	文献
第1次	KS82-01 (財)八文研	区画整理	青山町4丁目	S57/11/8～ S58/3/25	1900	高萩千秋　1987『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－＜昭和57年度第1次調査報告書＞』　財団法人八尾市文化財調査研究会報告10　(財)八尾市文化財調査研究会
第2次	KS83-02 (財)八文研	楠根川切替え工事	青山町1・3丁目	S58/6/21～ 7/14	390	高萩千秋　1987「小阪合遺跡第2次調査」『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査　＜昭和58年度第2次調査・第3次調査報告書＞』(財)八尾市文化財調査研究会報告11　(財)八尾市文化財調査研究会
	第1次 府教委	小阪合ポンプ場	南小阪合町1丁目	S58/9/1～3/25	5000	
第3次	KS83-03 (財)八文研	区画整理	青山町4・5丁目	S58/10/27～ S59/2/29	1544	高萩千秋　1987「小阪合遺跡第3次調査」『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査　〈昭和58年度第2次調査・第3次調査報告書〉』(財)八尾市文化財調査研究会報告11　(財)八尾市文化財調査研究会
第4次	KS84-04 (財)八文研	区画整理	青山町・南小阪合町	S59/6/15～ 11/15	1940	高萩千秋　1988『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－〈昭和59年度第4次調査報告書〉』(財)八尾市文化財調査研究会報告15　(財)八尾市文化財調査研究会
	市教委	鉄塔	青山町4丁目	S59/11/5～ 11/12	55	嶋村友子　1985「6．小阪合遺跡の調査(青山町4丁目4)」『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告11　八尾市教育委員会
第5次	KS85-05 (財)八文研	ポンプ場放流渠築造	南小阪合町	S60/1/25～ 3/20	636	西村公助　1986『小阪合遺跡発掘調査概要－流域下水道等整備に伴う発掘調査－』(財)八尾市文化財調査研究会報告8　(財)八尾市文化財調査研究会
第6次	KS85-06 (財)八文研	区画整理	青山3・5丁目、山本町南8丁目	S60/7/15～ 12/25	2742	高萩千秋　1989『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－』(財)八尾市文化財調査研究会報告18　(財)八尾市文化財調査研究会
	市教委	ポンプ場放流渠築造	小阪合町1丁目	S61/2/7～2/8		米田敏幸　1986「4．小阪合遺跡」『八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告12　八尾市教育委員会
第7次	KS86-07 (財)八文研	ポンプ場放流渠築造	小阪合町1・2丁目	S61/4/5～ 8/8	732	高萩千秋　1987「2．小阪合遺跡(第7次調査)」『昭和61年度事業概要報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告14　(財)八尾市文化財調査研究会
第8次	KS86-08 (財)八文研	区画整理	青山町1・2丁目	S61/8/25～ 12/10	998	高萩千秋　1990『小阪合遺跡』－第8・13・16次調査発掘調査報告－』(財)八尾市文化財調査研究会報告26　(財)八尾市文化財調査研究会
第9次	KS87-09 (財)八文研	ポンプ場放流渠築造	小阪合町1・2丁目	S62/4/7～ 7/31	480	高萩千秋　1988「1．小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告16　(財)八尾市文化財調査研究会
第10次	KS87-10 (財)八文研	区画整理	南小阪合町1丁目、青山町3・5丁目	S62/8/1～ 10/31	1023	高萩千秋　1988「2．小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告16　(財)八尾市文化財調査研究会
第11次	KS87-11 (財)八文研	ポンプ場放流渠築造	南小阪合町1丁目11	S62/8/21～ 9/5	272	高萩千秋　1988「3．小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告16　(財)八尾市文化財調査研究会
第12次	KS87-12 (財)八文研	ポンプ場放流渠築造	小阪合町2丁目48－2	S62/10/12～ S63/1/18	400	高萩千秋　1988「4．小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告16　(財)八尾市文化財調査研究会
第13次	KS87-13 (財)八文研	区画整理	青山町5丁目	S62/11/2～ 12/28	200	高萩千秋　1990『小阪合遺跡』第8・13・16次調査発掘調査報告－』(財)八尾市文化財調査研究会報告26　(財)八尾市文化財調査研究会
第14次	KS87-14 (財)八文研	特殊人孔築造工事	小阪合町4丁目	S63/1/16～ 1/18	30	高萩千秋　1988「6．小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告16　(財)八尾市文化財調査研究会
	63-051 市教委	事務所	青山町1丁目54	S63/5/11.	9	近江俊秀　1989「3．小阪合遺跡(63-051)」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告19　八尾市教育委員会
第15次	KS88-15 (財)八文研	ポンプ場放流渠築造	小阪合町2丁目52－11	S63/5/17～ 10/31	360	高萩千秋　1989「7 小阪合遺跡(第15次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告25　(財)八尾市文化財調査研究会
第16次	KS88-16 (財)八文研	区画整理	青山町1～3丁目、山本町南6丁目	S63/7/5～ 5/24	500	高萩千秋　1990『小阪合遺跡』－第8・13・16次調査発掘調査報告－』(財)八尾市文化財調査研究会報告26　(財)八尾市文化財調査研究会
	府教委	府道平野中高安線拡幅	南小阪合町1丁目	S63/10～12	500	山上弘　1989『小阪合遺跡発掘調査概要・Ⅱ－八尾市南小阪合町所在－』大阪府教育委員会
第17次	KS88-17 (財)八文研	共同住宅	青山町3丁目147	S63/10/3～ 10/4	32	高萩千秋　1989「9 小阪合遺跡(第17次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告25　(財)八尾市文化財調査研究会
	63-133 市教委	公共下水道	南小阪合町1丁目	S63/11/14.	70	近江俊秀　1989「6．小阪合遺跡(63-133)」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告20　八尾市教育委員会
	63-202 市教委	公共下水道	山本町南8丁目	S63/12/2.	6	米田敏幸　1989「7．小阪合遺跡(63-202)」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告20　八尾市教育委員会
第18次	KS89-18 (財)八文研	区画整理	青山町3丁目2－1	H1/4/4～ 4/28	500	本書Ⅱ
第19次	KS90-19 (財)八文研	共同住宅	青山町5丁目93・94	H2/10/16～ 11/1	164	坪田真一　1993「Ⅱ小阪合遺跡第19次調査(KS90-19)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』(財)八尾市文化財調査研究会報告41　(財)八尾市文化財調査研究会
第20次	KS91-20 (財)八文研	共同住宅	青山2丁目1	H3/4/19～ 5/16	340	坪田真一　1993「Ⅲ小阪合遺跡第20次調査(KS90-20)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』(財)八尾市文化財調査研究会報告41　(財)八尾市文化財調査研究会
第21次	KS91-21 (財)八文研	共同住宅	若草町25－1、25－4、25－5、27、28	H4/1/18～ 2/10	300	本書Ⅲ
	92-067 市教委	共同住宅	南小阪合町1丁目16他	H4/5/7・19～ 21	105	涌　彦　1993「6．小阪合遺跡(92-067)」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告27　八尾市教育委員会
	92-110 市教委	倉庫	青山町5丁目124	H4/6/8.	6.25	涌　彦　1993「7．小阪合遺跡(92-110)」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告27　八尾市教育委員会
	92-143 市教委	共同住宅	青山町5丁目3－1、3－2、4－1、4－2他	H4/6/29・7/6 ～10	8	涌　彦　1993「10．小阪合遺跡(92-143)」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告27　八尾市教育委員会
第22次	KS92-22 (財)八文研	共同住宅	若草町23－1、23－4、23－6、23－27、23－8	H4/8/5～ 8/28	230	高萩千秋　1993「Ⅳ小阪合遺跡(KS92-22)第22次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告39　(財)八尾市文化財調査研究会
第23次	KS92-23 (財)八文研	公共下水道	青山町2・3丁目	H4/9/8～ 11/26	136	成海佳子　1993「Ⅴ小阪合遺跡(KS92-23)第23次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告39　(財)八尾市文化財調査研究会

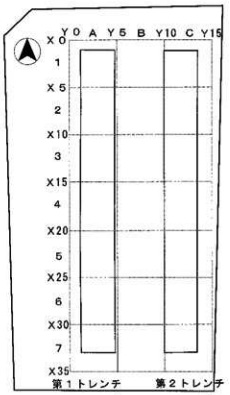
調査名	略号 調査主体	調査原因	所在地	調査期間	調査面積（㎡）	文献
第24次	KS92-24 (財)八文研	共同住宅	青山町5丁目179−1	H4/11/16〜12/5	230	高萩千秋　1993「Ⅳ小阪合遺跡(KS92-24)第24次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告39 (財)八尾市文化財調査研究会
第25次	KS93-25 (財)八文研	公共下水道	青山町2丁目5	H5/4/2〜7/9	44	坪田真一　1994「Ⅴ小阪合遺跡第25次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告42』(財)八尾市文化財調査研究会
第26次	KS93-26 (財)八文研	共同住宅	青山町2丁目219	H5/9/1〜10/4	420	坪田真一　1998「Ⅰ小阪合遺跡(第26次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告61』(財)八尾市文化財調査研究会
第27次	KS94-27 (財)八文研	公共下水道	青山町2丁目	H6/5/9〜5/27	36	西村公助・中野篤史　1996「Ⅲ小阪合遺跡(第27次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告50』(財)八尾市文化財調査研究会
第28次	KS94-28 (財)八文研	体育館	山本町南7丁目73	H6/5/26〜8/5	855	成海佳子　1995「12. 小阪合遺跡第28次調査(KS94-28)」『平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
第29次	KS94-29 (財)八文研	総合体育館	青山町3丁目1−1	H6/6/1〜H7/3/20	7220	高萩千秋他　1995「13. 小阪合遺跡第29次調査(KS94-29)」『平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
第30次	KS95-30 (財)八文研	共同住宅	南小阪合町1丁目21	H8/1/8〜1/22	104	原田昌則　1996「Ⅰ小阪合遺跡(第30次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告54』(財)八尾市文化財調査研究会
第31次	KS95-31 (財)八文研	防火水槽	青山町5丁目214	H8/1/29〜2/2	36	岡田清一　1996「Ⅶ小阪合遺跡(第31次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告53』(財)八尾市文化財調査研究会
第32次	KS96-32 (財)八文研	変電所設備	青山町4丁目3−16	H8/7/1〜7/24	200	坪田真一・古川晴久 1997「13. 小阪合遺跡第32次調査(KS96-32)」『平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
第33次	KS96-33 (財)八文研	電気管路	青山町4丁目、南小阪合町1丁目	H8/11/13〜11/29	76	高萩千秋　1998「Ⅸ小阪合遺跡(第33次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告60』(財)八尾市文化財調査研究会
第34次	KS96-34 (財)八文研	公共下水道	青山町1・2丁目	H9/1/13〜2/28	50.3	原田昌則　1998「Ⅹ小阪合遺跡(第34次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告60』(財)八尾市文化財調査研究会
第35次	KS96-35 (財)八文研	養護老人ホーム施設	青山町4丁目149他	H9/3/17〜6/19	1090	成海佳子・森本めぐみ　1998「11. 小阪合遺跡第35次調査(KS96-35)」『平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
	(その1) 府調センター	団地	若草町	H9/12/26〜H10/12/25	6135	駒井正明・本間元樹・河内暢子・松田留美・松岡順一郎　2000「小阪合遺跡−都市基盤整備公団八尾団地建替えに伴う発掘調査報告書−」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第51集』(財)大阪府文化財調査研究センター
第36次	KS97-36 (財)八文研	公共下水道	若草町	H10/2/9.	12	高萩千秋　1999「Ⅴ小阪合遺跡第36次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告62』(財)八尾市文化財調査研究会
	92-143 市教委	分譲住宅	青山町4丁目227	H11/11/11.	4	吉田珠己　2000「2. 小阪合遺跡(99-320)」『八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告42 八尾市教育委員会
	(その2) 府センター	団地	若草町	H14/4/15〜H15/3/14	3270	本間元樹・辻本　武　2004「小阪合遺跡(その2)−八尾団地(建替)埋蔵文化財発掘調査(第2次)−」『(財)大阪府文化財センター調査報告書　第115集』(財)大阪府文化財センター
第37次	KS2002-37 (財)八文研	公共下水道	青山町4丁目、中田1・3丁目	H14/9/10〜H15/3/10	36	高萩千秋・成海佳子・西村公助・樋口　薫　2003「小阪合遺跡(第37次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告75』(財)八尾市文化財調査研究会
第38次	KS2002-38 (財)八文研	公共下水道	若草町地内	H15/6/26〜9/30	33.28	樋口　薫　2003「Ⅵ小阪合遺跡第38次調査(KS2002-38)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告78』(財)八尾市文化財調査研究会
	(その3) 府センター	団地	若草町2	H16/4/1〜H17/6/30	1625	松下知世・金光正裕・若林邦彦・新海正博　2005「小阪合遺跡(その3)−山本団地建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告」『(財)大阪府文化財センター調査報告書第132集』(財)大阪府文化財センター
第39次	KS2004-39 (財)八文研	共同住宅	若草町52−8	H16/7/1〜10/21	1590	岡田清一　2005「18. 小阪合遺跡第39次調査(KS2004-39)」『平成16年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
第40次	KS2005-40 (財)八文研	病院	若草町1−10	H17/9/1〜H18/3/10	5230	岡田清一・菊井佳弥　2006「16. 小阪合遺跡第40次調査(KS2005-40)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

凡例　府教委－大阪府教育委員会　府調センター－大阪府文化財調査研究センター　府センター－大阪府文化財センター
市教委－八尾市教育委員会　（財）八文研－（財）八尾市文化財調査研究会

第2図　調査位置図（S＝1/2500）

面の調査終了後に、下層部分を確認することとし、部分的に掘削を続行した。その結果、第２面下0.4～0.5mに、弥生時代中期の生活面が存在することが明らかになった。そこで予定を変更し、第１トレンチでは北部から約８m、２トレンチについては、弥生時代中期の遺構面のみを調査対象とした調査に切り替えた。

第２トレンチでは現地表下1.5～2.0mにある弥生時代中期前半の遺物包含層(第11層)直上までを機械掘削とし、以下の0.2～0.6mを人力掘削として、調査を進めた。その結果、壁面観察により溝・畦畔の存在を確認し、これを第３面とし、第１・２トレンチの第12層上面を対象とした弥生時代中期前半の遺構面を第４面とした。なお、第２トレンチについては、トレンチ中央部に存在する溝埋土であるシルト～粗砂が厚く堆積しており、この部分を中心として、壁面崩壊が連続し危険な状態になったため、遺構存在が希薄なトレンチ南半分の調査は中止せざるを得なかった。出土遺物は弥生時代中期前半から平安時代後期に比定される土器類・石器類・木製品等が出土しており、総数はコンテナ20箱を数える。



第３図　調査区設定図(1/400)

第２節　基本層序

調査の方法を途中で変更しているため、第１トレンチでは北部から約10m程度で地層全体が確認できた他、第２トレンチでは上部を機械掘削により削平したため第８層より上部が不明である。第１・２トレンチで普遍的に認められた13層(第０層～第12層)を摘出して基本層序とした。

第０層：客土。厚厚３～15cm。上面の標高はT.P.＋8.0m。

第１層：灰色砂質シルト。作土。層厚５～16cm。

第２層：白灰色～緑灰色。層相は砂質シルト。酸化鉄・マンガンの斑点が顕著で、近世時期の作土層であったと推定される。層厚５～15cm。

第３層：黄茶色砂質シルト。第２層と同様、近世時期の作土層である。層厚３～15cm。

第４層：茶灰色砂質シルト。上壌化が顕著で中世時期の作土層と推定される。層厚３～13cm。

第５層：灰茶色砂質シルト。第４層と同様、中世時期の作土層と推定される。層厚５～20cm。

第６層：灰茶色砂質シルト。１トレンチの北部のみで検出。層厚３～20cm。

第７層：黄茶色シルト。上壌化層で酸化鉄の斑点が顕著。部分的に植物遺体の薄層が水平に堆積している。層厚10～50cm。第１面構築面。

第８層：灰黄色粘土。粘性が高く酸化鉄の斑点が顕著。層厚５～20cm。

第９層：黄灰色粘土で下部では植物遺体を含む暗灰色粘土が優勢である。酸化鉄の斑点が顕著である。層厚５～20cm。

第10層：青灰色粘土。粘性の高い層相で、上面を中心に酸化鉄斑の沈着が顕著である。層厚20

～50cm。上面が弥生時代後期の水田面を検出した第２面の構築面である。

第11層：黒灰色粘土。層厚20～35cm。弥生時代中期前半(第Ⅱ様式)の遺物包含層。上面が第３面構築面。

第12層：緑灰色シルト。層厚20cm以上。上面が弥生時代中期前半の遺構を検出した第４面構築面。

第３節　検出遺構と出土遺物

１)検出遺構

・第１面

第１トレンチの第７層(T.P.＋7.2～7.6m)上面で溝21条(ＳＤ101～ＳＤ121)・自然河川１条(ＮＲ101)、第２トレンチ南東部の東壁面で溝１条(ＳＤ122)を検出した。時期的には古墳時代中期の溝１条(ＳＤ121)、自然河川１条(ＮＲ101)と平安時代末期～鎌倉時代に比定される溝21条(ＳＤ101～ＳＤ120・ＳＤ122)がある。第１トレンチでは、ＮＲ101が完全に埋没した後に幽溝群(ＳＤ101～ＳＤ120・ＳＤ122)が掘り込まれ、耕地として利用されたことがわかる。この埋没河川の影響を受けたためか、第１トレンチの４Ａ～７Ａ地区の標高が高く、ＳＤ110を挟んで南部と北部とでは0.2～0.3m程度の高低差がある。

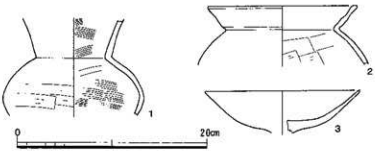
溝(ＳＤ)

ＳＤ101～ＳＤ120

第１トレンチで検出した。東西方向に伸びる幽溝群である。溝幅が1.6ｍを測るＳＤ108以外は、幅0.2～0.7m、深さ0.05～0.18m程度の規模を持つ小溝が大半を占めている。埋土は灰茶色粘質土である。各溝内部からは、古墳時代にまで遡る土器類の小破片が出土している。

ＳＤ121

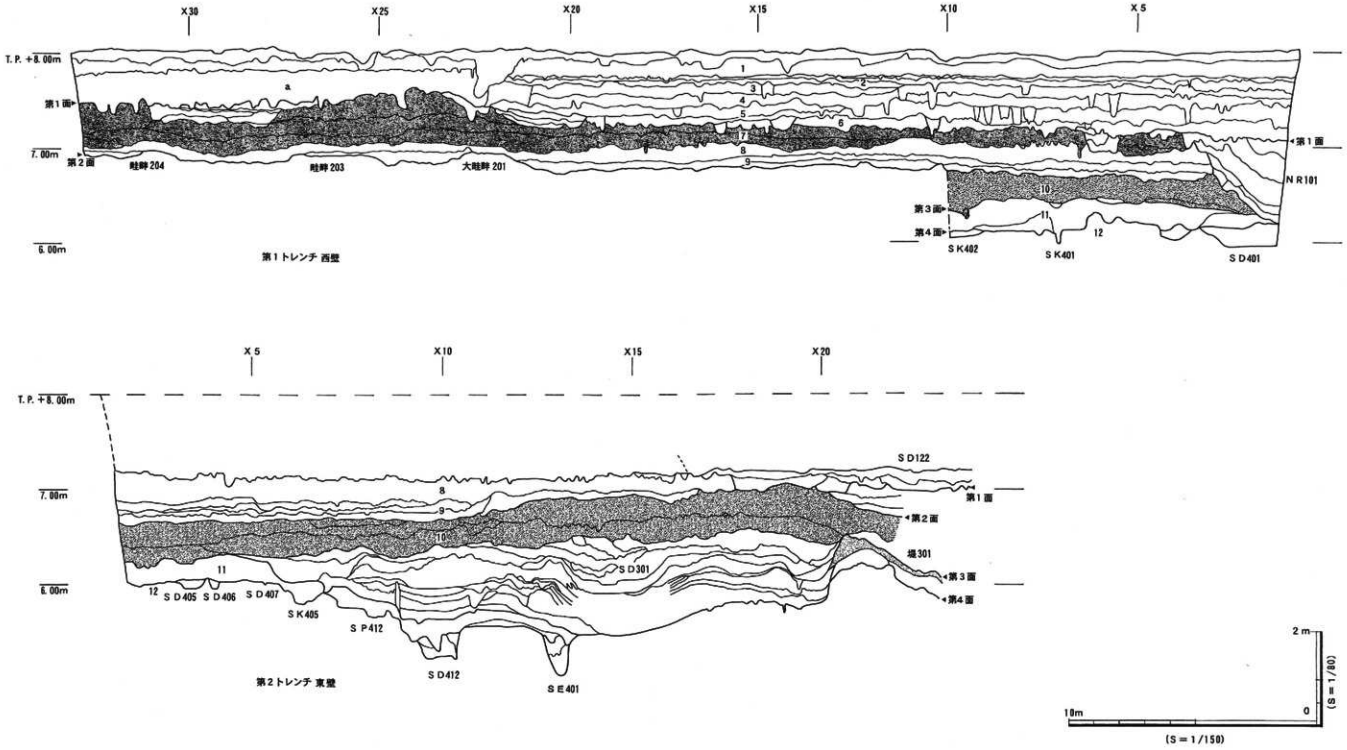
第１トレンチの１・２Ａ地区で検出した。北東－南西に伸びる。検出長2.8m、幅0.6～1.0m、深さ0.25mを測る。埋土は２層で上層が灰茶色粘土質シルト、下層が灰茶色粘土である。遺物は土師器片が少量出土している。土師器３点(１～３)を図化した。１は精製品の直口壺片である。２は布留式甕片である。口縁端部の内面肥厚が形骸化したもので、布留式甕の最終段階の形態を示している。３は有稜高杯の杯部である。浅目の杯部で口縁部は斜上方に直線的に伸びる。古墳時代中期前半に比定される。



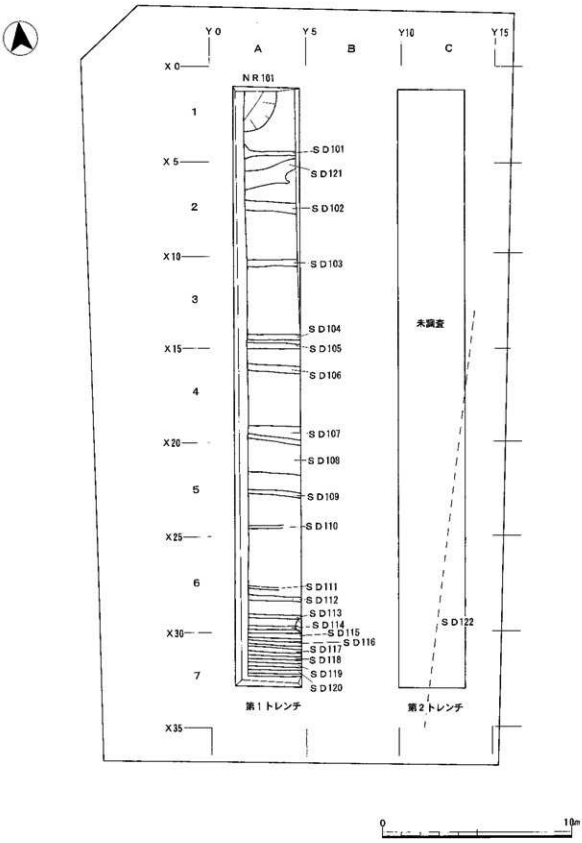
第４図　ＳＤ121出土遺物実測図

ＳＤ122

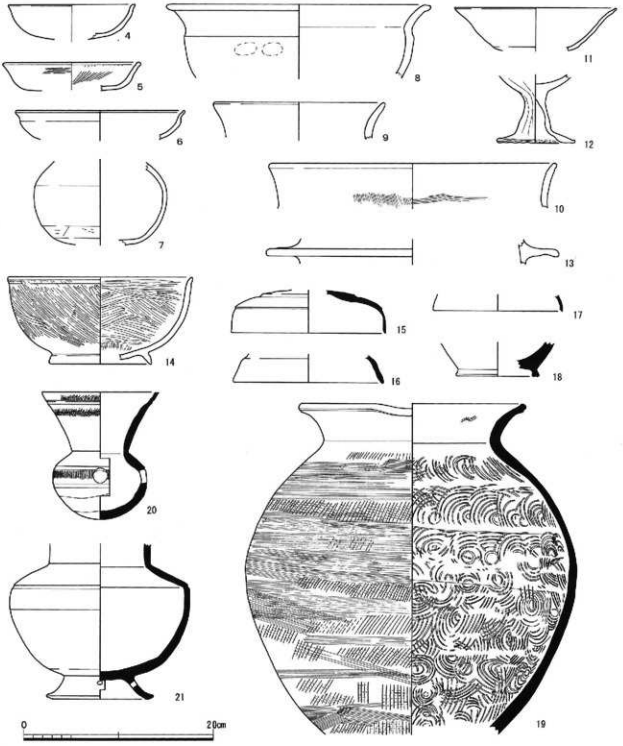
第２トレンチの東・南壁で検出したため詳細は不明であるが、東壁中央部の(Ｘ16.25)から南壁の(Ｙ11.25)に西側の肩を持つもので、概ね南－北の流路を持つ。推定検出長16.7m、幅1.85m以上、深さ0.4mを測る。内部堆積土は上下２枚に分かれ、上層には平安時代の遺物が含まれており、下層には古墳時代中期の遺物が含まれている。出土量はコンテナに１箱程度で、上層から瓦器椀、



第5図　第1トレンチ西壁、第2トレンチ東壁断面図（S＝水平1/100・垂直1/40）



第6図　第1面検出遺構平面図(S＝1/200)



第7図　ＳＤ122出土遺物実測図

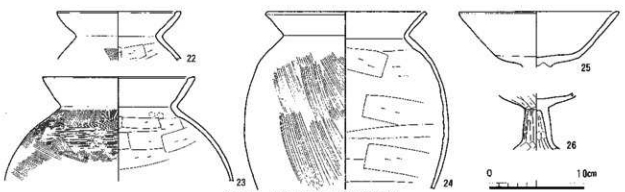
下層から土師器甕・杯、須恵器甕・台付壷などが出土している。18点(４～21)を図化した。古墳時代前期～平安時代後期に至る時期幅のある遺物が出土している。４～６は土師器杯片である。いずれも細片で、口縁端部が小さく外折する４と口縁端部が小さく内側に肥厚する５・６がある。４が奈良時代前半。５・６が奈良時代中期。７は土師器直口壷の体部片と推定される。体部下半にヘラケズリが認められる。飛鳥時代の所産であろう。８は土師器鍋の細片である。復元口径26.5

cmを測る。奈良時代後半。9・10は土師器甕の口縁部片である。9が復元口径17.9cmを測る小形品、10が復元口径30cmを測る大形品である。共に口縁端部の形状からみて、飛鳥時代ならびにそれ以前が考えられる。11・12は土師器高杯である。11は杯部片で、12は脚部片である。11が古墳時代前期前半、12が飛鳥時代前期に比定される。13は土師器羽釜の鍔片である。奈良時代。14は瓦器鉢である。1/2が残存している。復元口径19.4cm、器高9.2cm、高台径10.5cm、高台高1.1cmを測る。形態的には、11世紀後半に成立する和泉型瓦器椀を大きくしたもので、体部外面の分割ヘラミガキや内面体部、見込み部分のヘラミガキにおいて成立期の瓦器椀に共通する調整技法が認められる。焼成は良好で器面の炭素付着は均一で、淡灰黒色を呈している。15～21は須恵器である。15～17は杯蓋である。形骸化した稜が残る15と稜を持たない16がある。15が田辺編年のＴＫ10型式(６世紀中葉)、16がＭＴ85型式(６世紀後半)以降のものと考えられる。18は壺の高台片である。奈良時代のものか。19は甕である。約1/2が残存している。復元口径23.4cmを測る。球形の体部に外反する口縁部が付く。体部外面は細かい格子状タタキの後を水平方向にカキメ調整が行われている。体部内面には同心円文タタキが行われている。色調は淡黒灰色～灰白色で底部付近を中心に灰白色を呈する部分があるため、半還元炎焼成であったことが推定される。奈良時代前半。20は瓶である。口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径12.2cm、器高13.5cm、体部径9.9cmを測る。球形の体部から頸部が斜上方に伸びるもので、口縁部は小さく外反し開いて終わる。口縁端部のやや下方に１条の凸帯を巡らし、その上下に波状文を施文している。体部中位には２本の沈線間に櫛状工具による列点文が施文されている。円孔の角度はやや上向きで径1.5cmを測る。焼成は良好で、内面および体部外面上位に自然釉が降着している。田辺編年のＭＴ15型式(６世紀前半)に比定される。21は台付甕である。体部から上方に伸びる頸部が幅広であることから台付短頸壺が想定される。７世紀代のものと推定される。

自然河川(ＮＲ)

ＮＲ101

第１トレンチ北西隅の１Ａ地区で検出した。東肩を検出したのみで詳細は不明である。検出長2.3m、幅1.9m、深さ0.77mを測る。埋土は粘土～シルトを主体とする４層が断面形状に沿って堆積している。河川の西側への広がりは、西隣する第８次調査(ＫＳ86－８)の第３調査地区において検出されており、古墳時代中期に埋没した河川とされている。遺物は布留式土器を主とする遺物が出土している。古式土師器５点(22～26)を図化した。22は布留式甕片である。口縁端部の内



第８図　ＮＲ101出土遺物実測図

面肥厚は22が丸味、23が内傾する幅広の端面を持つ。２点共に布留式新相に比定される。24は長胴甕片で、体部外面は縦位のハケ調整、内面は横位のヘラケズリを多用している。古墳時代中期前半。25・26は高杯片である。25が有稜高杯の杯部。26が脚部片である。共に古墳時代中期前半に比定される。

・第２面

第１トレンチの第10層上面(T. P. ＋6.9～7.0m)および第２トレンチの壁面で弥生時代後期の水田面を検出した。検出した遺構には、水田３筆(**水田201～水田203**)、大畦畔１条(**大畦畔201**)、畦畔４条(**畦畔201～畦畔204**)がある。水田面の標高は南部でT. P. ＋6.9m前後、北部で6.7m前後で北に行くに従って低くなっている。水田構築面である第10層の層中においては、酸化鉄斑の沈着が顕著であることから、水田環境としては乾田ないしは半乾田であったことが推定できる。

水田(水田)

水田201

第１トレンチの１～５Ａ地区で検出した。南を**大畦畔201**に区画される水田である。東西および北が調査区外に至る。検出部分で南北幅19.5mを測る。水田面の標高は南端でT. P. ＋6.83m、北端でT. P. ＋6.64mを測る。

水田202

第１トレンチの６・７Ａ地区で検出した。北を**畦畔203**、南を**畦畔204**に区画された水田である。検出部分で南北幅6.0mを測る。水田面の標高は南端でT. P. ＋6.88m、北端でT. P. ＋6.85mを測る。

水田203

第１トレンチの７Ａ地区で検出した。**畦畔204**より南側に広がる。検出部分で南北幅1.2mを測る。水田面の標高はT. P. ＋6.80mを測る。

大畦畔(大畦畔)

大畦畔201

第１トレンチの４・５Ａ地区で検出した。北東－南西に伸びるもので、西部では**畦畔201**と**畦畔202**に分かれる他、南側には並行して**畦畔203**が東西に伸びている。検出部分で幅2.8～3.7m、上面幅1.4～1.8m、基底幅0.4～1.2m、高さ0.17mを測る。構築面である第10層青灰色粘土を盛っている。この**大畦畔201**の東への延長は、第２トレンチの東西断面で確認しており、これらを含めて12m以上を測るものである。遺物は弥生時代後期に比定される弥生土器が少量出土している。

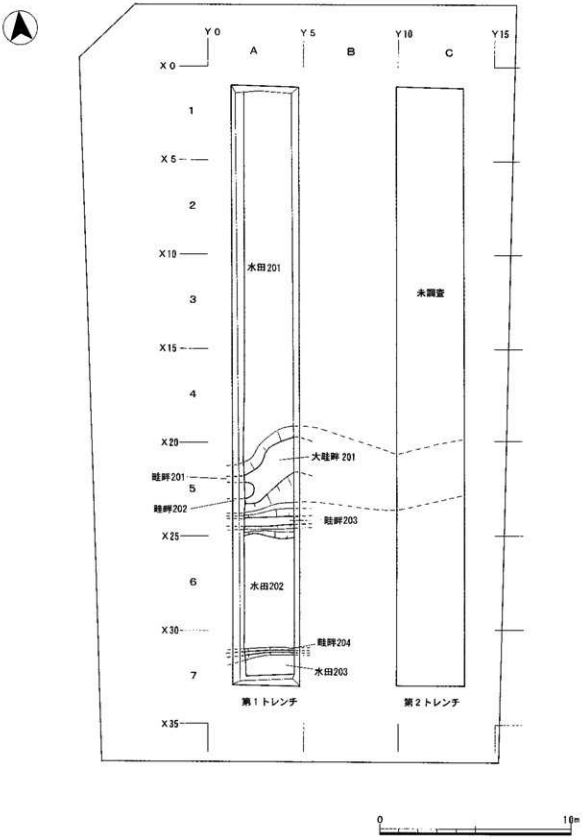
畦畔(畦畔)

畦畔201

第１トレンチの５Ａ地区で検出した。**大畦畔201**の西端から規模を減じて東西方向に伸びるものである。検出長0.4m、上面幅0.4m、高さ0.05mを測る。第10層青灰色粘土が盛られている。

畦畔202

畦畔201と同様、**大畦畔201**から西側に派生するもので、検出長0.4m、上面幅0.3m、高さ0.05m



第9図　第2面検出遺構平面図(S＝1/200)

を測る。第10層青灰色粘土が盛られている。

畦畔203

第1トレンチの5A地区で検出した。大畦畔201の南側に並行して東西方向に伸びるもので、水田202の北側を区画している。検出長1.0m、上面幅0.5m、高さ0.06mを測る。南側に小溝が付随している他、北側に関しても大畦畔201との約30cm幅の部分が溝の機能を果たしたものと推定される。第10層青灰色粘土が盛られている。

畦畔204

第1トレンチの7A地区で検出した。水田202と水田203を区画している。検出長2.6m、上面幅0.1m、高さ0.09mを測る。第10層青灰色粘土が盛られている。

・第3面

第2トレンチの壁面で検出したもので、平面的な広がり等の詳細は不明である。弥生時代中期前半を中心とする遺物包含層である第11層(T.P.+6.3m前後)を構築面とするもので、溝1条(SD301)と堤1条(堤301)がある。弥生時代中期前半(Ⅱ様式)の集落廃絶後に構築されたもので、第2面で検出した弥生時代後期の水田構築までの間に作られており、近隣に中期前半から後期間の集落存在を示唆する資料と言えよう。

溝(SD)

SD301

第2トレンチの2～4C地区で検出した。東西方向に伸びるものであるが、壁面での検出であるため詳細は不明である。断面形状は浅い半円形状を呈するもので、南肩は堤301で区画されている。東壁で幅16.1m、深さ1.0mを測る。埋土は最下層から上層に至るまで粗砂～粘土の薄層の連続であり、漸移的な堆積状況が窺える。遺物は出土していない。

堤(堤)

堤301

SD301の南肩を東西方向に区画する堤である。上面幅0.5m、基底幅2.5m、高さ0.5mを測る。盛土は2回に亘って行われており、下部が褐灰色粘土質シルト、上部が褐灰色シルト質粘土である。

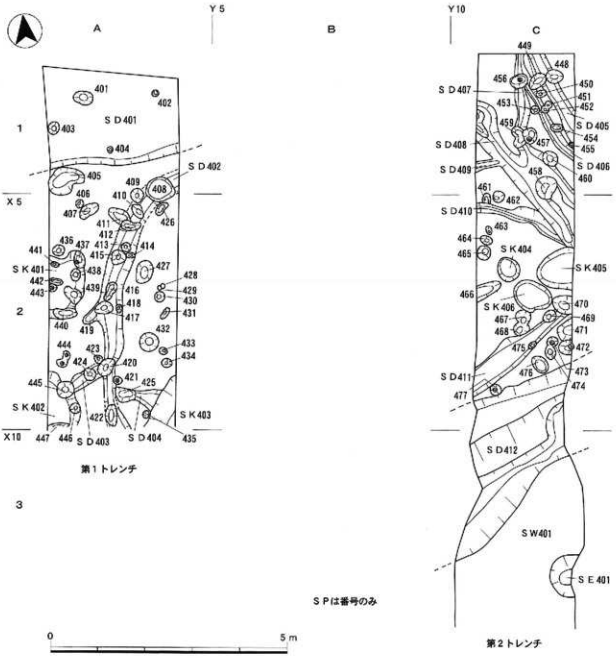
・第4面

第1・2トレンチの第12層上面(T.P.+5.6～6.1m)上面で、弥生時代中期前半(第Ⅱ様式)に比定される井戸1基(SE401)、土坑6基(SK401～SK406)、溝12条(SD401～SD412)、小穴77個(SP401～SP477)、土器集積1箇所(SW401)を検出した。

井戸(SE)

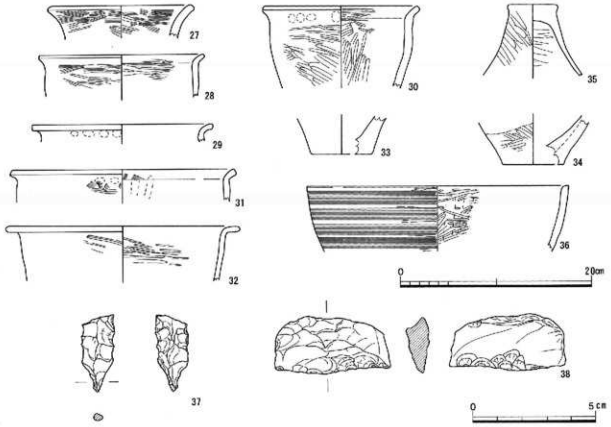
SE401

第2トレンチ南部の3C地区で検出した。円形を呈するものと推定されるが、東部は調査区外



第10図　第4面検出遺構平面図(S＝1/80)

のため全容は不明である。検出部分で東西径0.45m、南北径0.85m、深さ0.45mを測る。埋土は有機物を含む黒色シルト質粘土である。遺物は弥生土器、石製品、サヌカイト片、獣骨等がコンテナ1箱程度出土している。12点(27～38)を図化した。27～36は弥生土器、37・38は石器である。27は広口壷の口縁部片である。28～34は甕である。28～30は復元口径15.8～18.8cmを測る小形品、31・32は復元口径23.0cm以上の中形品。如意形の口縁部を有するもので、端面は丸味を持って終わる28・29・32と外傾する平坦面を持つ30・31がある。33・34は甕底部である。35は甕蓋である。36は鉢である。残存する体部外面に4条の櫛描直線文が施文されている。全て生駒西麓産である。時期的には弥生時代中期前半(河内Ⅱ－1様式)に比定される。石製品は2点(37・38)図化した。37はサヌカイト製の石錐である。頭部と錐部の境が明瞭なもので、錐部先端は鋭く尖る。1.7g。



第11図　ＳＥ401出土遺物実測図

38はサヌカイト製スクレイパーである。自然面を持つ横長剥片を使用した小形品で、Ｂ面には主要剥離面が残る。刃部は、特に上部付近を中心に丁寧な調整剥離が行われている。10.1ｇ。

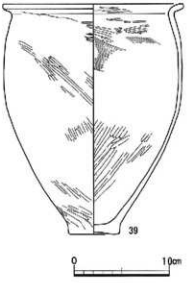
土坑（ＳＫ）

ＳＫ401

第１トレンチの２Ａ地区で検出した。西部は調査区外に至る。検出部分で東西幅0.8m、南北幅1.25m、深さ0.03mを測る。埋土は緑灰色シルト質粘土である。遺物は弥生土器、石器類、獣骨等が出土している。内部には７個の小穴（ＳＰ437～ＳＰ443）が存在している。

ＳＫ402

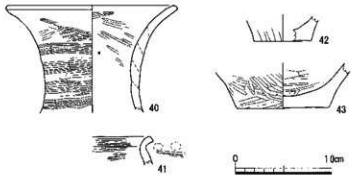
第１トレンチの２Ａ地区で検出した。西部及び南部は調査区外に至る。検出部分で東西幅0.7m、南北幅1.1m、深さ0.8mを測る。埋土は緑灰色シルト質粘土である。遺物は弥生土器、石器類が出土している。内部には小穴３個（ＳＰ445～ＳＰ447）が存在している。甕１点(39)を図化した。39は丈高の中形甕である。約1/2が残存している。口径18.7㎝、器高24.4㎝、底径4.1㎝を測る。体部外面はヘラミガキが多用されているが、全体に火熱による器面剥離が顕著である。色調は褐灰色。生駒西麓産。



第12図　ＳＫ402出土遺物実測図

ＳＫ403

第１トレンチの２Ａ地区で検出した。西部でＳＤ404を切っている。東部及び南部は調査区外に至る。検出部分で東西幅0.5m、南北幅0.8m、深さ0.08mを測る。埋土は緑灰色シルト質粘土である。遺物は弥生上器、石器類が出土している。



第13図　ＳＫ404(40・41)、ＳＫ405(42・43)出土遺物実測図

ＳＫ404

第２トレンチの２Ｃ地区で検出した。円形を呈するもので、東西径0.5m、南北径0.5m、深さ0.07mを測る。埋土は炭・焼土・礫を含む黒色シルト質粘土である。遺物は弥生上器片が少量出土している。２点(40・41)を図化した。40は長頸の広口壷である。復元口径12.2cmを測る。残存部分で頸部外面に櫛描直線文４条が認められる。41は甕の口縁部片である。共に生駒西麓産。時期的には弥生時代中期前半(河内Ⅱ－１様式)に比定される。

ＳＫ405

ＳＫ404の東に隣接している。東部は調査区外に至る。検出部分で東西幅0.75m、南北幅0.8m、深さ0.05mを測る。埋土は炭・焼土・礫を含む黒色シルト質粘土である。遺物は弥生土器片が少量出土している。２点(42・43)図化した。42が甕、43が壷の底部片である。時期は弥生時代中期前半が推定される。

ＳＫ406

ＳＫ405の南西に隣接している。楕円形を呈するもので、長径0.8m、短径0.65m、深さ0.06mを測る。埋土は炭・焼土・礫を含む黒色シルト質粘土である。遺物は弥生上器片が少量出土している。

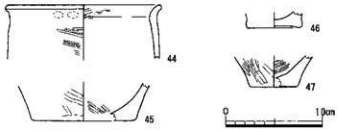
溝(ＳＤ)

ＳＤ401

第１トレンチ北部の１Ａ地区で検出した。東西方向に伸びる溝で、北肩は調査区外に至る。検出長2.75m、幅1.3～1.6m、深さ0.06mを測る。埋土は緑灰色シルト質粘土である。遺物は弥生上器、石器類が出土している。溝底には小穴４個(ＳＰ401～ＳＰ404)が存在している。

ＳＤ402

第１トレンチの１・２Ａ地区で検出した。概ね南北方向に弓状に伸びるもので、南部でＳＤ403とＳＤ404に合流している他、ＳＰ408～ＳＰ422の小穴が内部および遺構を切る形で存在している。検出長5.7m、幅0.35～0.5m、深さ0.15mを測る。埋土は緑灰色シルト質粘土である。遺物は弥生上器、石器類が出土している。



第14図　ＳＤ402出土遺物実測図

甕4点(44～47)を図化した。いずれも細片である。44は口縁部片である。復元口径16cmを測る。45～47は底部で45が大形、46・47が小形に分類される。弥生時代中期前半に比定される。

ＳＤ403

第1トレンチの２Ａ地区で検出した。東端でＳＤ402と合流し、西端ではＳＰ445に切られている。全長0.7m、幅0.3m、深さ0.05mを測る。埋土は緑灰色シルト質粘土である。遺物は弥生土器、石器類が出土している。

ＳＤ404

第1トレンチの２Ａ地区で検出した。西端でＳＤ402と合流し、西端ではＳＰ425に切られている。全長0.9m、幅0.3～0.45m、深さ0.06mを測る。埋土は緑灰色シルト質粘土である。遺物は石器類が出土している。

ＳＤ405

第2トレンチの１Ｃ地区で検出した。北西　南東に伸びるもので、ＳＰ448～ＳＰ450・ＳＰ455に切られている。検出長1.7m、幅0.33m、深さ0.05mを測る。埋土はを含む黒色シルト質粘土であるである。遺物は出土していない。

ＳＤ406

ＳＤ405の西側に並行して伸び、北部でＳＤ407と合流している他、ＳＰ449～ＳＰ454・ＳＰ456に切られている。検出長2.5m、幅0.35m、深さ0.06mを測る。埋土は黒色シルト質粘土である。遺物は出土していない。

ＳＤ407

ＳＤ406の西側に隣接している。「く」の字状に伸びるもので、北部でＳＤ406、南部でＳＤ408と合流している他、ＳＰ456～ＳＰ460に切られている。検出長2.1m、幅0.22～0.32m、深さ0.22mを測る。埋土は黒色シルト質粘土である。遺物はサヌカイト剥片等が出土している。

ＳＤ408

ＳＤ407の西に隣接している。北西－南東に伸びるもので、ＳＤ407およびＳＤ409と合流する他、ＳＤ410を切り、ＳＰ458に切られている。検出長3.4m、幅0.35～0.55m、深さ0.18mを測る。埋土は黒色シルト質粘土である。遺物は弥生土器、石器が少量出土している。

ＳＤ409

東西方向に伸びるもので、東端はＳＤ408に合流している。検出長0.45m、幅0.2m、深さ0.12mを測る。埋土は淡灰色シルトである。遺物は出土していない。

ＳＤ410

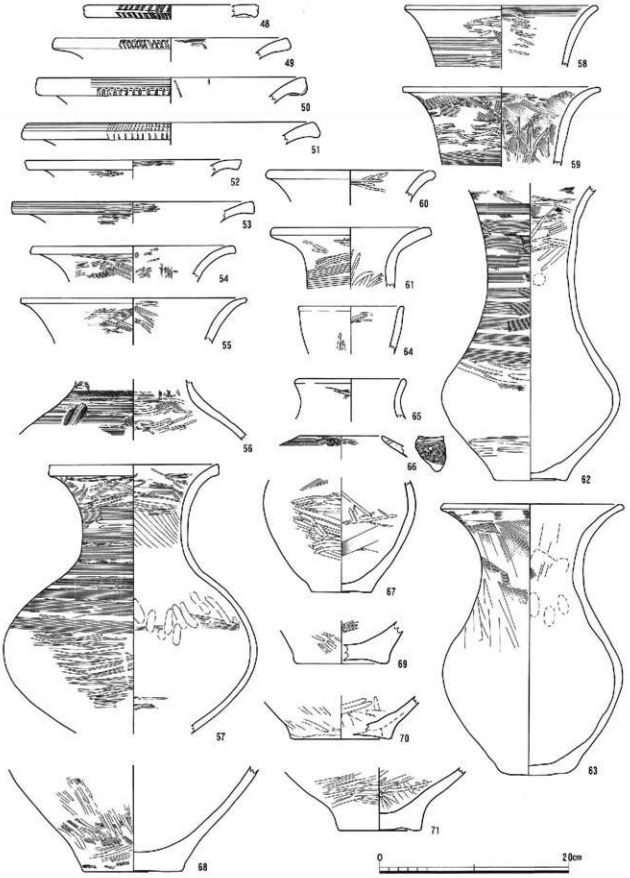
２Ｃ地区で検出した。東端はＳＤ408に切られている。検出長2.05m、幅0.17～0.35m、深さ0.14mを測る。埋土は黒色シルト質粘土である。遺物は出土していない。

ＳＤ411

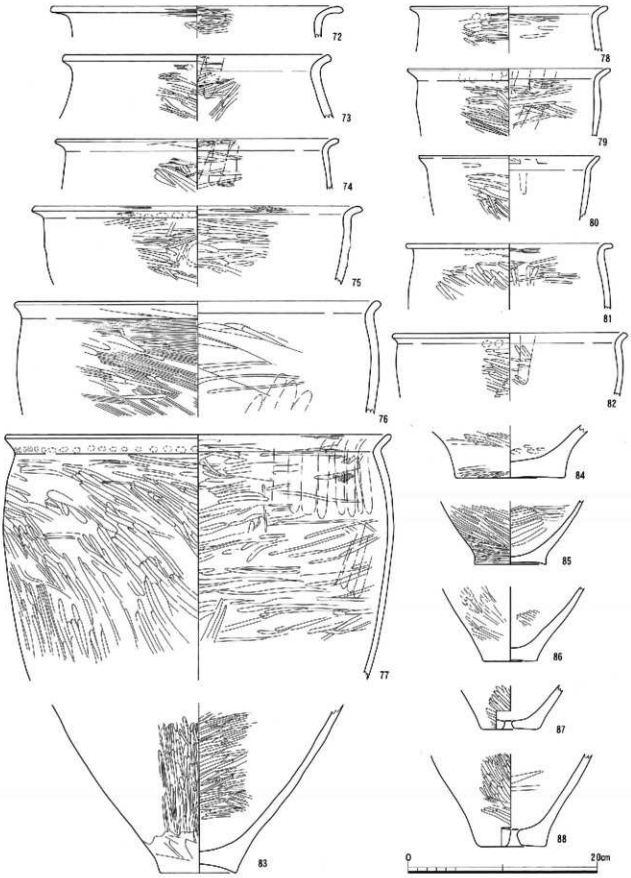
２Ｃ地区の南部で検出した。北東－南西に直線的に伸びるもので、ＳＰ469・ＳＰ470・ＳＰ475に切られている。検出長2.3m、幅0.25～0.6m、深さ0.13mを測る。埋土は灰褐色粘土である。遺物は弥生土器片が出土している。

ＳＤ412

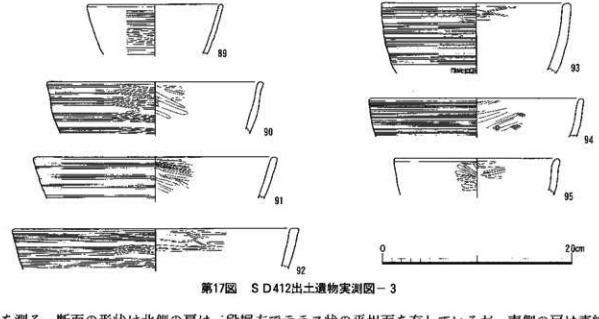
２・３Ｃ地区で検出した。北東－南西に伸びるもので、検出長2.5m、幅0.5～1.0m、深さ0.5m



第15図　ＳＤ412出土遺物実測図－１



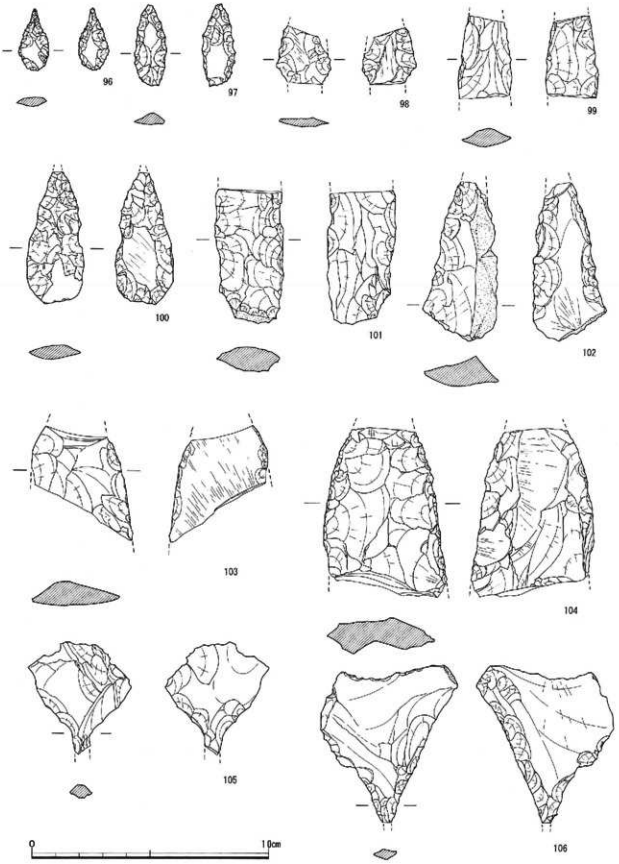
第16図　ＳＤ412出土遺物実測図－２



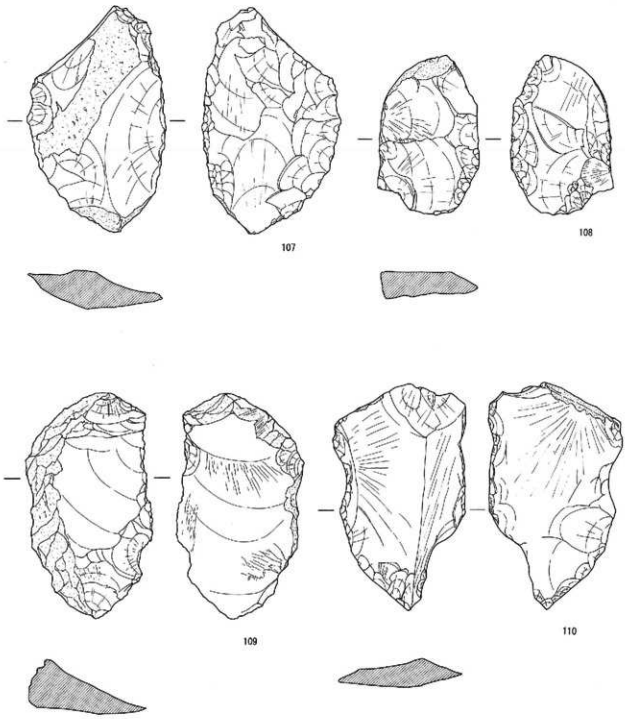
第17図　ＳＤ412出土遺物実測図－３

を測る。断面の形状は北側の肩は二段掘方でテラス状の平坦面を有しているが、南側の肩は直線的である。また、ＳＤ412南肩を境として、南側へ0.2～0.3ｍ下がる微地形を形成している。埋土は粘土を主体とする２層から成る。遺物は弥生時代中期前半の土器類の他、木製品、石器、獣骨、貝殻、種子、植物遺体などが多量に出土しており、総量はコンテナ７箱におよぶ。64点(48～111)を図化した。内訳は弥生土器類48点(48～95)、石器類15点(96～110)、木製品１点(111)である。壺類は24点(48～71)である。48～59は広口壺である。48～55・58・59は口縁部片である。口縁部が大きく開く形状で、口縁端部は丸味を持って終わる55・58・59、端部幅を漸増して端面が外傾する49・51・53・54、内傾する48・52、端部下端を拡張し外傾する50がある。端面の施文では、48が沈線の上下に篦描刻み目文。49が篦描斜格子文。50が櫛描直線文と端面下端に刻み目文。51が３条の櫛描直線文＋刻み目文、端面下端に刻み目文。53が櫛描直線文。56は体部片で、外面に波状文、流水文が施文されている。57～59については、外面の頸部から体部にかけて、多条の櫛描直線文が多用されており、57については外面全体を横位のヘラミガキ、さらに頸部を縦位のハケ調整を施した後に櫛描直線文が８条施文されている。60～62は長頸の広口壺である。60・61は口縁部片である。62は口縁部を欠く以外は図上で復元が可能である。丈高の形態で、頸部から体部上半にかけて櫛描直線文が10条施文されている。63は無文の広口壺である。口縁部を欠く以外は完存しており、口径18.6㎝、器高28.8㎝、底径6.5㎝、体部最大径19.0㎝を測る。64・65は小形壺の口縁部片と推定されるが、細片のため器種は限定できない。66は無頸壺の口縁部片である。体部外面に流水文と１個の穿孔がある。67～71は壺底部である。裏面は67・68が水平、69・70が上げ底、71は一部窪む部分がある。69・71は小形品、それ以外は大形品である。48～71の壺類の内、65・67以外は生駒西麓産である。

72～86は甕であるが全て細片化しており、全容を知り得たものは無い。78～82は小形品で復元口径19.3～24.2㎝を測る。72～75は中形品で復元口径27.8～34.4㎝を測る。76・77は口径38.2㎝以上の大形品である。甕はいずれも如意形口縁を呈する。器面調整は内外面共に横位のヘラミガキを多用しているが、76の外面については、横位のハケの後にヘラミガキが行われている。83～86は甕底部である。底部は平底で裏面が平坦な84、僅かに窪む85・86、大きく窪む83がある。72～



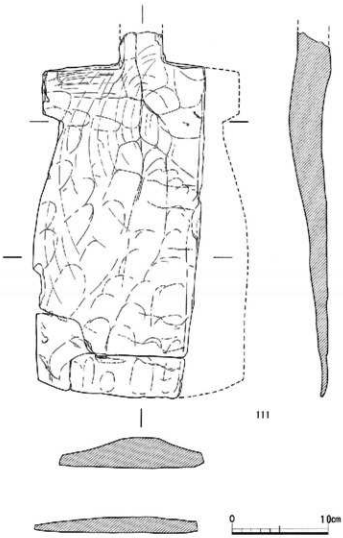
第18図　ＳＤ412出土遺物実測図－４（石器類）



第19図　ＳＤ412出土遺物実測図－５(石器類)

86の甕の色調は褐灰色ないしは赤褐色で、全て生駒西麓産である。87・88は底部有孔土器である。共に裏面側から焼成後に1個の穿孔が行われている。生駒西麓産である。

89～95の7点は鉢片である。概ね深い鉢形を呈する。95以外は、体部外面に多条の櫛描直線文を施す。全て生駒西麓産である。時期的には弥生時代中期前半(河内Ⅱ－1様式)に比定される。石器類15点(96～110)図化した。全て打製石器で内訳は石鏃5点(96～100)、尖頭器2点(101・102)、石剣2点(103・104)、石錐2点(105・106)、スクレイパー2点(107・108)、剥片2点(109・110)である。石材は全てサヌカイト製である。96～100は石鏃である。96は小形品で円基無茎式に分類される。完品で先端は鋭く、断面形状は扁平な菱形を呈する。両側辺に細かい調整剥離が加えられている。0.9g。97は小形品で円基無茎式に分類される。B面に主要剥離面が残る。両側辺に細かい調整剥離が加えられている。1.9g。98は幅広で扁平な剥片を素材としている。先端および基端を欠く。99はやや厚めの剥片を素材としている。先端および基端を欠くが、残存部分の形状から大形品に分類される。100は先端部分を欠く以外は完存している。大形品で円基無茎式に分類される。A面の基部から基端にかけて研磨により平滑にされている。7.1g。101・102は尖頭器である。101は先端部分から中位を欠く。厚みのある剥片素材を使用しており、A面の基端に自然面を残す。側辺の調整剥離はA面が丁寧であるが、B面には階段状剥離面を残す。102はA面には主要剥離面と自然面、B面には側辺に調整剥離が行われている。したがって、B面製作時点に先端部分を欠いたため中断を余儀無くされた未成品と考えられる。103・104は石剣である。103は先端付近と推定される。B面については、側辺に細かい調整剥離が行われる以外は主要剥離面がそのまま使用されている。104は幅広の剥片を素材としている。先端および中位以下を欠く。A面では、明瞭な鎬を造作する調整剥離が行われているが、B面では、中央部分の調整剥離過程で比較的大きな階段状剥離面が生じたため、失敗作として破棄されたものと推定される。105・106は石錐である。105はやや扁平な横長剥片に調整を加えて成形した涙滴形を呈する石錐で、錐部は先端部分が欠損している。9.2g。106は横長剥片を素材とする「V」字型で頭部の両端面に自然面を



第20図　SD412出土遺物実測図－6(木器)

残す。中位以下に調整剥離を施して錐部つくる。錐部断面は菱形で先端部分を欠く。19.6ｇ。107・108はスクレイパーである。107は自然面を残す素材剥片が使用されている。礫面上を直接加撃して得られた大きな剥離面を利用して刃部としている。64.1ｇ。108は自然面を残す素材剥片の対置する縁辺を刃部としている。30.1ｇ。109・110は剥片である。109は拳大の石核から得られた剥片である。自然面の節理に直交する剥片である。110は平坦な自然面を持つ石核から得られた剥片である。木器類は鋤・柄状の物・板材等が出土しているが図化したものは鋤１点(111)である。片側辺を欠く。柄の形状からみて、一本鋤と推定される。側縁の上部が「く」の字形に抉られている。樹種はカシ類である。

小穴(ＳＰ)

総数で77個(ＳＰ401～ＳＰ477)の小穴を検出した。小面積に関わらず多数の小穴が錯綜した状況で検出されている。平面形状では円形・楕円形・不定形がある。規模は径0.05～0.80m、深さ0.03～0.40mを測る。埋土は緑灰色シルト質粘土ないしは黒色シルト質粘土である。柱根や礎板が検出されたものがあり、掘立柱建物を構成した柱穴が存在しているが、明確に復元できたものはない。出土遺物はＳＰ401・405・407・417・424・425・427・435・444・445・450・454・456～460・462・463・466・367・470・476・477から弥生土器・石器等が出土しており、図化可能なものについては第20・21図に掲載した。個々の法量等の詳細は第１表に委ねた。

第２表　第４面　小穴(ＳＰ)法量表(単位m)

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	出土遺物	備考
ＳＰ401	1Ｔ-1Ａ	楕円形	0.38	0.28	0.17	弥生土器	112
ＳＰ402	〃	円形	0.13	0.13	0.21		
ＳＰ403	〃	楕円形	0.28	0.22	0.18		
ＳＰ404	〃	円形	0.12	0.12	0.18		
ＳＰ405	1Ｔ-1・2Ａ	不定形	0.80	0.43	0.13	石器	
ＳＰ406	1Ｔ-2Ａ	楕円形	0.20	0.16	0.03		
ＳＰ407	〃	〃	0.45	0.33	0.18	石器	
ＳＰ408	1Ｔ-1・2Ａ	不整円形	0.60	0.54	0.14		
ＳＰ409	〃	〃	0.32	0.27	0.16		
ＳＰ410	〃	不定形	0.34	0.22	0.17		
ＳＰ411	〃	楕円形	0.50	0.30	0.10		
ＳＰ412	〃	〃	0.42	0.18	0.19		
ＳＰ413	〃	不整円形	0.20	0.20	0.12		
ＳＰ414	〃	楕円形	0.20	0.14	0.08		
ＳＰ415	〃	不定形	0.33	0.28	0.40		
ＳＰ416	〃	〃	0.43	0.15	0.23		
ＳＰ417	〃	〃	0.40	0.27	0.34	弥生土器	116
ＳＰ418	〃	楕円形	0.18	0.11	0.17		
ＳＰ419	〃	不定形	0.38	0.25	0.09		
ＳＰ420	〃	楕円形	0.38	0.30	0.37		
ＳＰ421	〃	円形	0.18	0.18	0.11		
ＳＰ422	〃	楕円形	0.45	0.24	0.14		
ＳＰ423	〃	不定形	0.20	0.17	0.13		
ＳＰ424	〃	円形	0.28	0.28	0.22	石器	

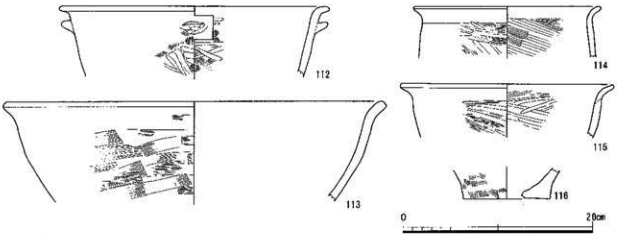
遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	出土遺物	備考
S P425	1T-1・2A	不定形	0.36	0.28	0.10	石器	
S P426	〃	楕円形	0.33	0.15	0.07		
S P427	〃	〃	0.47	0.33	0.04	弥生土器	113
S P428	〃	円形	0.08	0.08	0.06		
S P429	〃	楕円形	0.07	0.05	0.05		
S P430	〃	円形	0.12	0.12	0.09		
S P431	〃	楕円形	0.27	0.12	0.05		柱根
S P432	1T-2A	円形	0.40	0.40	0.27		
S P433	〃	〃	0.15	0.15	0.04		
S P434	〃	〃	0.20	0.20	0.10		
S P435	〃	〃	0.15	0.15	0.22	石器	
S P436	〃	〃	0.25	0.25	0.11		
S P437	〃	不定形	0.38	0.23	0.18		柱根
S P438	〃	楕円形	0.27	0.20	0.15		
S P439	〃	不定形	0.40	0.30	0.10		
S P440	〃	〃	0.48	0.20	0.34		
S P441	〃	楕円形	0.16	0.11	0.15		
S P442	〃	〃	0.30	0.13	0.13		
S P443	〃	円形	0.17	0.17	0.15		柱根
S P444	〃	不定形	0.31	0.11	0.11	弥生土器・石器	柱根・114・117
S P445	〃	不整円形	0.38	0.34	0.11	石器	119・120
S P446	〃	円形	0.22	0.22	0.11		
S P447	〃	〃	0.45	0.08	0.11		
S P448	2T-1C	楕円形	0.35	0.30	0.09		
S P449	〃	〃	0.42	0.28	0.13		
S P450	〃	〃	0.22	0.13	0.08	弥生土器	
S P451	〃	不定形	0.13	0.10	0.05		
S P452	〃	円形	0.14	0.14	0.07		
S P453	〃	〃	0.17	0.17	0.04		
S P454	〃	楕円形	0.23	0.18	0.07	剥片	
S P455	〃	円形	0.12	0.12	0.05		
S P456	〃	楕円形	0.43	0.28	0.37	石器	柱根
S P457	〃		0.34	0.34	0.22	弥生土器・石核	柱根
S P458		不定形	0.50	0.42	0.48	弥生土器	
S P459		〃	0.43	0.22	0.25	剥片	
S P460	〃	円形	0.30	0.30	0.08	石核・剥片	礎板
S P461		不整円形	0.22	0.16	0.06		
S P462	〃	楕円形	0.24	0.20	0.30	剥片	
S P463		〃	0.18	0.10	0.13	弥生土器	
S P464	〃	〃	0.25	0.18	0.15		
S P465	〃	円形	0.29	0.28	0.23		
S P466	〃	不定形	0.56	0.28	0.11	弥生土器	
S P467	〃	円形	0.32	0.32	0.06	弥生土器	
S P468	〃	楕円形	0.35	0.27	0.22		
S P469	〃	〃	0.28	0.22	0.20		
S P470	〃	不定形	0.43	0.40	0.11	弥生土器・木片	
S P471	〃	〃	0.47	0.27	0.06		

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	出土遺物	備考
ＳＰ472	2Ｔ-1Ｃ	不定形	0.30	0.25	0.07	石器	柱根
ＳＰ473	〃	円形	0.25	0.25	0.10		柱根
ＳＰ474	〃	楕円形	0.32	0.21	0.14		
ＳＰ475	〃	〃	0.20	0.31	0.11		
ＳＰ476	〃	〃	0.40	0.30	0.09	弥生土器	
ＳＰ477	〃	円形	0.25	0.25	0.07	弥生土器・石器	柱根・115・118

小穴出土遺物

9点(112～120)を図化した。内訳は弥生土器5点(112～116)、石器4点(117～120)である。112は中形鉢の細片である。口縁部のやや下部に瘤状突起が付けられている。色調は褐灰色。生駒西麓産。ＳＰ401出土。113は大形鉢の細片である。復元口径39.8cmを測る。如意形口縁を呈するもので、体部が大きく開く。体部外面はヘラミガキ。色調は灰褐色。生駒西麓産である。ＳＰ427出土。114は甕の口縁部片である。復元口径19.4cmを測る。体部内外面共に横位のヘラミガキを施す。体部外面に煤の付着が認められる。生駒西麓産である。ＳＰ444出土。115は甕の口縁部片である。復元口径22.3cmを測る。体部内外面共に横位のヘラミガキを施す。生駒西麓産である。ＳＰ477出土。116は甕底部の細片である。復元底径9cmを測る。色調は淡灰褐色。生駒西麓産。ＳＰ417出土。出土土器類については、概ね弥生時代中期前半(第Ⅱ様式)に比定される。

117～120は石器である。117が石錐である。小さな頭部から細長い棒状の錐部が付く。錐部断面は菱形を呈する。1.9g。ＳＰ444出土。118は尖頭器の未成品である。上半分が折損している。基部付近に自然面を残す。両面共に階段状剥離面が顕著である。ＳＰ477出土。119は石庖丁の細片である。刃部は片刃で、両面ともに丁寧な研磨が行われている。石材は緑色片岩である。ＳＰ445出土。120は台石である。上面と右側面に研磨面が認められる。裏面には敲打痕が多数存在している。石材は砂岩である。ＳＰ445出土。

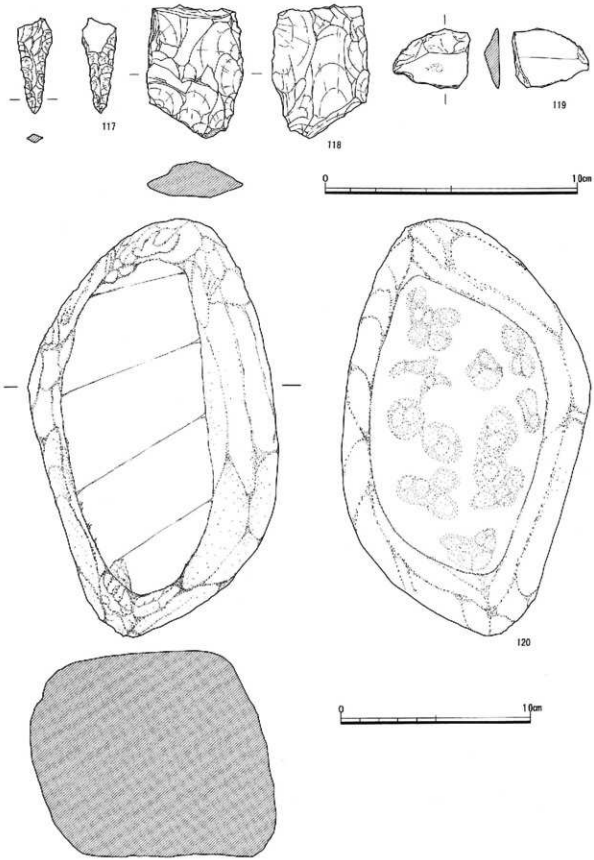


第21図　ＳＰ401(112)・ＳＰ417(116)・ＳＰ427(113)・ＳＰ444(114)・ＳＰ477(115)出土遺物実測図

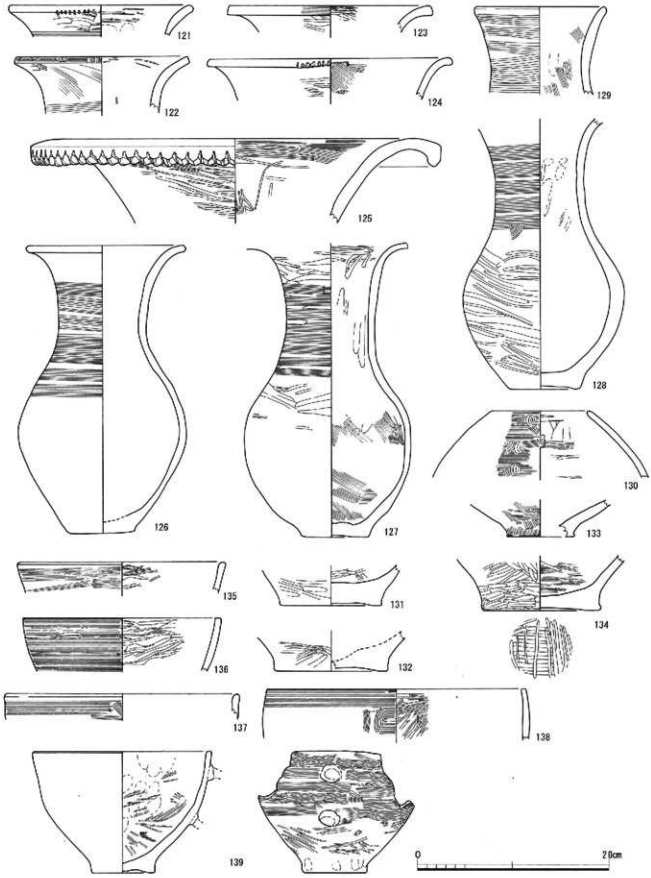
土器集積(ＳＷ)

ＳＷ401

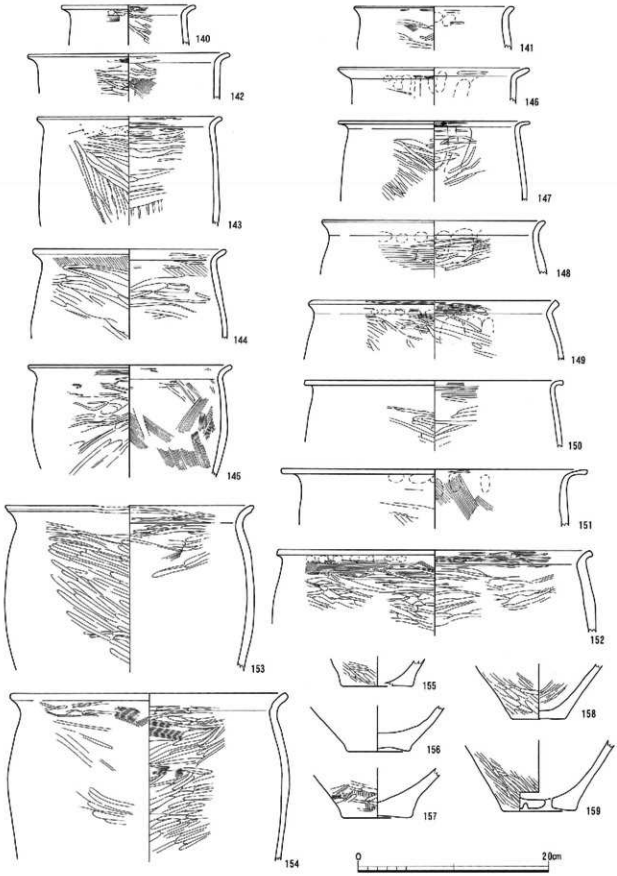
第2トレンチの3Ｃ地区で検出した。ＳＤ412とＳＥ401間で検出したもので、明確な掘方は持



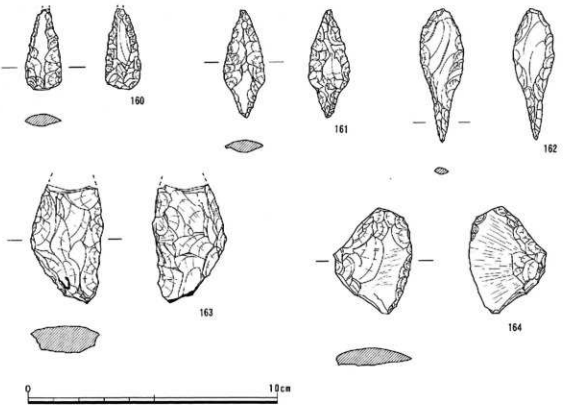
第22図　S P444(117)・S P445(119・120)・S P477(118)出土遺物実測図



第23図　ＳＷ401出土遺物実測図－１



第24図　ＳＷ401出土遺物実測図－２



第25図　ＳＷ401出土遺物実測図－３

たず、東西約0.5ｍにわたって多量の土器類を中心とする遺物が集積していた。弥生時代中期前半を中心とする弥生土器の完形品や石器、木製品が含まれており、総量はコンテナ３箱程度である。総数44点(121～164)を図化した。弥生土器は39点(121～159)である。壷類は14点(121～134)である。121～124は広口壷片である。口縁端面下端に刻み目を入れる121・124と口縁端面に櫛描直線文を施文する122・123がある。121・122は頸部に櫛描直線文が施文されている。125は大形の長頸広口壷である。復元口径36.5㎝を測る。垂下する口縁端部下端に逆「Ｖ」字状の単位幅の大きい刻み目文を施す。126～128は長頸広口壷である。３点共に、完形に近い。頸部に多条の櫛描直線文を施文するもので126が７条、127が８条、128が５条で最下段には扇線文が施文されている。129は細頸壷の口縁部片である。残存部分の口頸部外面に櫛描直線文が６条認められる。130は無頸壷片である。体部外面に流水文が施文されている。131～134は壷底部である。器面調整はヘラミガキを多用しており、134については底部裏面に及ぶ。121～134は全て生駒西麓産。35～139は鉢である。139が完形に復元できる以外は口縁部の細片である。体部外面の文様構成は櫛描直線文を施す135～137、櫛描直線文＋流水文を施す138、櫛描直線文＋波状文を施す139がある。139の体部には環状の把手の痕跡が残る。135～139は生駒西麓産。甕は20点(140～159)である。細片が大半で全容を知り得たものはない。140・141は復元口径14.0～16.8㎝程度の小形品である。142～148は復元口径20.2～23.3㎝程度の中形品である。口縁形態は如意形を呈する143～146・148、外折する147がある。149～154は復元口径25.3～32.8㎝程度の大形品である。口縁形態は如意形を呈する153・154、外折する150・151、「く」の字に屈曲し外傾する端面を持つ149・152がある。155～158は甕底部である。平底で裏面が平坦な158・158、上げ底の156・157がある。159は底部有孔甕である。穿

孔は並行して2孔が焼成後に穿たれており、貫通するものと貫通しないものがある。色調は褐灰色～赤褐色で、全て、胎土中に角閃石を含む生駒西麓産である。時期的には弥生時代中期前半(河内Ⅱ－2様式)に比定される。

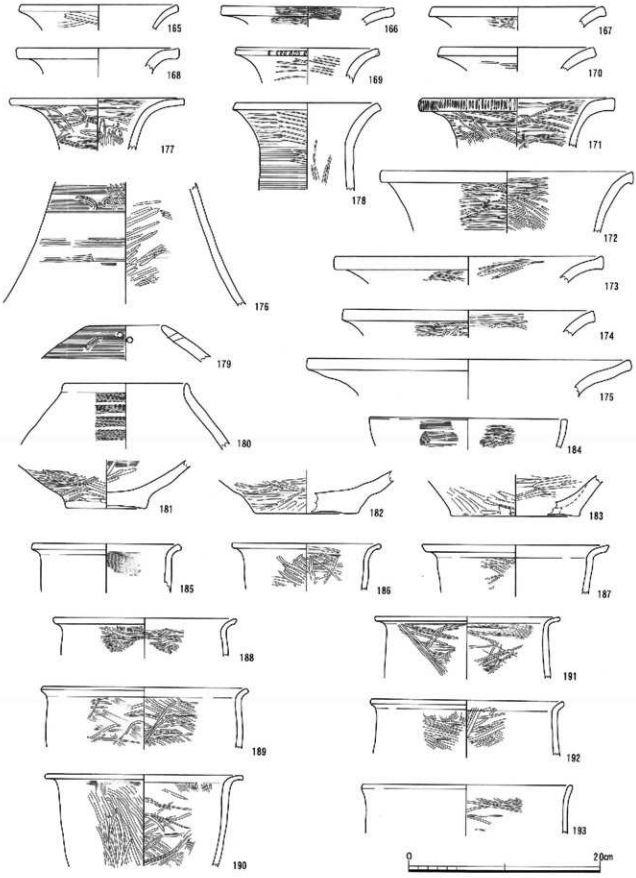
石器類は5点(160～164)を図化した。全てサヌカイト製の打製石器である。160・161は石鏃である。160が平基無茎式で先端部分を欠く。両側辺に細かい調整剥離が加えられている。2.5g。161は凸基有茎式である。先端から逆刺にかけての両側辺はやや内湾し、逆刺は丸味を持つ。A面基部の両側辺に細かい調整剥離が加えられている。2.3g。162は涙滴形を呈する石錐である。扁平な頭部から幅を減じて棒状の錐部を作るもので先端は鋭く尖る。3.3g。163は先端部分を欠くが尖頭器の未成品と推定される。A面の両側辺はやや大きⅡの調整剥離、B面には両側辺に階段状剥離面が認められる。15.5g。164は横長剥片を素材とする小形のスクレイパーである。A面の側辺にのみ調整剥離を加えて刃部を形成している。B面は主要剥離面で右中央部に打点がある。8.3g。

2)遺構に伴わない遺物

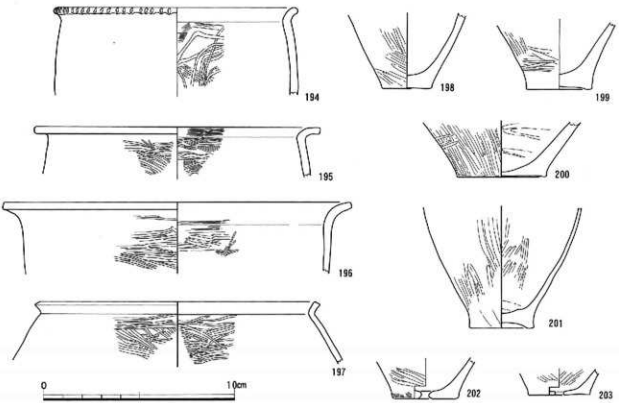
第2トレンチ　第11層出土遺物

49点(165～213)を図化した。内訳は土器類が39点(165～203)、石器類が10点(204～213)である。土器類は細片が大半で全容を知り得たものはない。165～183は壺類である。その内の165～176は広口壺片である。大きく開く口縁部を有するもので、端部は外傾し平坦面を形成する165～167・169・170・174・175、垂直方向に平坦面を作る168・169、上下に小さく肥厚し端面幅を拡張する172・173がある。口縁端面に施文するもののなかでは、端部下端に刻み目文を施す169、刺突文を施す171、横方向に櫛描直線文を施した後に櫛描直線文を間隔を開け縦方向に施す172がある。176は頸部片である。頸部外面に櫛描直線文－流水文を施す。177・178は長頸の広口壺である。178の頸部外面には櫛描直線文が施文されている。179・180は無頸壺の口縁部片である。179は体部外面に櫛描直線文｜流水文が施文されている他、紐孔2個がある。180は口縁部が上方に小さく直線的に伸びる。残存部分で体部外面に4条の波状文が施文されている。181～183は壺底部である。平底の底部で、3点共に上げ底を呈している。181は底部が完存しており、底径8.5cmを測る。165～183の壺類の色調は褐灰色～赤褐色で、全て生駒西麓産である。出土位置は1C地区が167～170・175・176・178・179・181、2C地区が171、3C地区が166・172～174、180・183、4C地区が177・182、5C地区が165である。184は平坦な口縁端部を有する鉢片である。4C地区出土。体部外面に櫛描直線文と流水文が施文されている。185～201は甕である。188～193は復元口径19.0～21.4cmの小形品である。194～197は復元口径25.0～36.0cmの中形品である。188～197は如意形口縁を呈するもので、口縁端面が外傾し平坦な面を形成する189・197以外はやや丸味を持って終わるものが大半を占める。198～201は甕底部である。底部は平底で、裏面は平坦面を持つ198・200と上げ底を呈する199・201が有る。201・203は底部有孔土器である。2点共に、焼成後に穿孔が穿たれている。188～203は色調が褐灰色で、生駒西麓産である。出土位置は1C地区が196・199、2C地区が188、3C地区が186・187・190・193～195・197・200～203、4C地区が185・189・191・192・198である。弥生時代中期前半(河内Ⅱ－1様式)に比定される。

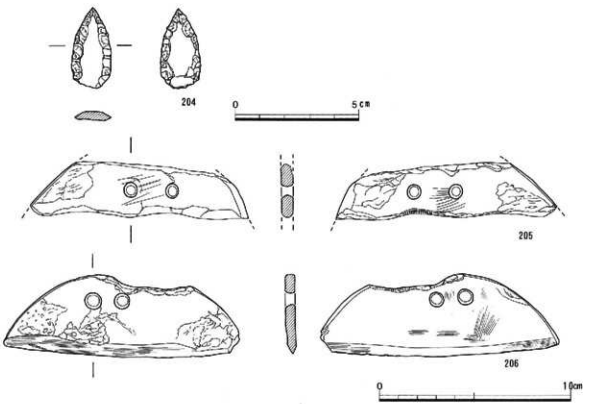
石器類は10点(204～213)図化した。204はサヌカイト製石鏃である。円基無茎式に分類される。



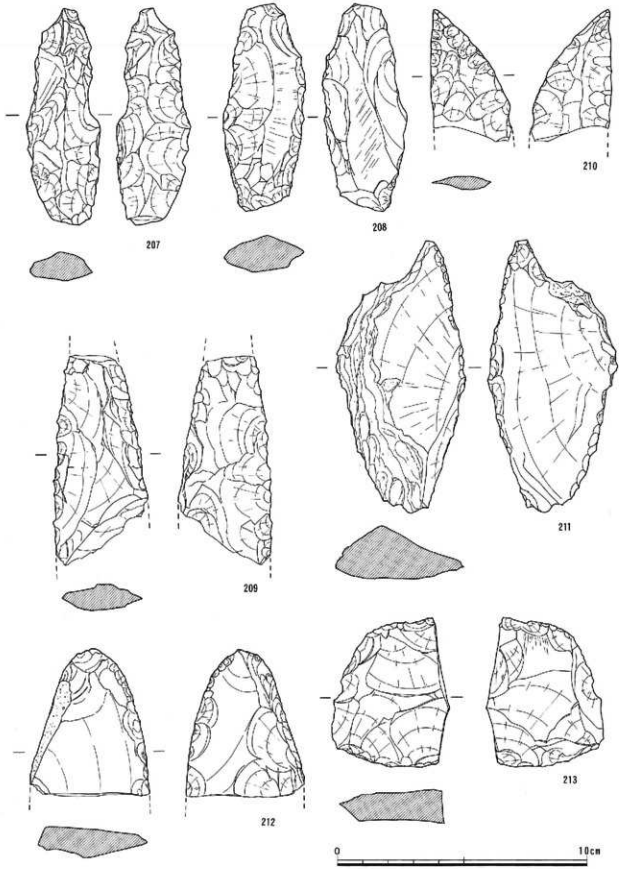
第26図　第２トレンチ　第11層出土遺物実測図－１



第27図　第２トレンチ　第11層出土遺物実測図－２



第28図　第２トレンチ　第11層出土遺物実測図－３



第29図　第２トレンチ　第11層出土遺物実測図－４

扁平な剥片素材を利用しており、両面中央部に幅広の剥離面を持つ。中央部の断面形状は六角形状を呈する。両側辺に小さな剥離が施されている。2.1ｇ。１Ｃ地区出土。205・206は石庖丁である。205は所謂「背潰れ痕」と呼ばれる痕跡が背部および刃部にある他、両面共に打撃痕が認められる。紐孔は２孔で体部中央部に穿たれている。38.1ｇ。１Ａ地区出土。206は直線刃半月形態で、刃部は両刃である。205と同様、背部に背潰れ痕が認められる他、Ａ面端部付近に打撃痕が認められる。51.0ｇ。１Ａ地区出土。石材は205・206ともに緑泥片岩。207～209はサヌカイト製の尖頭器の未成品である。207は厚みのある剥片素材を使用している。Ｂ面の剥離は粗く、階段状剥離を残す。25.8ｇ。３Ｃ地区出土。208は厚みのある剥片素材を使用している。Ａ面に自然面と調整剥離、Ｂ面に主要剥離面を残す。46.1ｇ。３Ｃ地区出土。209は薄い剥片素材を使用している。先端および基部を欠く。Ａ面に階段状剥離を残す。両面ともに調整剥離は雑で鏃は作られていない。30.1ｇ。１Ｃ地区出土。210はサヌカイト製石小刀である。下半部を折損しているため形状は不明である。両側辺に細かい調整剥離が行われている。9.9ｇ。１Ａ地区出土。211・212はサヌカイト製スクレイパーである。211は自然面を残す素材剥片が使用されている。礫面上を直接加撃により得られた大きな剥離面を利用して刃部としている。97.0ｇ。１Ａ地区出土。212は自然面を残す素材剥片の対置する縁辺を刃部としている。40.2ｇ。１Ｃ地区出土。213は半分以上を欠損している。短辺にあるくりこみを紐かけとすれば打製石庖丁が推定される。素材剥片の両側辺に調整剥離が行われている。39.5ｇ。１Ａ地区出土。

参考文献
・弥生土器
寺沢　薫・森井貞雄　1989「１河内地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編１』木耳社
・須恵器
田辺昭三　1996『陶邑古窯址群１』平安学園考古学クラブ

第３章　まとめ

今回の調査では、弥生時代中期前半（畿内第Ⅱ様式）、弥生時代後期、古墳時代中期、平安時代末期～鎌倉時代に比定される遺構・遺物を検出した。

本調査以前における小阪合遺跡内での発掘調査では、古墳時代初頭～鎌倉時代の遺構群が現地表面から比較的浅い地点で検出されていた。ところが、今回の調査では、従来の調査面より更に0.3～1.1ｍ下部において弥生時代後期の水田遺構と弥生時代中期前半の集落遺構の存在が初めて明らかになり、小阪合遺跡の成立時期を遡らせる結果となった。今回の調査成果が示すように、調査地一帯の弥生時代中期前半～古墳時代初頭までは、氾濫原堆積物の累重を受ける自然環境下にあったようで、これらの条件が深層に存在した弥生時代中期の遺構面の検出を阻害した要因であったと考えられる。

弥生時代中期前半の遺構群については、密集して検出されている他、遺物においても土器類・石器類・木器類が多量に出土していることから、調査地付近一帯が集落域の中核を成す地点に位

貎していたことが推定される。本調査を実施した平成元年以降においても、遺跡内で当該期の新たな知見は皆無であり、集落の実態についての解明は進んでいない。当該期の遺構としては、調査地の北西約400m地点の成法寺遺跡内で、平成13年度に当調査研究会が実施した成法寺遺跡第18次調査で集落域が検出されている。両調査ともに、断片的な調査成果であるため不確定な要素を含むが、本調査地および成法寺第18次調査では、ともに多量の遺物を含む良好な包含層を形成しており、仮に、同一集落に包括されると仮定すれば、東西400m以上の規模を持つ拠点的な大集落であった可能性がある。

第3面で検出したＳＤ301、堤301については、共に第2トレンチの壁面で存在を確認したものである。弥生時代中期前半の遺物を含む第11層を構築面とするもので、上部では第10府を構築面とする弥生時代後期の水田が検出されていることから、中期前半の集落域の廃絶後から弥生時代後期の水田が構築される間に設けられた遺構と推定される。当該期に該当する遺構は小阪合遺跡内では検出されていないが、北西約400m地点の成法寺遺跡内で昭和63年度に大阪府教育委員会が実施した平野中高安線拡幅工事に伴う調査で、中期後半(畿内第Ⅳ様式)の方形周溝墓が検出されており、これらの墓域を形成した集団との有機的な関係が推定される。

弥生時代後期の遺構としては、第2面で水田遺構を中心とする生産域を検出している。当該期の居住域としては、当調査地より南部で実施した区画整理に伴う第10次調査の第9調査区、第16次調査の第7調査区一帯で当該期の居住域が検出されている。一方、生産域としては、調査地の北部で大阪府文化財調査研究センターにより実施された98－7区および小阪合遺跡第40次調査で水田が検出されており、当調査地を含む遺跡範囲の北西部に生産域が広範囲にわたって広がっていたことが推定される。

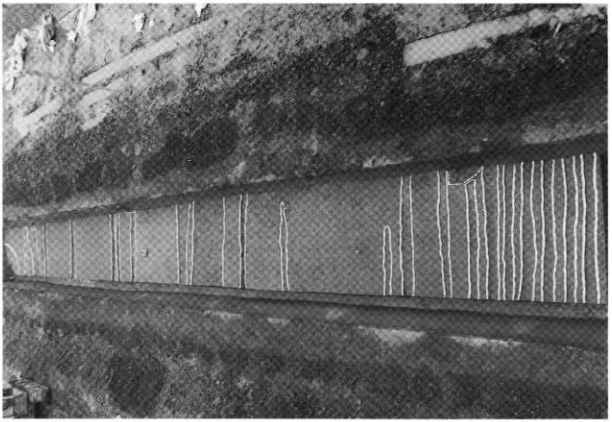
古墳時代中期の遺構としては、ＳＤ121・ＮＲ101を検出している。当該期の居住域は調査地の西に近接する第8次調査の1・2・4調査区、第26次調査を包括する東西約200m、南北約100mが想定されており、本調査地点はこの集落域の東部端にあたるものと推定される。

平安時代末期～鎌倉時代の遺構には、第1トレンチの第1面で検出した生産域に関連した小溝群がある。調査地の西部ないしは北部にかけて実施された第8次調査の1・2・4調査区、第20次調査、第39次調査、大阪府文化財センター平成16年度調査地にかけての広範囲に亘って居住域が展開しており、それらの集団に関連した水田であったと推定される。

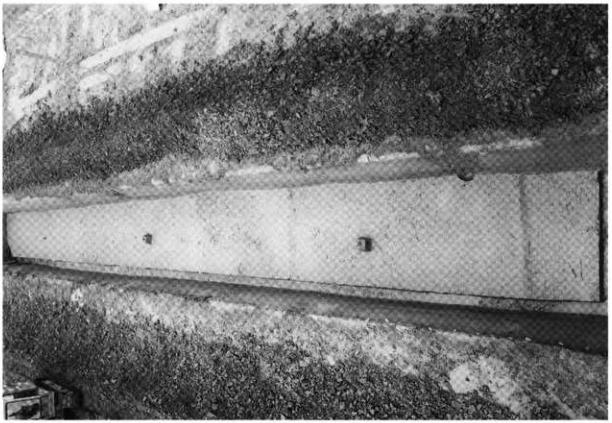
参考文献
・山上　弘　1989「成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅳ　八尾市高見町所在－」大阪府教育委員会
・森本めぐみ　2002「17．成法寺遺跡第18次調査(ＳＨ2001－18)」『平成13年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
・駒井正明他　2000「八尾市若草町所在　小阪合遺跡－都市基盤整備公団八尾団地建替えに伴う発掘調査報告書」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第51集』(財)大阪府文化財調査研究センター
・高萩千秋　1990『小阪合遺跡』－第8・13・16次調査発掘調査報告－　(財)八尾市文化財調査研究会報告26　(財)八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1988「2．小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告16(財)八尾市文化財調査研究会
・坪田真一　1993「Ⅲ小阪合遺跡第20次調査(ＫＳ90－20)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』(財)八尾市文化財調査研究会報告41(財)八尾市文化財調査研究会
・坪田真一　1998．Ⅰ小阪合遺跡(第26次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告61』(財)八尾市文化財調査研究会
・岡田清一　2005「18．小阪合遺跡第39次調査(ＫＳ2004－39)」『平成16年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

・岡田清一・菊井佳弥　2006「16.小阪合遺跡第40次調査(ＫＳ2005－40)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
・松下知世・金光正裕・若林邦彦・新海正博　2005「小阪合遺跡(その３)－山本団地建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告－」『(財)大阪府文化財センター調査報告書　第132集』(財)大阪府文化財センター

図　版



第１トレンチ　第１面全景（南から）



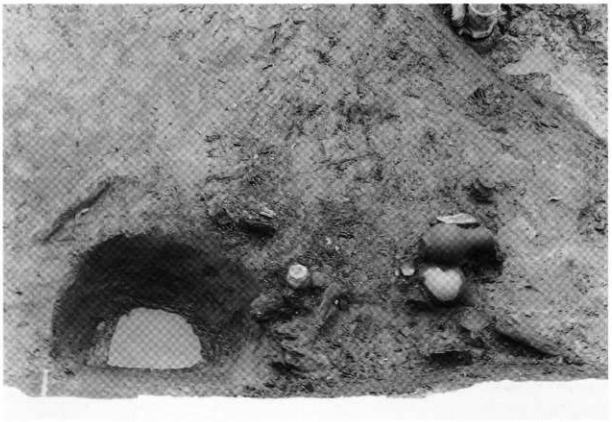
第１トレンチ　第２面全景（南から）

図版二

第2トレンチ　第4面全景(北から)

第1トレンチ　第4面全景(北から)

第 2 トレンチ　第 4 面遺構検出状況(西から)

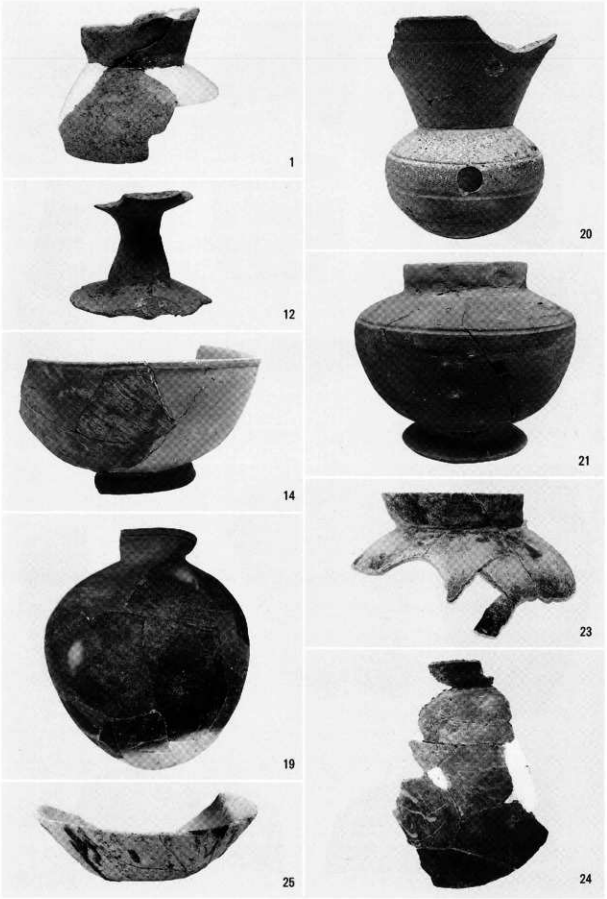


第 2 トレンチ　第 4 面 SE401 検出状況(西から)

図版四

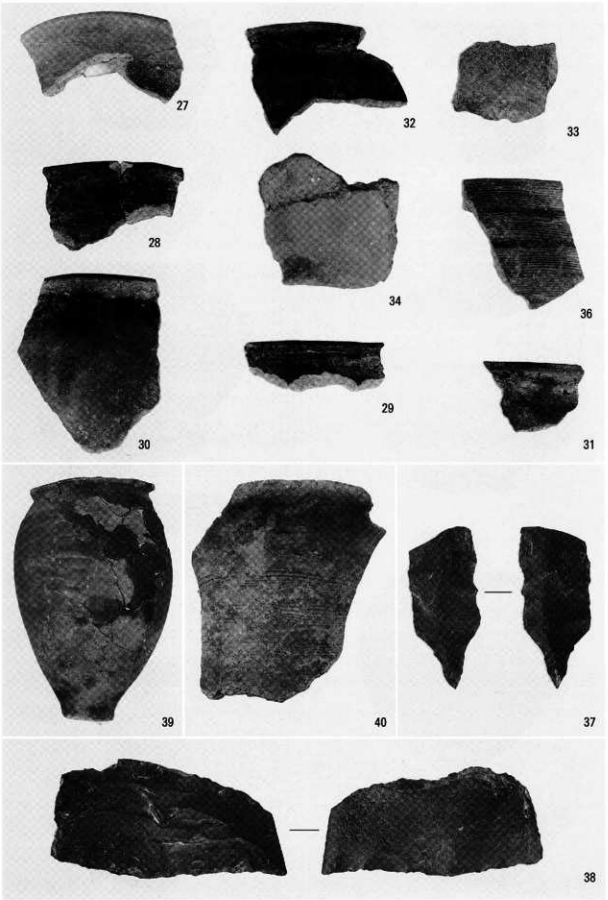
第2トレンチ　第4面 SD412 検出状況(西から)

第2トレンチ　第4面左 SP472(北東から)、右 SP473(南西から)

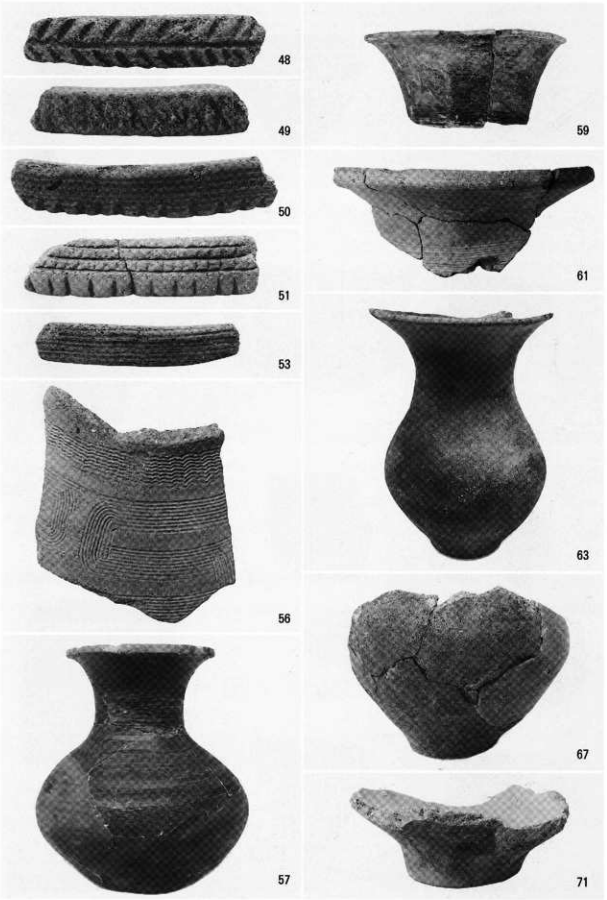


SD121(1)、SD122(12・14・19～21)、NR101(23～25)出土遺物

図版六

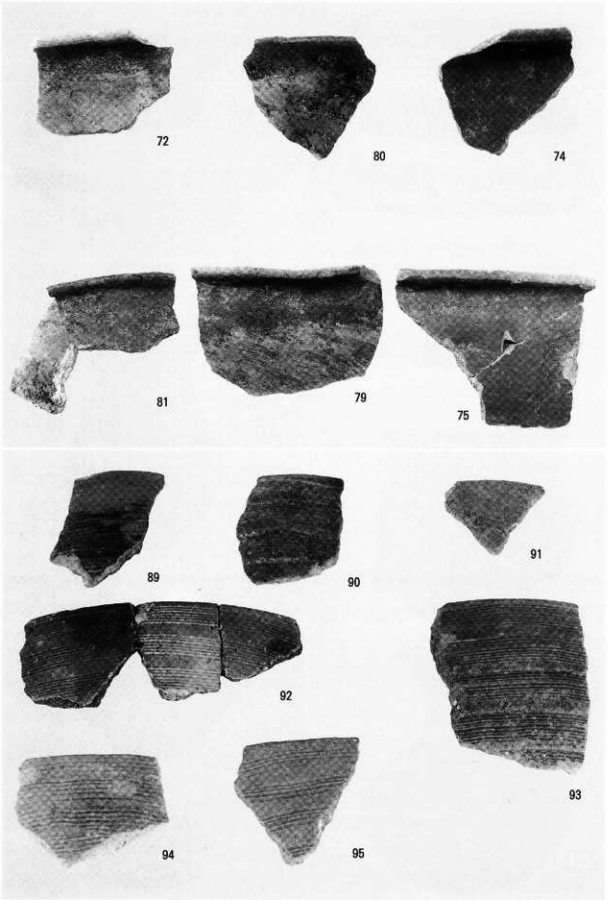


SE401(27 ～ 34・36 ～ 38)、SK402(39)、SK404(40)出土遺物

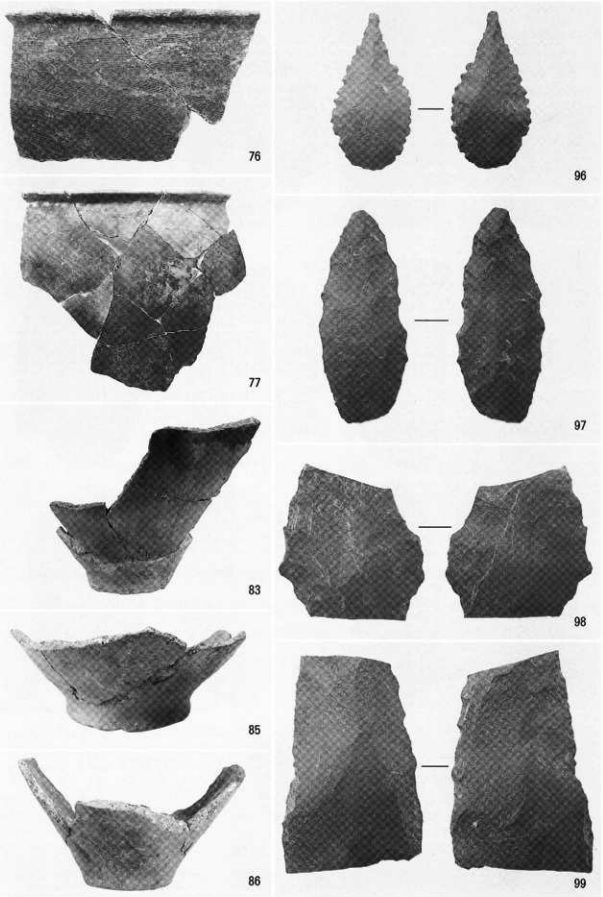


SD412(48～51・53・56・57・59・61・63・67・71)出土遺物

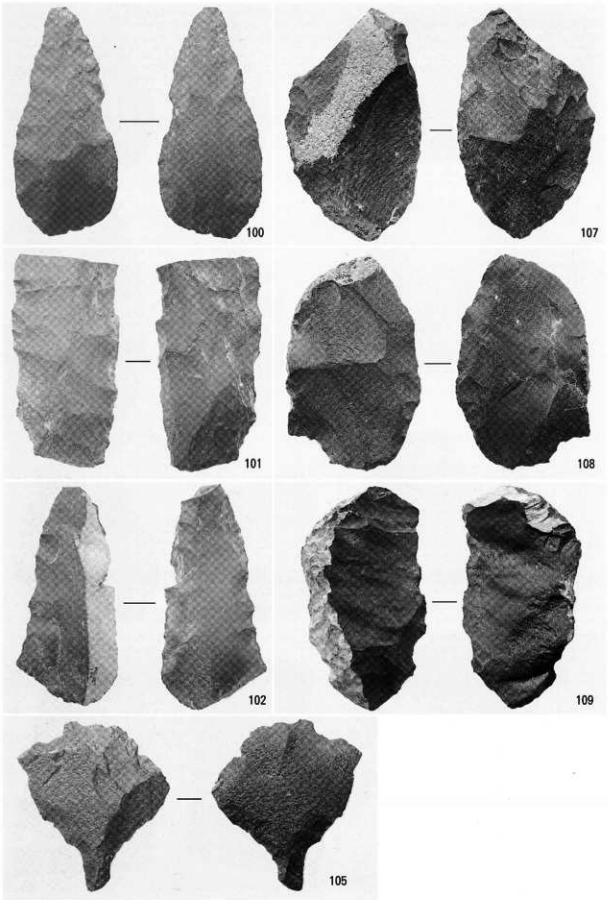
図版八



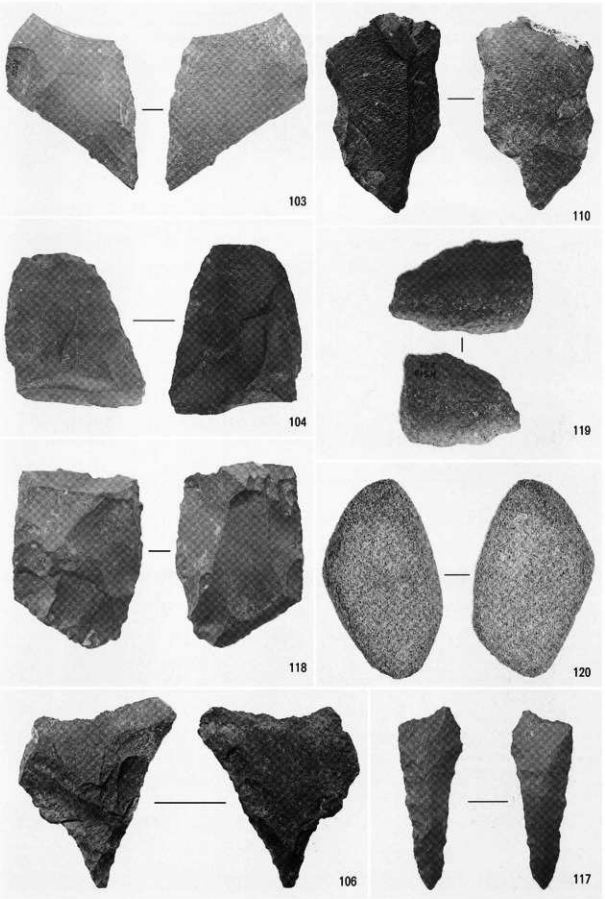
SD412(72・74・75・79～81・89～95)出土遺物



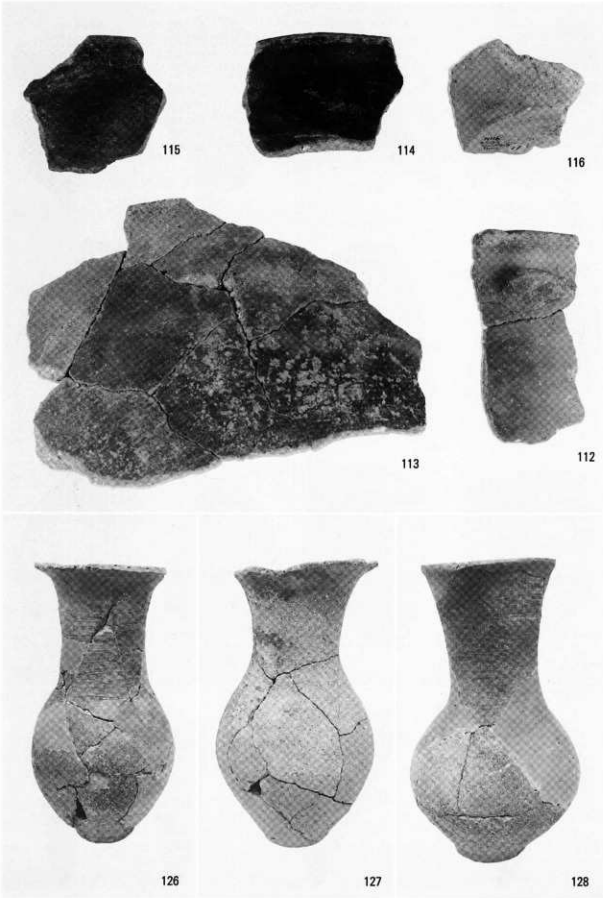
SD412(76・77・83・85・86・96～99)出土遺物



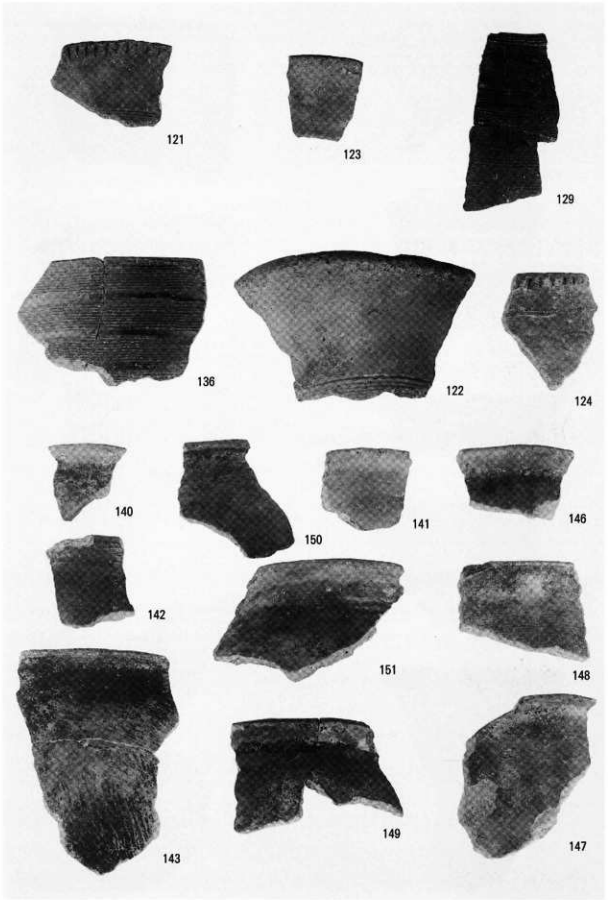
SD412(100 ～ 102・105・107 ～ 109)出土遺物



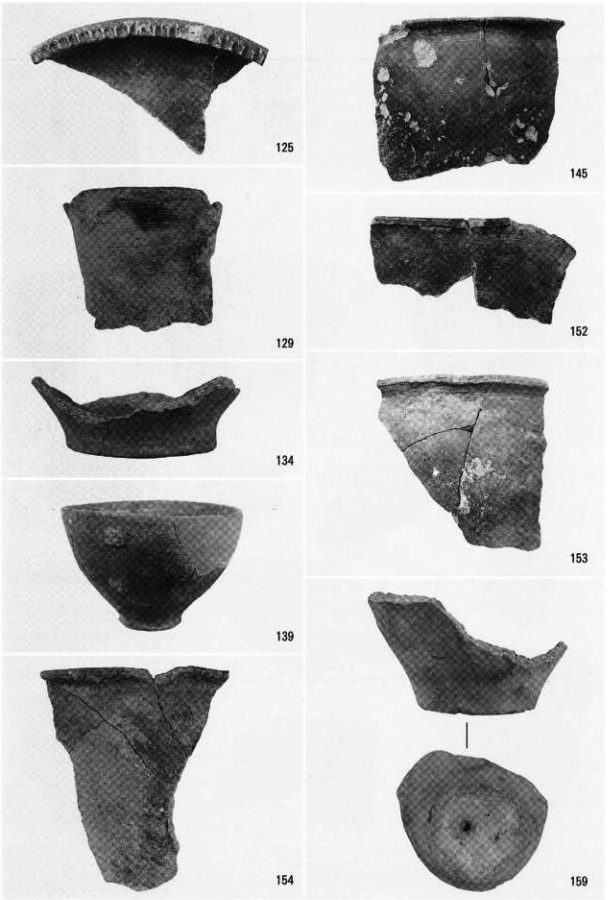
SD412(103・104・106・110)、SP444(117)、SP445(119・120)、SP477(118)出土遺物



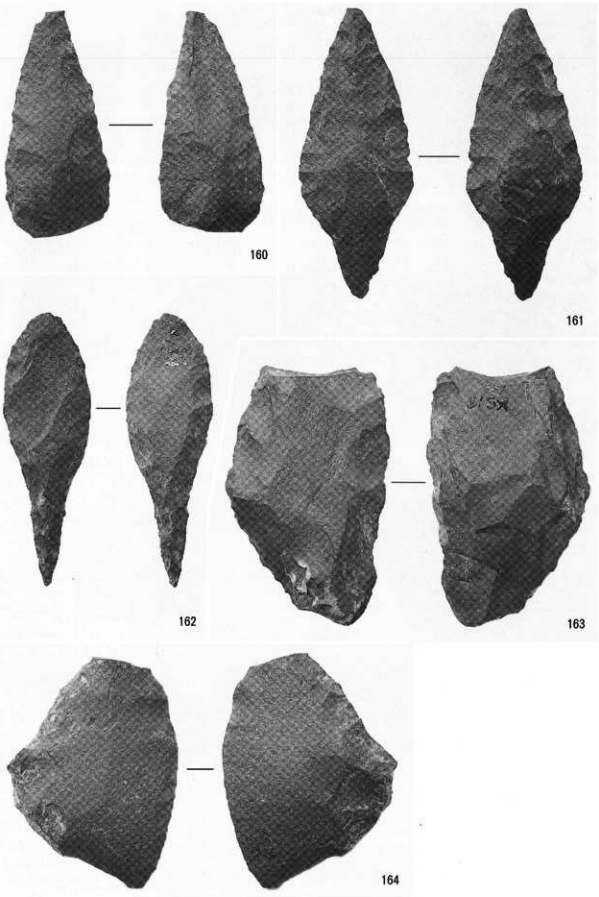
SP401(112)、SP417(116)、SP427(113)、SP444(114)、SP477(115)、SW401(126～128)出土遺物



SW401(121 ～ 124・129・130・136・140 ～ 143・146 ～ 151)出土遺物

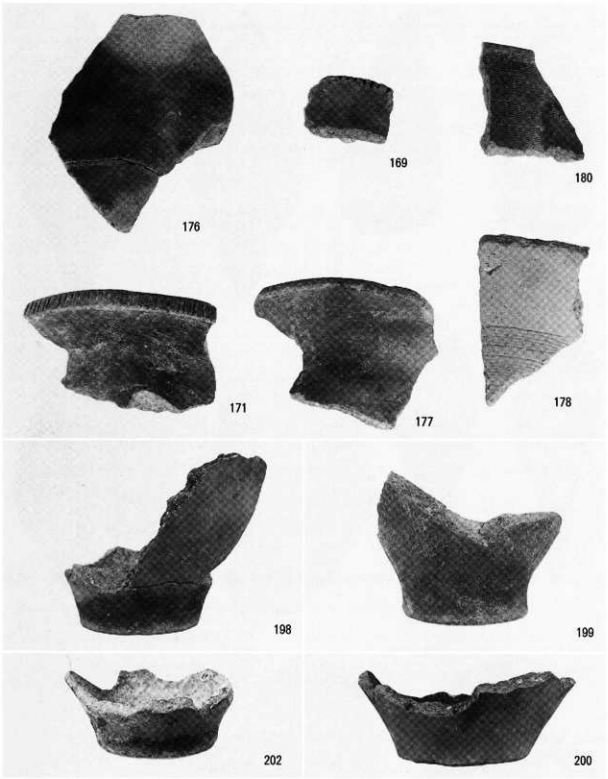


SW401(125・129・134・139・145・152～154)出土遺物

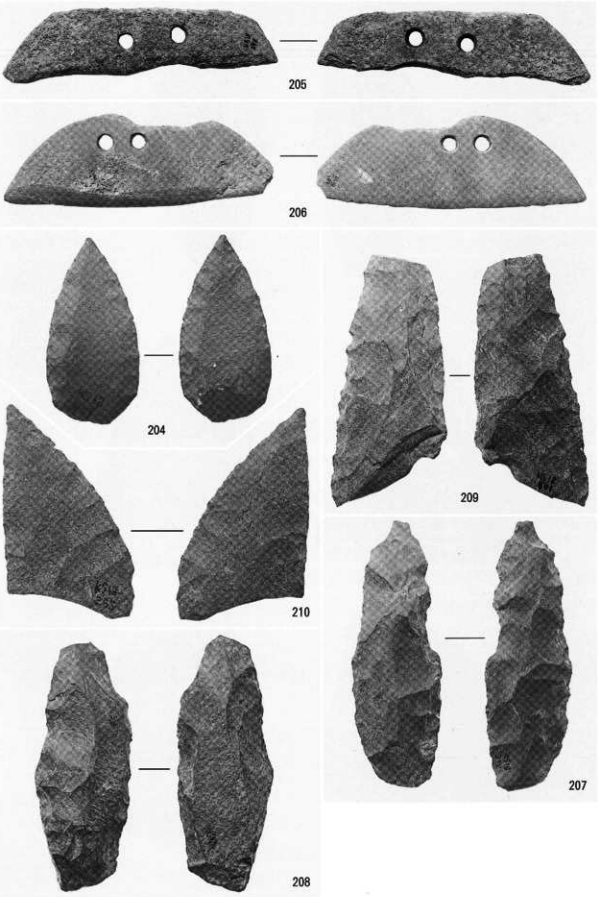


SW401(160 ～ 164)出土遺物

図版一六

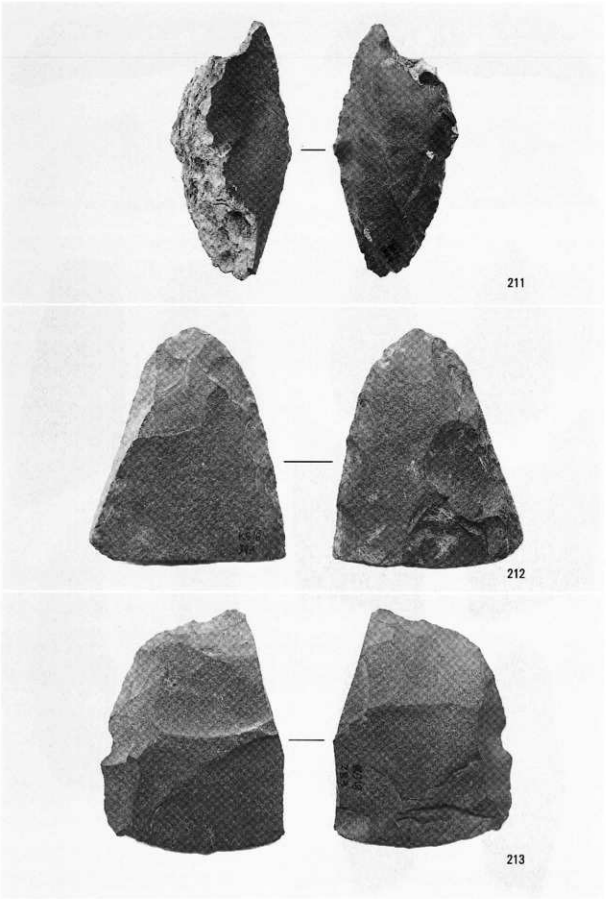


第2トレンチ　第11層(169・171・176～178・180・198～200・202)出土遺物



第2トレンチ　第11層(204～210)出土遺物

図版一八



第2トレンチ　第11層(211～213)出土遺物

Ⅲ 小阪合遺跡第21次調査（ＫＳ91－21）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市若草町で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告である。
1．本書で報告する小阪合遺跡第21次調査（ＫＳ91－21）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は平成４年１月８日から２月10日（実働26日）にかけて、成海佳子を担当者として実施した。調査面積は約300㎡を測る。
1．現地調査においては高橋直美・西田　寿・宮崎寛子・村井俊子が参加した。
1．整理業務は、現地調査終了後、随時実施し平成18年12月に完了した。
1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－北原清子・村田知子、図面トレース－山内千恵子、遺物写真撮影－尾崎良史・原田昌則が行った。
1．本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに……69
第２章　調査概要……70
　第１節　調査の方法と経過……71
　第２節　基本層序……71
　第３節　検出遺構と出土遺物……71
　　１）検出遺構……71
　　２）遺構に伴わない出土遺物……90
第３章　まとめ……91

挿図目次

第1図　調査地周辺図……69
第2図　調査区地区割図……70
第3図　1区検出遺構平断面図……72
第4図　SD11出土遺物実測図……73
第5図　SK22出土遺物実測図……74
第6図　2区平断面図……75
第7図　SD21、SD221出土遺物実測図……76
第8図　NR21出土遺物実測図……77
第9図　3区平断面図……78
第10図　SK31出土遺物実測図……79
第11図　SK32出土遺物実測図……79
第12図　SD31出土遺物実測図……80
第13図　SD33出土遺物実測図……80
第14図　SW31平面図……81
第15図　SW31出土遺物実測図……82
第16図　4区平断面図……83
第17図　SK41平面図……84
第18図　SK41出土遺物実測図－1……85
第19図　SK41出土遺物実測図－2……86
第20図　SK41出土遺物実測図－3……87
第21図　NR41出土遺物実測図……89
第22図　第5層出土遺物実測図……90

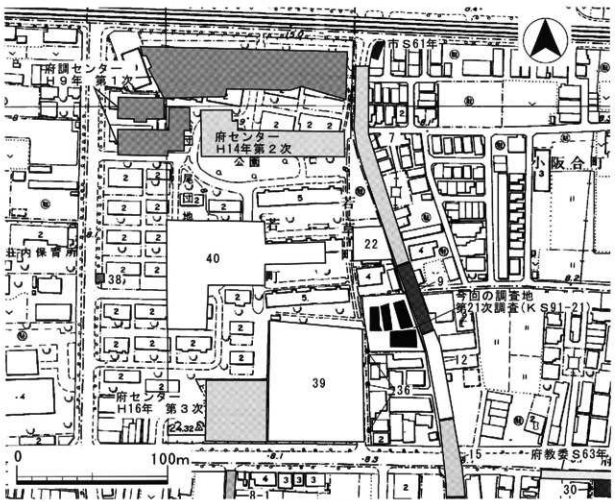
図版目次

図版一　1区全景
　　1区全景
図版二　1区　SE11検出状況
　　1区　SE12検出状況
図版三　2区　上層遺構検出状況
　　2区　下層遺構検出状況
図版四　3区　全景
　　3区　全景
図版五　3区　SW31検出状況
　　4区　全景
図版六　4区　SK41上部遺物出土状況
　　4区　SK41下部遺物出土状況
図版七　4区　SK41完掘状況
　　4区　SK41細部
図版八　1区　SD11、2区　SK22出土遺物
図版九　2区　SK22・SD22・NR21、3区
　　SK31・SK32出土遺物
図版一〇　3区　SD31・SD33出土遺物
図版一一　3区　SW31出土遺物
図版一二　4区　SK41出土遺物
図版一三　4区　SK41出土遺物
図版一四　4区　SK41・NR41出土遺物
図版一五　第5層出土遺物

第１章　はじめに

小阪合遺跡は大阪府八尾市のほぼ中央部の若草町、小阪合町１・２丁目、南小阪合町１・２・４丁目、青山町１～５丁目、山本南７・８丁目一帯の東西0.9㎞、南北0.9㎞に広がる弥生時代中期～近世に至る複合遺跡である。地理的には旧大和川水系による河成堆積で形成された河内平野南東部に位置している。平野内には、現在の八尾市南東部にあたる二俣地区を基点として旧大和川の主流であった長瀬川から玉串川が東に分流し北西方向に流下していた。小阪合遺跡はこの２大河川に挟まれて、南北方向に展開する低位沖積地上に位置し、さらに遺跡内の東部では中河川である楠根川が南東から北西方向に流下しているため、現地表面の標高は北部に行くに従って低く、南部で９ｍ前後、北部で８ｍ前後を測る。小阪合遺跡の成立を見たこの低位沖積地は、水稲耕作を生活基盤とする弥生時代前期以降、比較的安定した地理的条件を背景として数多くの遺跡が密集する形で成立している。当遺跡周辺に限っても、北西に東郷遺跡、西に成法寺遺跡、南西に矢作遺跡、南に中田遺跡が隣接している。

昭和57～63年に実施された南小阪合地区中心とする区画整理事業に伴う発掘調査で、弥生時代



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/2500）

中期～近世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。なかでも、古墳時代初頭から前期における集落の広範囲な分布や数多くの他地域から搬入された土器群存在は、当時の地域間交流の一端を知るうえで貴重な資料を提供する結果となった。

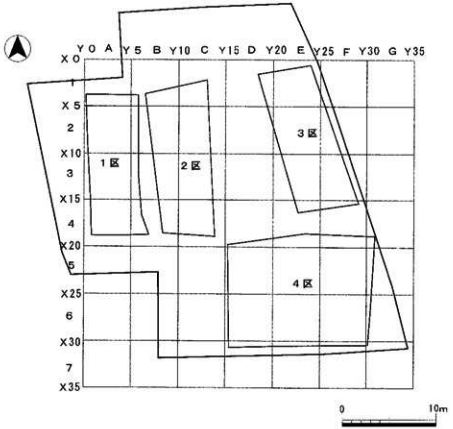
今回の調査地は遺跡範囲の北部に位置しており、昭和30年に小阪合遺跡発見の端緒となった若草町の大阪府営住宅の東部に近接する地点にあたる。

第2章　調査概要

第1節　調査の方法と経過

今回の調査は共同住宅建設工事に伴うもので、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した発掘調査の第21次調査(ＫＳ91－21)にあたる。調査区は、建物の基礎杭の位置に合わせ、調査対象地の西部に2箇所(1区・2区)、東部に1箇所(3区)、南部に1箇所(4区)の計4箇所を設定した。

調査方法は、厚さ1.2～1.4mの盛土・旧耕土を機械掘削し、以下0.5～1.6mを手掘りとして調査を行った。調査区内の地区割りについては、北西隅に任意の地点(Ｘ０・Ｙ０)を設け、そこから5m単位に区画した。地区の呼称方法は東西方向がアルファベット(西からＡ～Ｇ)、南北方向が算用数字(北から1～7)で示し、1Ａ～7Ｇ地区とした。地点の表記については、Ｘ・Ｙ軸の



第2図　調査区地区割図(Ｓ＝1/400)

交点の数値で示した。遺構名の表示については、遺構略号の後に地区名を付与し、遺構番号とあわせて表記した。〔凡例ＳＫ11〕。

調査の結果、奈良時代中期、鎌倉時代前期～室町時代中期と近世に比定される遺構・遺物を検出した。出土遺物は、古墳時代前期～近世に比定される土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、国産陶器、中国製磁器、屋瓦、石製品で総数はコンテナ58箱を数える。

第２節　基本層序

２・４区の下部で埋没自然河川が検出されており、それらに起因して旧耕土(第１層)以下の土層堆積は細礫を含む複雑な層相を示していた。各調査区内で普遍的に存在した７層(第０～第６層)を抽出して基本層序とした。

第０層：盛土。層厚1.2～1.3m。上面の標高はＴ.Ｐ.＋8.8m前後である。

第１層：茶褐色礫混粘土質シルト。層厚0.2m前後。作土層。上面の標高は、Ｔ.Ｐ.＋7.5m前後である。

第２層：黄灰色礫混粘土質シルト。層厚0.05～0.2m。床土。近世時期の遺構構築面。

第３層：黄灰色粘土質シルト。層厚0.05～0.1m。鎌倉時代後期～室町時代中期の遺構構築面。

第４層：灰褐色礫混粘土。層厚0.2～0.35m。

第５層：灰褐色礫混シルト。層厚0.05～0.2m。鎌倉時代前期の遺物を含む。

第６層：黄茶色シルト～粗砂。層厚0.3m以上。調査地西部(１区・２区、４区西端)では粗砂、調査区東部(３区・４区東部)では固く締まったシルト～微砂である。奈良時代中期、鎌倉時代前期の遺構構築面。

第３節　検出遺構と出土遺物

１)検出遺構

調査地の旧状は駐車場で、各調査区共に盛土層(第０層)および旧作土層(第１層)までの約1.2～1.4mまでを機械掘削し、以下0.5～1.6mを人力掘削により調査を実施した。第６層上面を調査対象面としたが、検出された遺構には、第２層上面(近世)、第４層上面(鎌倉時代後期～室町時代後期初頭)、第６層上面(奈良時代中期・鎌倉時代前期)を構築面とするものが混在している。以下、調査区毎に概要を記す。

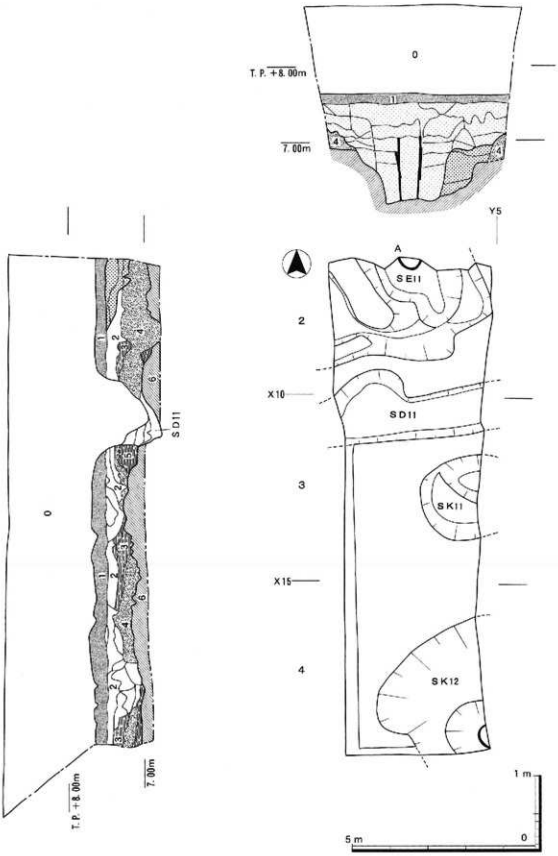
１区：規模(上幅)15×５m。調査期間〔平成４年１月８日～１月14日〕。

現地表下1.5～1.8m(Ｔ.Ｐ.＋7.0～7.3m)の第６層上面を調査対象面とした。調査の結果、第４層上面を構築面とする鎌倉時代後期～室町時代前期の土坑１基(ＳＫ11)、溝１条(ＳＤ11)を検出した他、第２層上面を構築面とする近世の井戸２基(ＳＥ11・ＳＥ12)を検出した。遺物の出土量は調査区全体でコンテナ１箱である。

井戸(ＳＥ)

ＳＥ11

１区北端の２Ａ地区で検出した。南半分の検出で北部は調査区外に至る。本来の構築面が第２



第３図　１区検出遺構平断面図（Ｓ＝水平1/100　垂直1/50）

層であるため、上部を削平した形で検出している。掘方の規模は検出部分で東西幅4.6m、南北幅2.0mを測る。深さは北壁で約1.35mを測り、井戸底は第６層に達している。井戸側は径0.6m、高さ0.8mを測る桶が使用されており、２段分が遺存していた。埋土は井戸側内が青灰色粘土、掘方内がブロックを含む不均質な５層から成る。井戸の掘方内から中世後半を中心とする土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、中国製磁器、屋瓦類の細片が少量出土しているが構築面からみて近世の農耕用井戸と推定される。

ＳＥ12

１区南東隅の４Ａ地区で検出した。ＳＥ11と同様、本来の構築面は第２層である。東部および南部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅2.8m、南北幅3.6mを測る。深さは１m前後で第６層に達している。井戸側には桶が使用されており、１段分が遺存していた。埋土は井戸側内が灰褐色粘土、掘方内がブロックを含む不均質な２層から成る。遺物は掘方内から土師器、須恵器、瓦器の細片が少量出土しているがＳＥ11と同様、第２層を構築面とする近世の農耕用井戸と推定される。

土坑(ＳＫ)

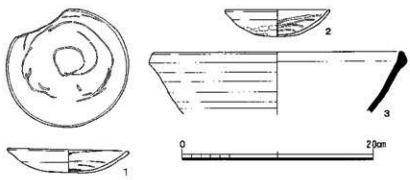
ＳＫ11

１区東部中央の３Ａ地区で検出した。東部は調査区外に至る。二段掘方を有するもので、検出部分で東西幅1.5m、南北幅2.2m、深さ0.4mを測る。第６層上面から構築されており埋土は９層から成る。遺物は鎌倉時代後期～室町時代前期の土師器、須恵器、瓦器などの細片が少量出土している。遺構の帰属時期は鎌倉時代後期～室町時代前期(14世紀前半)が推定される。

溝(ＳＤ)

ＳＤ11

１区北部の２・３Ａ地区で検出した。東西に伸びるもので、検出長3.7m、幅1.3～1.9m、深さ0.2～0.4mを測る。埋土は礫を含む３層から成る。出土遺物は鎌倉時代後期～室町時代前期の須恵器・瓦器等が少量出土している。３点(１～３)を図化した。１・２は瓦器椀である。２点共に和泉型瓦器椀で高台部を欠き、皿状の形態を呈するものである。１は口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径12.8cm、器高2.4cmを測る。２は約1/2が残存している。復元口径10.8cm、器高2.8cmを測る。共に見込みに渦巻き状のヘラミガキを施す。共に尾上氏編年のⅣ－４期(14世紀前半)に比定される。３は玉縁状の口縁端部を有する東播系須恵器鉢の細片である。形状から森田稔氏分類の第Ⅱ期(第２段階)で12世紀後半から13世紀初頭のものと推定される。遺構の帰属時期は鎌倉時代後期～室町時代前期(14世紀前半)である。



第４図　ＳＤ11出土遺物実測図

2区：規模(上幅)15×5m。調査期間〔平成4年1月17日～1月30日〕。

現地表下1.3～1.4m(T.P.+7.5m前後)の第4層上面で、上層遺構として鎌倉時代後期～室町時代前期の溝5条(SD21～SD25)と近世の土坑1基(SK21・SK22)を検出したほか、下層遺構として第6層対応層から切り込む、自然河川1条(NR21)を検出した。各遺構からの出土遺物の総量は、コンテナ5箱程度である。

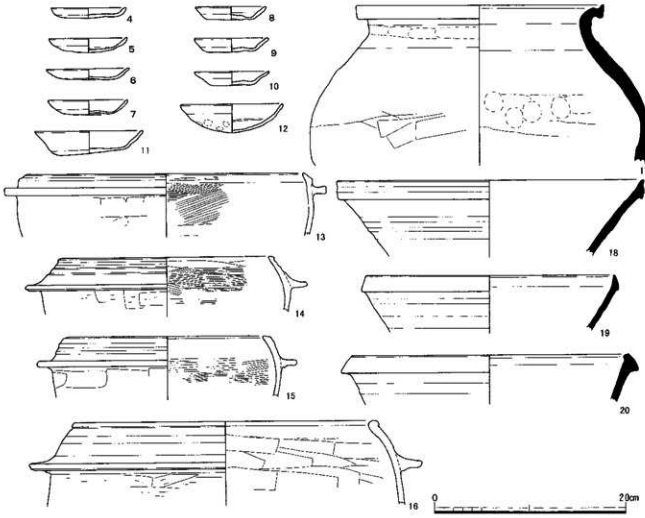
土坑(SK)

SK21

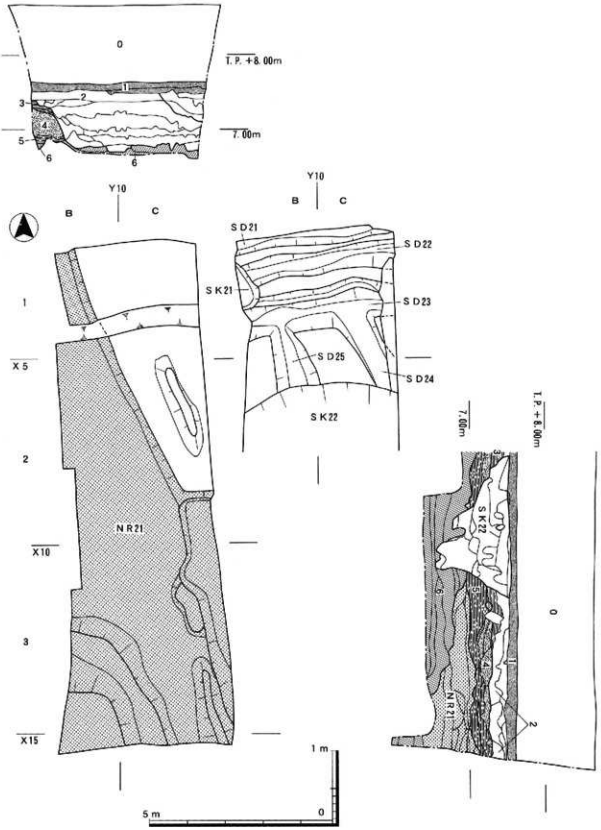
2区北西隅の2B地区で検出した。SD22・SD23を切っており、西部は調査区外に至る。本来の構築面は第2層上面である。検出部分で東西幅0.5m、南北幅1.2mを測る。深さは壁面部分で0.8mを測る。埋土はブロックを含む不均質な10層から成る。遺物としては中世後半の須恵器、瓦質土器、土師瓦、石材の他、近世時期に比定される国産陶磁器を少量含む。

SK22

2区中央部の3B・C地区で検出した。北側でSD24・SD25を切っている。北肩のみの検出のため全容は不明である。東壁においては、摺鉢状の掘方が確認でき、南北幅3.75m、深さ1.0m



第5図　SK22出土遺物実測図



第６図　２区平断面図(Ｓ＝水平1/100　垂直1/50)

程度を測った。上坑上面の南側では、人頭大の石が数個散乱しているのが認められた。東壁で確認した埋土はブロックを多く含む不均質な層相である。内部からは、古墳時代後期から室町時代中期までの土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、中国製磁器、屋瓦、石材等がコンテナ3箱程度出土している。17点(4～20)を図化した。4～10は土師器小皿である。4～6は底部から丸味を持って口縁部が伸びるものである。そのうち6が完形品、他は1/2以上が残存している。7～10は底部から口縁部が内湾ないしは外反して伸びるもので、底部が上げ底気味であることや4～6に比して器高がやや高い特徴を持っている。9が完形品で他は1/2以上が残存している。11は口径11.4cm、器高2.6cmを測る土師器中皿である。4～11の色調は黄灰色～赤灰色で、胎土には水簸された精良な粘土が使用されている。14世紀前半を中心とするものである。12は瓦器椀の細片である。高台が無く椀形を呈するもので、見込みに渦巻き状ヘラミガキが施されている。尾上編年のⅣ－4期(14世紀前半)に比定される。13～15は瓦質羽釜片である。13は口縁端部が外傾し幅広の端面を形成するもので、鍔は短く水平方向に貼り付けられている。菅原正明氏分類の摂津F_2型にあたる。14・15は内傾して伸びる口縁部外面に段を形成するもので、鍔は水平方向に貼り付けられている。森島康雄氏分類のF型式にあたる。16は口縁端部が外側に折り返され玉縁状の口縁部を形成する羽釜である。形状は土師器に特有の形態であるが、本例は瓦質焼成によるものである。17はN字状口縁部を持つ常滑焼の大甕である。肩部外面に自然釉が認められる。18～20は東播系須恵器鉢の細片である。森田氏編年では18・19が第Ⅲ期第1段階(13世紀前半～後半)、20が第Ⅲ期第2段階(14世紀前半)に比定される。遺構の帰属時期は鎌倉時代後期～室町時代前期(14世紀前半)が推定される。

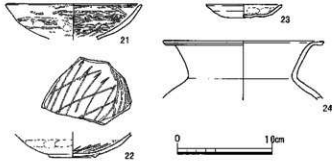
溝(SD)

SD21

2区北端の2B・C地区で検出した。東西方向に伸びるが北肩は調査区外に至る。検出部分で長さ4.1m、幅0.3～0.4m、深さ0.4mを測る。埋土は灰色礫混シルトである。遺物は平安時代後期～室町時代に比定される土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、屋瓦の細片が少量出土している。瓦器椀2点(21・22)を図化した。共に和泉型瓦器椀である。21は体部内外面にヘラミガキが施されている。22は形骸化した高台を有するもので、見込みに単位幅の大きい格子状ヘラミガキが施されている。21は尾上氏編年のⅢ－1～2期(12世紀後半～13世紀初頭)、22がⅢ－2期(13世紀初頭)に比定される。出土遺物にはやや古い時期の遺物を含むが、他の遺物からみて廃絶時期は鎌倉時代後期～室町時代初頭(14世紀前半)が推定される。

SD22

SD21の南に並行して伸びるもので、西端はSK21に切られている。検出部分で長さ4.0m、幅0.6～0.7m、深さ0.5mを測る。埋土は灰色礫混シルトである。遺物は室町時代前半を中心とする土師器、須恵器、瓦器が少量出土して



第7図　SD21(21・22)、SD22(23・24)出土遺物実測図

いる。出土遺物からみて１区で検出したＳＤ11に続くものと推定される。２点(23・24)を図化した。23は土師器小皿である。約1/2が残存している。復元口径8.0cm、器高1.4cmを測る。室町時代前期に比定される。24は須恵器壷の細片である。口縁部内外面および肩部に自然釉が認められる。平安時代中期のものと推定されるが詳細は不明である。遺構の帰属時期は室町時代前期が推定される。

ＳＤ23

ＳＤ22の南に並行して伸びる。南側にＳＤ24・ＳＤ25が合流するほか、西端はＳＫ21に切られている。検出部分で長さ3.2m、幅0.4～0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は灰色礫混シルトである。遺物は出土していない。

ＳＤ24

２区北部の２・３Ｃ地区で検出した。中央部のＳＫ22から北へ伸び、北端はＳＤ23に合流する。検出部分で長さ1.8m、幅0.9m、深さ0.1mを測る。埋土は灰色礫混シルトである。遺物は出土していない。

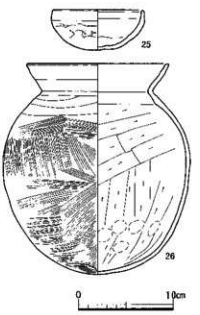
ＳＤ25

２区北部の２・３Ｂ地区で検出した。中央部のＳＫ22から北へ伸び、北端はＳＤ23に合流する。検出部分で長さ2.1m、幅0.6～1.2m、深さ0.2～0.3mを測る。埋土は灰色礫混シルトである。遺物は土師器、須恵器、馬歯が出土しているが時期を明確にし得たものはない。

自然河川(ＮＲ)

ＮＲ21

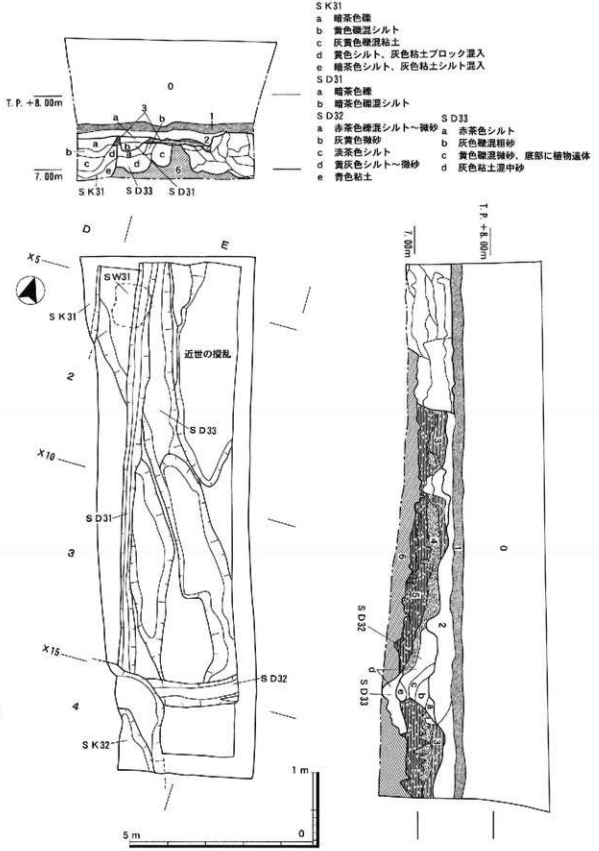
２区の北東部を除く全域で検出した。４区で検出したＮＲ41に続くものである。流路方向は南東－北西方向で、検出部分で長さ13.3m、幅0.6～4.7m、深さ0.2mを測る。流路に沿って伸びる畦状の高まりが東岸の一部に認められ、その部分での比高差は0.5m前後を測る。河川内部はシルト～粗砂の薄い互層が複雑に堆積しており、古墳時代中期～後期の土師器や須恵器がコンテナ４箱分出土している。土師器２点を図化した。25は椀形を呈する小形鉢である。完形品で口径9.5cm、器高4.3cmを測る。器面調整は口縁部内外面ヨコナデ、以下はナデ調整を行うが、ナデが及ばない部分ではクラック状を呈する部分が見られた。色調は淡褐灰色。26は布留式甕である。完形品で口径15.0cm、器高22.4cm、体部最大径19.8cmを測る。口縁端部の形状から、布留式甕の最終段階に分類される。色調は黄褐色である。２点共に古墳時代中期前半に比定される。遺構の廃絶時期は４区で検出したＮＲ41との関係から勘案して奈良時代中期が推定される。



第８図　ＮＲ21出土遺物実測図

３区：規模(上幅)15×６m。調査期間(平成４年１月13日～１月20日)。

現地表下1.4m(T.P.＋7.4m前後)の第４層を構築面とする室町時代前～中期の土坑２基(ＳＫ31・ＳＫ32)、溝２条(ＳＤ31・ＳＤ32)、現地表下1.6～2.0m(T.P.＋6.8～7.0m)の第６層を構築面



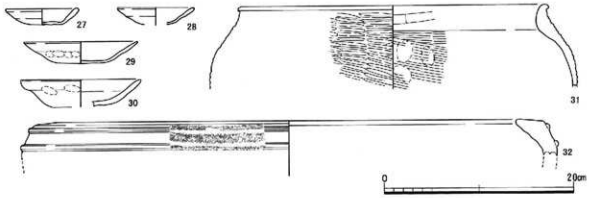
第９図　３区平断面図（S＝水平1/100　垂直1/50）

とする鎌倉時代前期の溝１条（ＳＤ33）を検出したほか、ＳＤ31の上部では室町時代中期の土器集積１箇所（ＳＷ31）を検出した。各遺構からの出土遺物の総量は、コンテナ19箱程度である。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ31

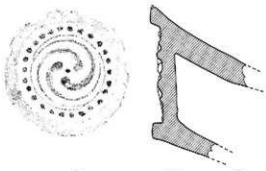
３区北西隅の２Ｅ地区で検出した。北部および西部は調査区外に至る。検出部で東西0.5m以上、南北2.0m、深さ0.45m程度であるが、西壁では２段の掘方が認められ、最深部は0.6mを測る。埋土は３層から成る。内部からは室町時代前期～中期に比定される土師器、須恵器、瓦器、屋瓦、石材等が少量出土している。６点（27～32）を図化した。27～30は土師器皿である。27・28は小皿で、27の口縁部内面に灯心油痕が認められる。29・30は中皿である。31は瓦質の甕細片である。32は瓦質の浅鉢片である。内湾して水平で幅広の端面を形成するもので、口縁部付近には二条の突帯間にスタンプによる花菱文が押捺されている。奈良火鉢に分類されるもので、立石堅志氏分類の浅鉢Ⅴ（15世紀初頭）にあたる。遺構の帰属時期は室町時代中期（15世紀初頭）が推定される。



第10図　ＳＫ31出土遺物実測図

ＳＫ32

３区南西隅の４Ｅ地区で検出した。北東の一部を検出したのみで、南部および西部が調査区外に至る。北側にＳＤ31、東側にＳＤ32が合流している。検出部分で東西幅１m、南北幅2.8m、深さ0.6mを測る。埋土は礫を含む不均質な３層から成る。内部からは室町時代に比定される多量の屋瓦類、土師器、須恵器、瓦質土器、石製品のほか、肩から落ち込んだような状態で大型の石材が出土している。鳥衾１点（33）を図化した。瓦当部分は完存している。中央部に珠文を持つ左巻きの三巴を配する。巴は丸味のあるやや細めの頭部から約3/4周し、末端が圏線と接する。外区内縁には小粒で隆起の大きい珠文26個を廻らせている。外縁は高く幅1.3cm前後を測る。丸瓦および顎部との接合部分が円弧状接合線に沿ってナデ、丸瓦部分は縦位の丁寧なナデが行われている。焼成は良好で、色調は灰白～黒灰色を呈する。室町時代前期（14世紀）のものと推定される。

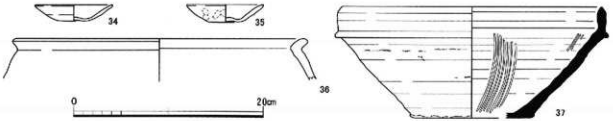


第11図　ＳＫ32出土遺物実測図

溝（ＳＤ）

ＳＤ31

３区西部で検出した。北－南に直線的に伸びるもので、南端はＳＫ32に合流している。検出部分で、長さ10.8m、幅0.3～0.6m、深さ0.25～0.4mを測る。埋土は暗茶色礫混シルト。遺物は鎌倉時代～室町時代後期に比定される土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、屋瓦類が多量出土している。なお、北部の２Ｅ地区では、遺構の機能停止後にＳＷ31が形成されている。４点（34～37）を図化した。34・35は土師器小皿である。底部が上げ底の形態を持つ「へそ皿」に分類される。34が1/2残存、35が完形品である。法量は34が口径8.2cm、器高1.8cm、35が口径8.2cm、器高1.8cmを測る。２点共に色調は白灰色。36は土師器羽釜片である。13世紀代に比定される。37は備前焼擂鉢片である。すり目は７本/2.7cmである。乗岡実氏編年の中世５期ａ（15世紀中葉）に比定される。遺構の帰属時期は室町時代中期（15世紀中～後半）が推定される。



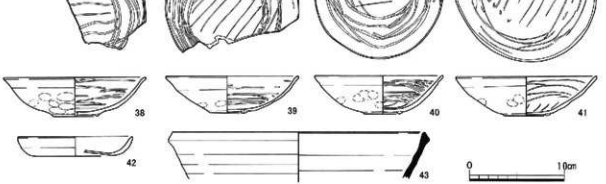
第12図　ＳＤ31出土遺物実測図

ＳＤ32

３区南部で検出した。東－南に伸びるもので、西端はＳＫ32に合流している。検出部分で長さ2.2m、幅0.6～0.7m、深さ0.4～0.5mを測る。埋土は２層で上層が青色粘土、下層が灰青色粗砂混粘土である。出土遺物は室町時代前半を中心とする瓦質土器、屋瓦類が少量出土している。

ＳＤ33

北西から南東に伸びる溝である。ＳＤ31・ＳＤ32、ＳＫ31に切られている。検出部分で長さ5.2m、幅1.2～2.0m、深さ0.3mを測る。埋土は２層で上層が橙色シルト、下層が灰色細粒砂混粘土である。この溝の東岸では６層が畦状に盛り上がり、岸に沿って人頭大の石が数個並んでいたよ



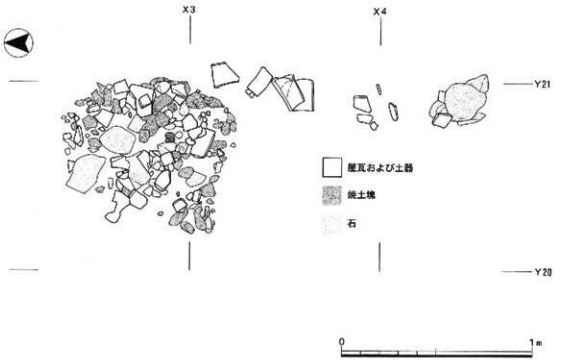
第13図　ＳＤ33出土遺物実測図

うである。畦状の高まりよりさらに東側では、６層が急激に落ち込み、その上層は複雑な上層堆積状況を示している。遺物は土師器、須恵器、瓦器、中国製白磁碗等の細片が少量出土している。６点(38～43)を図化した。38～41は和泉型瓦器椀である。そのうち40・41が完形品である。４点共にやや浅めの体部に形骸化した貼り付け高台が付くものである。体部内面のヘラミガキは粗く、見込みには平行線状ヘラミガキが施されている。口径13.7～15.0cm、器高3.9～4.2cmを測る。色調は、40が炭素付着不良で淡灰色を呈する以外は黒灰色を呈する。尾上編年のⅢ－３期(13世紀前半)に比定される。42は土師器中皿である。復元口径12.1cm、器高2.0cmを測る。43は東播系の須恵器鉢片である。森田編年の第Ⅱ期第２段階(12世紀末～13世紀初頭)に比定される。遺構の帰属時期は鎌倉時代前期が想定される。

土器集積(ＳＷ)

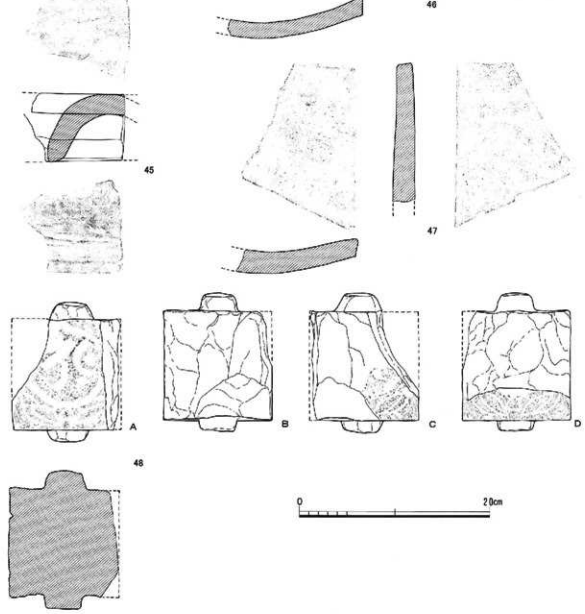
ＳＷ31

３区北東隅の２Ｅ地区で検出した。ＳＤ31の上面に位置する。東西幅1.1m、南北幅1.2mの範囲にわたって、屋瓦類を主に土師器、須恵器、瓦器、国産陶器、中国製磁器、石材、石製品、焼土塊などが、厚さ0.2～0.3mの規模で盛り上がって集積していた。遺物量はコンテナ３箱に及ぶ。石製品の中には破砕された宝篋印塔の一部が含まれている。この土器集積は、東半分がＳＤ31の上面にあたるため、ＳＤ31埋没後に廃棄されたものと考えられる。５点(44～48)を図化した。44は中国製青磁碗の細片である。同安窯系のもので、体部内外面に縦位のハケ目を有する。釉色は黄味色の強い飴色で、釉はガラス質で薄く施釉されている。森田・横田分類の同安窯系青磁Ⅰ－１・ｂ類(12世紀中～13世紀初頭)に比定される。屋瓦は３点(45～47)図化した。45はやや小振りの丸瓦である。凸面は縦位の叩きの後、ナデにより叩き痕が消されている。凹面の布目は細かく、胴



第14図　ＳＷ31平面図(Ｓ＝1/20)

部側縁の面取り幅は広い。鎌倉時代のものか。46・47は平瓦片である。46は凹面・凸面共に離れ砂が認められる。47は凹面がナデ、凸面に縦位のナデが行われている。48は宝篋印塔の塔身部分である。破損が著しく、全容は不明であるが、上下に枘を持ち4面に梵字が刻印されている。一辺の法量は11.5cmを測る小型品である。刻印の意匠は線刻の蓮華座上月輪内に薬研彫りの金剛界四仏種子を配したものと推定される。刻印を持つ面が確認できたのはA・C・Dの3面である。そのうち最も遺存状態が良いA面が、タラーク(宝生如来)、C面については一部であるが、アーク(不空成就如来)の梵字と推定される。石材は砂岩である。この土器集積は、東半分がSD31の

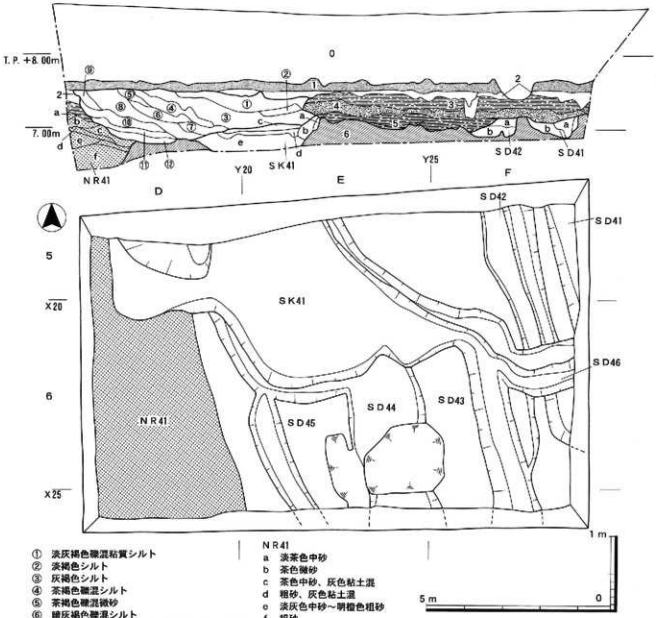


第15図　SW31出土遺物実測図

上面にあたるため、ＳＤ31埋没後に形成された土器集積と考えられる。従って遺構の帰属時期は、室町時代中期(15世紀後半)以降のものと推定される。

4区：規模(上幅)15×12m。調査期間〔平成4年1月20日～2月10日〕。

現地表下1.3～1.7m(T.P.＋7.0～7.3m)の第4層および第6層上面で鎌倉時代前期、室町時代中～後期初頭の土坑1基(ＳＫ41)、溝6条(ＳＤ41～ＳＤ46)、自然河川1条(ＮＲ41)を検出した。各遺構からの出土遺物の総量は、コンテナ33箱である。



① 淡灰褐色礫混粘質シルト
② 淡褐色シルト
③ 灰褐色シルト
④ 茶褐色礫混シルト
⑤ 茶褐色礫混礫砂
⑥ 暗灰褐色礫混シルト
⑦ 暗灰褐色礫混シルト、淡青色粘土ブロック混入
⑧ 灰褐色礫砂、瓦・石を含む
⑨ 灰褐色礫砂
⑩ 茶褐色礫混シルト、灰色粘土ブロック混入
⑪ 灰褐色シルト
⑫ 淡青色礫砂混粘土

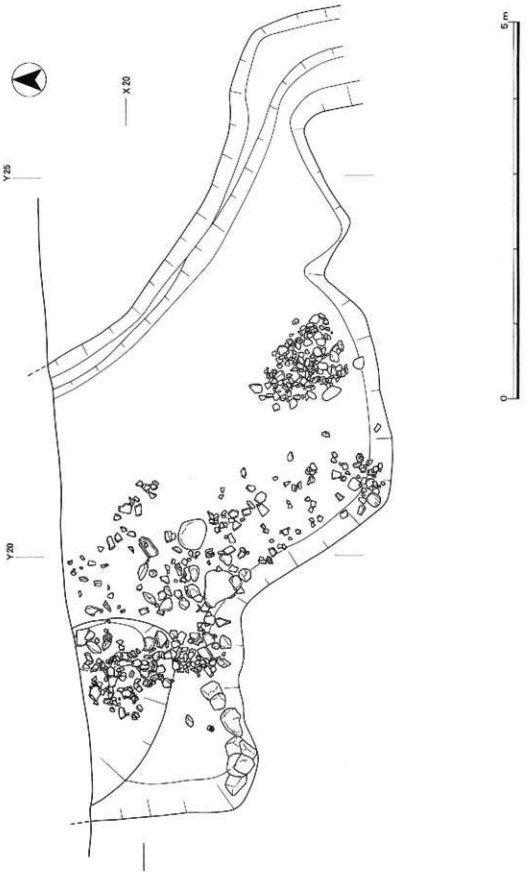
NR41
a 淡茶色中砂
b 茶色礫砂
c 茶色中砂、灰色粘土混
d 粗砂、灰色粘土混
e 淡灰色中砂～明褐色粗砂
f 粗砂

SK41
a 青灰色シルト
b 淡茶色礫砂
c 明褐色シルト、灰色粘土ブロック混
d 灰褐色シルト
e 淡青灰色礫砂混粘土

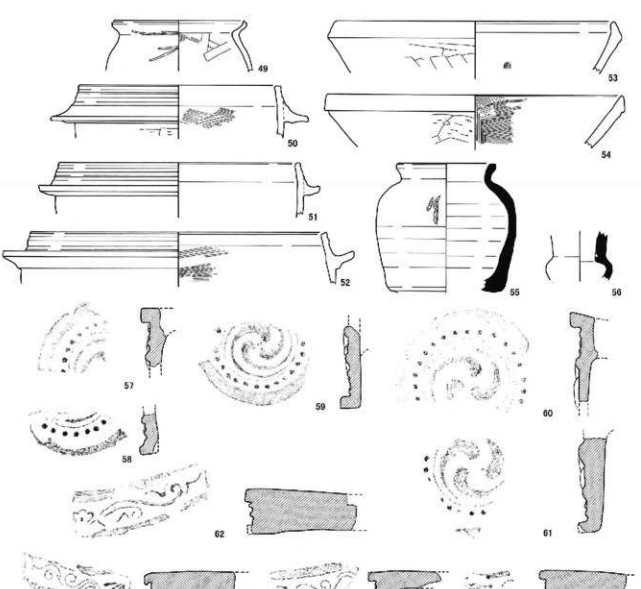
SD41
a 茶褐色礫混シルト、灰色粘土混
b 茶褐色シルト混灰色粗砂

SD42
a にぶい褐色シルト、灰色粘質シルト混
b 粗砂、灰色粘土ブロック混

第16図　4区平断面図(Ｓ＝水平1/100、垂直1/50)



第17図　ＳＫ41平面図(Ｓ＝1/50)

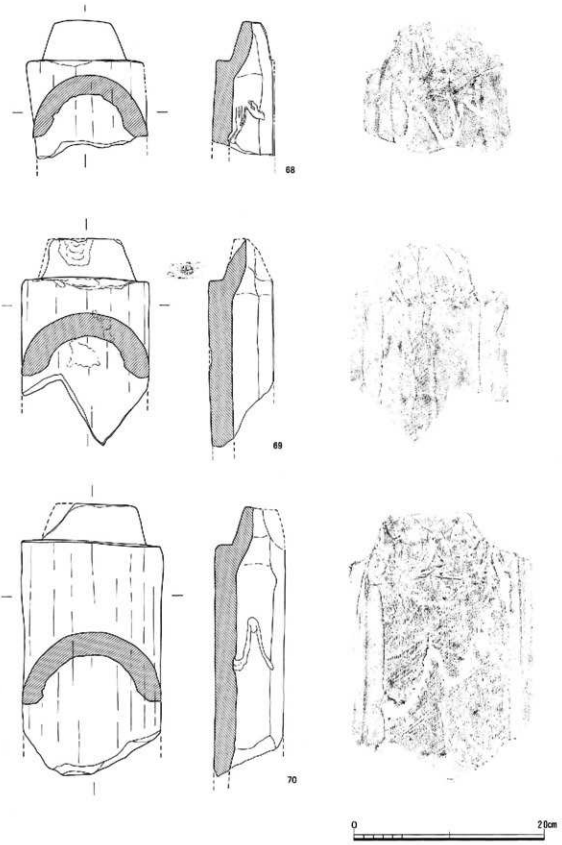


第18図　ＳＫ41出土遺物実測図－１

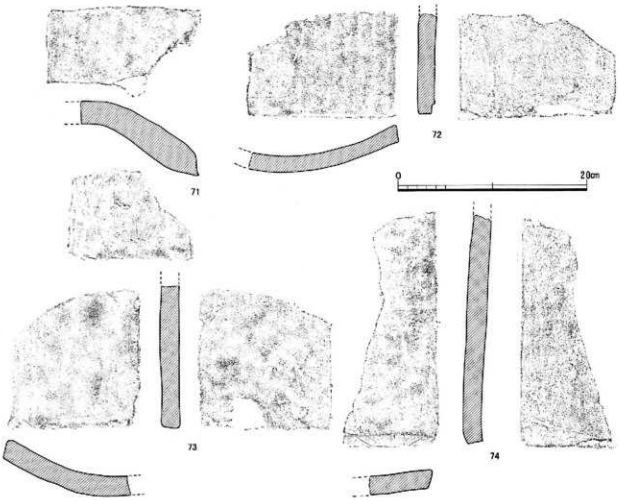
土坑（ＳＫ）

ＳＫ41

４区北西部の５Ｄ地区で検出した。北部は調査区外に至る。南部でＳＤ43～ＳＤ45が合流している。検出部で東西幅６ｍ、南北幅４ｍ、深さ0.4mを測る。北西隅の底部には東西幅２ｍ、深さ0.45mの窪みを有する。第６層上面から切り込んでいるが、西側では埋没河川の東岸を構成する石垣状の施設が認められた。埋土はシルト～粘土が優勢な５層から成る。遺構の性格としては、ＮＲ41の東部に付随した池状の機能を果たしたものと推定されるが、ＮＲ41の護岸整備に関連して機能が低下した後は土器の廃棄場として使用されていたようである。遺物は特に南部から西部



第19図　ＳＫ41出土遺物実測図－２



第20図　ＳＫ41出土遺物実測図－３

にかけての３か所で集積部分が認められた。室町時代中～後期初頭を中心とする夥しい量の屋瓦土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、国産陶器、中国製磁器、石材、焼土塊が出土しており、出土量はコンテナ30箱におよぶ。そのうち屋瓦類が大半を占めるが、いずれも細片化したものが中心である。26点(49～74)を図化した。49～52は土師器の羽釜片である。50が瓦質の他は土師質である。49は口縁部が「く」の字に屈曲する大和産の羽釜である。菅原編年の大和Ⅰ$_{3}$型(16世紀)にあたる。50～52は口頸部外面が段状を呈する。15世紀後半～16世紀初頭に比定されよう。53・54は瓦質摺鉢の細片である。53が14世紀中葉、54が15世紀前半に比定される。55は肩の張る体部に外反して伸びる短い口縁部が付く備前焼の小形壷である。全体の約1/3が残存しており、復元口径10.1㎝、器高13.5㎝を測る。体部上位にヘラによる窯印が認められる。色調は茶褐色で、器面に灰かぶりが認められる。15世紀後半のものか。56は瀬戸焼の花瓶片である。釉色は淡緑灰色で、全体に細かい貫入が認められる。藤沢良祐氏分類の花瓶Ⅲ類(古瀬戸後期Ⅱ期－14世紀末～15世紀第１四半期)に比定される。

屋瓦類は28点(57～84)を図化した。57～61は軒丸瓦である。57～59は口径12.5㎝を測るやや小振りの軒丸瓦である。内区の中央に珠文を持つ左巻きの三巴を配する。巴は丸味のある頭部から約3/4周し、末端が圏線と接する。外区内縁には小粒で隆起のやや小さい珠文26個(推定)を密に廻らせている。外縁は高く、幅1.3㎝前後を測る。外縁上面に離れ砂が認められる。焼成は良好で、

色調は灰色を呈する。33の鳥衾と同意匠の可能性が高い。室町時代前期(14世紀)のものと推定される。60・61は内区に左巻きの三巴を配する。巴は丸味のある頭部から約3/4周して終わる。隆起の小さい圏線を経て、外区内縁には中粒で隆起のやや小さい珠文を28個(推定)廻らせている。外縁は高く、幅1.5cm前後を測る。61については、火中した為か表面の炭素付着が認められない。室町時代前期(14世紀)のものと推定される。62～67は軒平瓦である。62は瓦当面に対して右半分が残存している。中心飾りに半裁花文を配し、左右に長い単位の主葉と支葉を1反転と唐草3葉で構成される均正唐草文軒平瓦である。全体に丁寧な作りで、隆起が高く意匠が鮮明に表現されている。外区外縁は上外縁が下外縁・脇区に比して幅広で、表面・側面ともに丁寧なナデが行われている。平瓦部凹面に布目、平瓦凸面に縦位の縄目叩きが施されている。顎は直線顎である。焼成は良好堅緻で、色調は灰色を呈している。平安時代後期(12世紀代)に比定される。和泉産の瓦で、同笵のものが大阪府松原市の大和川今池遺跡から出土している。63～65は中心飾りに下向きの半裁菊花文を配し、左右に主葉3葉と唐草1葉で構成される均正唐草文軒平瓦である。瓦当面に離れ砂が認められる。外区外縁は高く、幅1cm前後を測る。平瓦部凹面および平瓦凸面は丁寧なナデで平滑にされている。顎は段顎で、顎裏面および側面のナデは丁寧である。焼成は63・64が良好で、淡灰色を呈するが、65については赤橙色を呈しており火中した可能性がある。室町時代中期のものと推定される。66は瓦当面に対して左半分が残存している。上下の界線間に隆起が小さく繊細な線で表現される唐草文を配する。顎は段顎である。焼成は良好で、色調は淡灰色～灰色を呈する。八尾市域出土の同笵のものとしては、千眼寺跡・東郷遺跡第37次調査から出土している。鎌倉時代のものか。67は瓦当面に対して右半分が残存している。中心飾りに宝珠文を配し、左右に主葉4反転と支葉1葉で構成される均正唐草文軒平瓦である。瓦当面に離れ砂が認められる。外区外縁は脇区が幅広で、上外縁から平瓦部凹面にかけて幅1cm前後の面取りが行われている。平瓦部凹面および平瓦凸面は丁寧なナデで平滑にされている。顎は浅い段顎である。焼成は良好堅緻で、色調は灰色を呈する。八尾市内出土の同笵の軒平瓦としては、成法寺遺跡(平成6年度大阪府教育委員会調査)がある。室町時代中期に比定される。丸瓦は3点(68～70)図化した。3点共に玉縁を有する丸瓦で、全容を知り得たものはない。凸面は縦位方向のナデ、凹面は布目を持つ69と布目と吊り紐痕を残す68・70がある。凹面玉縁端面および胴部凹面側縁の面取り幅は広い。69には丸瓦と玉縁部分の連結面に菊花文のスタンプ文が認められる。室町時代のものである。71は雁振瓦の細片である。凸面はナデ、凹面には細かい布目が一部に残る。72～74は平瓦片である。72の凹凸面、73・74の凸面に離れ砂が認められる。室町時代のものである。遺構の廃絶時期は室町時代中期末～後期初頭(16世紀初頭)が推定される。

溝(SD)

SD41

4区北東隅の5・6F地区で検出した。概ね南-北へ伸びるものであるが、東肩は調査区外に至る。検出長3.4m、幅は北壁部分で0.85m、深さ0.3mを測る。埋土は粗砂・礫を含む2層から成る。遺物は奈良時代～鎌倉時代に至る土師器、須恵器、瓦器等が少量出土しているが、細片のため図化し得たものはない。最も新しい時期の遺物から、遺構廃絶時期は鎌倉時代前期(13世紀前半)が推定される。

ＳＤ42

ＳＤ41の西に並行して南　北へ伸びるもので、中央部でＳＤ46に切られている。検出長6.5m、幅1.1～1.5m、深さ0.3mを測り、西肩は二段掘方を有しており、テラス状の平坦面を持つ。遺物は古墳時代後期～鎌倉時代に至る土師器、須恵器、瓦質土器、屋瓦等が少量出土しているが、細片のため図化し得たものはない。出土遺物から、遺構廃絶時期はＳＤ41と同様、鎌倉時代前期(13世紀前半)が推定される。

ＳＤ43

４区東南部の６・７Ｆ地区で検出した。ＳＫ41の南東隅から南へ伸びるもので、北部ではＳＤ46と合流している。検出長5.2m、幅1.1～1.6m、深さ0.5mを測り、東岸の北部では２段の掘方を有する。埋土は２層で上層がにぶい褐色シルト、下層が淡褐色細粒砂である。遺物は瓦質鉢片が１点のみ出土している。細片のため図化していないが、出土した瓦質鉢片から、廃絶時期は室町時代前期(14世紀代)と推定される。

ＳＤ44

４区中央南部の６・７ＥＦ地区で検出した。ＳＫ41の南辺から南へ伸びる溝で、検出長3.5m、幅1.8～2.0m、深さ0.1m前後を測る。埋土は褐色シルトと灰色粘土質シルトの互層である。室町時代前期に比定される土師器、須恵器、瓦器、屋瓦の細片が極少量出土している。

ＳＤ45

４区中央南部の６・７Ｅ地区で検出した。ＳＤ44の西側で検出した。ＳＤ44同様、ＳＫ41の南辺から南へ伸びるもので、検出長3.4m、幅0.5～1.0m、深さ0.2mを測る。埋土は橙色シルトである。室町時代前期を中心とする土師器、須恵器、瓦器、屋瓦等の細片が少量出土している。

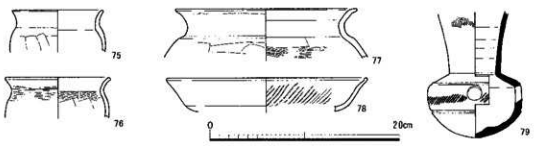
ＳＤ46

４区東端の６Ｆ地区で検出した。ＳＫ41の南東隅のＳＤ43との接点付近から東へ伸びるもので、ＳＤ42・ＳＤ43を切る。２段の掘方を有し、検出長2.3m、幅1.3～1.4m、深さ0.3mを測る。土師器、瓦器、瓦質土器の細片が極少量出土しているが、時期を明確にできるものはない。

自然河川(ＮＲ)

ＮＲ41

４区西端の５・６ＤＥ地区で検出した。２区で検出したＮＲ21に続くものである。南東－北西に伸びるもので西岸は調査区外に至る。検出長7.5m、東西幅3.8m、深さ0.65mを測る。埋土はシルト～中粒砂である。内部からは、古墳時代後期～奈良時代中期の土師器、須恵器の細片がコンテナ３箱分出土している。５点(75～79)を図化した。75・76は土師器小形壺片である。77は土師



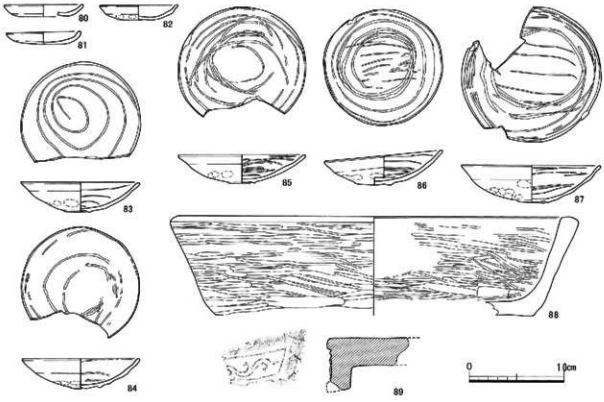
第21図　ＮＲ41出土遺物実測図

器甕の細片である。78は土師器杯片である。口縁端部が小さく内側に肥厚するもので、体部内面に放射状ヘラミガキが施されている。75～78は平城宮土器Ⅲ(８世紀第２四半期)に比定される。79は須恵器甕で、口縁部を欠く以外は完存している。６世紀前半。最も新しい時期の出土遺物からみて、廃絶時期は奈良時代中葉が推定される。

２)遺構に伴わない出土遺物

第５層出土遺物

10点(80～89)を図化した。出土位置は80・81・83～86・88が１区、82が２区、89が３区である。80・81は土師器小皿である。81が完形品で口径7.8cm、器高1.3cmを測る。82は瓦器小皿である。80～82は13世紀前半から中葉に比定される。83～87は和泉型瓦器椀である。83～86は浅い椀形の体部に形骸化した貼り付け高台がつくものであるが、４点ともに高台が一周せず83・84のように馬蹄形の形状を呈するものがある。体部内面のヘラミガキは、体部と見込み部分が分化する86以外は、内面全体に渦巻き状ヘラミガキが施されている。法量は口径12.4～13.4cm、器高3.2cm前後を測る。４点ともに重ね焼きの際に生じた、三日月状の炭素不着不良部分が内外面に認められる。尾上編年のⅣ－２期(13世紀後半)に比定される。87は83～86に比して口径・器高の法量が凌駕するものである。体部内面は粗いヘラミガキ、見込みに平行線状ヘラミガキが施文されている。尾上編年のⅢ－３期(13世紀前半)に比定される。88は瓦器盤である。口縁部の約1/4が残存している。本来は底部に三足が付く大形の瓦器盤と推定される。復元口径41.5cm、器高10.5cmを測る。内外面共に横位のやや単位幅の広いヘラミガキが施されている。焼成は良好堅緻で、色調は暗黒灰色を呈する。内面体部を中心に煤の付着が顕著であり、火鉢として使用されたものと推定される。12世紀代の



第22図　第５層出土遺物実測図

ものであろう。89は軒平瓦片である。瓦当面に対して右端のみが残存しているのみで詳細は不明である。外縁は脇区幅が他に比して幅広である。顎は段顎である。焼成は良好で、色調は淡灰色を呈する。鎌倉時代のものと推定される。

註記

註1　西口陽一　1996『大和川今池遺跡発掘調査概要・ⅩⅡ』大阪府教育委員会

註2　原田昌則・成海佳子 1983「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要56・57年度」『(財)八尾市文化財調査研究会報告3』(財)八尾市文化財調査研究会

註3　原田昌則　1999「Ⅱ東郷遺跡(第37次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告64』(財)八尾市文化財調査研究会

註4　岩瀬　透　1995『東郷・成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅶ』大阪府教育委員会

参考文献

・尾上　実　1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念論集　古文化論集』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会(和泉型瓦器椀の型式に使用)

・森島康雄　1992「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和古中近研究会(和泉型瓦器椀の実年代に使用)

・横田賢次郎・森田　勉　1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館

・森島康雄　1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会

・立石堅志　1995「10.瓦質土器(1)奈良火鉢」『概説　中世の土器・陶磁器　中世土器研究会編』真陽社

・森島康雄　1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会

・森田　稔　1995「8.中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器　中世土器研究会編』真陽社

・菅原正明　1982「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集

・藤澤良祐　1995「9.中世陶器(1)古瀬戸」『概説　中世の土器・陶磁器　中世土器研究会編』真陽社

・乗岡　実　1999「中近世の備前焼擂鉢の編年案」第11回関西考古学研究会レジメ

・山崎信二　2000「中世瓦の研究」『奈良国立文化財研究所学報第59冊』奈良国立文化財研究所

第3章　まとめ

今回の調査では、奈良時代中期・鎌倉時代前期・鎌倉時代後期～室町時代後期・江戸時代の遺構・遺物を検出した。

奈良時代中期

当該期の遺構としては、2・4区で検出した自然河川(ＮＲ21・ＮＲ41)がある。南東－北西方向に流路を持つもので、本調査地の北西部で行われた第40次調査の河川④、(財)大阪府文化財調査研究センターの第1次調査(98－4・5区、98－6・7区)で検出された川200、川415に対応するものと考えられる。これらの調査では、古墳時代前期後半～平安時代後半に比定される遺物が出土している。従って、本調査部分では出土遺物から最終埋没時期を奈良時代中期としたが、平安時代後半まで機能していた可能性がある。

鎌倉時代前期

当該期の遺構としては、3区で検出したＳＤ33、4区で検出したＳＤ41・42がある。既往調査の成果からみて、当該期の楠根川左岸に展開した集落であると推定される。この楠根川を挟んで平安時代後期～末期(11世紀末～12世紀後半)に存続する集落が東西に成立している。西側集落は、規模が広範囲に及ぶもので、北から大阪文化財調査研究センターによる第1次調査(98　3区)、大阪府文化財センターによる第2次調査(02－1・3区)・第3次調査、当調査研究会による第39次調査、第8次調査1・2・4区、第20次調査一帯の東西約200m、南北約500mに展開している。東側集落は式内社である坂合神社の西部に展開する集落で、大阪府教委員会昭和63年度調査、第30次調査で検出されており、現時点では東西約150m、南北約100mの範囲が想定できる。しかしながら、鎌倉時代初頭(13世紀初頭)においては、本遺跡で検出された遺構以外には小阪合遺跡内からは遺構が検出されておらず、集落域の移動や断絶を余儀なくされたようである。これらの要因としては、小阪合遺跡周辺一帯に存在していた、別宮八幡宮(現矢作神社)が管理していた石清水八幡宮の荘園衰退に連動したものであり、小阪合遺跡内で検出されている当該期の集落の多くが、名田の維持・管理を行った荘民居の集落であったことを物語っている。

鎌倉時代後期～室町時代中期末

鎌倉時代後半～室町時代前半を中心とする14世紀前半の遺構としては、1・2区で検出したＳＤ11・ＳＫ22・ＳＤ21がある。室町時代中期の15世紀初頭から後半の遺構としては、3区を中心としたＳＫ31・ＳＤ31・ＳＷ31がある。室町時代後期の16世紀初頭の遺構としては、4区で検出したＳＫ41がある。

河内地方では鎌倉時代後半～室町時代前半を中心とする14世紀前半以降、集村化が進行し、集落全体を溝(堀)で囲む防衛的性格を帯びた施設として、環濠を持つ集落形態に変化したことが知られている。当該期以降に顕在化する集落形態が変化する要因としては、河内地方を戦場とした、南北朝期の動乱、畠山氏の内乱に端を発する応仁の乱などの戦渦から逃れるために執られた集落形態であったと推定される。八尾市域内の発掘調査で、集落域を囲繞する室町時代の溝(堀)が検出された例としては、萱振遺跡第16次調査、池島・福万寺遺跡第1次調査、小阪合遺跡第22次調査、竜華寺跡第3次調査、成法寺遺跡6次調査、老原遺跡6・7次調査の7例がある。なお、こ

れらの７例の遺構検出位置は、いずれも近世初頭に八尾市内の平野部に成立した集落域とは合致しておらず、近世集落成立時においては中世末期からの集落位置を踏襲せずに新たに集落域を確定したことが窺われる。

一方、４区で検出したＳＫ41からは、コンテナ30箱におよぶ夥しい量の屋瓦・土器類・石材・焼土塊を中心とする遺物が出土している。機能的には溝状遺構から集めた水を溜めておく為の池状遺構であったと推定されるが、機能が低下した後においては廃材の廃棄場として利用されたようである。廃絶時期は室町時代後期初頭(16世紀初頭)が推定される。出土した屋瓦類については、平安時代後期から室町時代中期のものがあり、周辺での寺院建物の存在推定される。なお、調査地の東部約250m地点には式内社である坂合神社が鎮座していることから、これらの屋瓦類は神社に付随した神宮寺に関連したものであった蓋然性が高い。

参考文献

・岡田清一・菊井佳弥　2006「16.小阪合遺跡第40次調査(ＫＳ2005－40)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

・駒井正明・本間元樹・陣内鶴子・松田留美・松田順一郎　2000「小阪合遺跡－都市基盤整備公団八尾団地建替えに伴う発掘調査報告書－」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第51集』(財)大阪府文化財調査研究センター

・本間元樹・辻本　武　2004「小阪合遺跡(その２)－八尾団地(建替)埋蔵文化財発掘調査(第２次)－」『(財)大阪府文化財センター調査報告書　第116集』(財)大阪府文化財センター

・松下知世・金光正裕・若林邦彦・新海正博　2005「小阪合遺跡(その３)－山本団地建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告」『(財)大阪府文化財センター調査報告書　第132集』(財)大阪府文化財センター

・岡田清一　2005「18.小阪合遺跡第39次調査(ＫＳ2004－39)」『平成16年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

・高萩千秋　1990「小阪合遺跡」　第８・13・16次調査発掘調査報告－』(財)八尾市文化財調査研究会報告26(財)八尾市文化財調査研究会

・坪田真一　1993「Ⅲ小阪合遺跡第20次調査(ＫＳ90－20)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』(財)八尾市文化財調査研究会報告41　(財)八尾市文化財調査研究会

・山上　弘　1989『小阪合遺跡発掘調査概要・Ⅱ－八尾市南小阪合町所在－』大阪府教育委員会

・原田昌則　1996「１小阪合遺跡(第30次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告54』(財)八尾市文化財調査研究会

・沢井浩三　1958「第三章　中世」『八尾市史』大阪府八尾市役所

・宮川　満　1979　第二章　荘園の動向　第四節　社領の発達」『大阪府史　第３巻　中世編Ⅰ』大阪府

・中井　均　1991「中世の居館・そして村落－西日本を中心として－」『中世の城と考古学』(株)新人物往来社
・原田昌則　1995「5.萱振遺跡第16次調査(ＫＦ94－16)」『平成６年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
・米田敏幸他 1990「福万寺遺跡－上之島町３丁目22　１の調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告24』(財)八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1993「Ⅳ小阪合遺跡(ＫＳ92－22)第22次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告39　(財)八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋 1998「Ⅲ竜華寺跡第３次調査(ＲＫ93－３)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告59』(財)八尾市文化財調査研究会
・原山昌則　1990「14.成法寺遺跡(ＳＨ89－06)」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告28　(財)八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　2004「Ⅲ老原遺跡(第６次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告81』(財)八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　2004「Ⅳ老原遺跡(第７次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告81』(財)八尾市文化財調査研究会
・棚橋利光　1977「式内社調査報告　第４巻　河内国」式内社研究会編纂

図　版

1区全景（南から）

1区全景（北西から）

図版二

1区　ＳＥ11検出状況（南から）

1区　ＳＥ12検出状況（南から）

2区　上層遺構検出状況(西から)

2区　下層遺構検出状況(北から)

図版四

3区　全景(北から)

3区　全景(南から)

3区　SW31検出状況(西から)

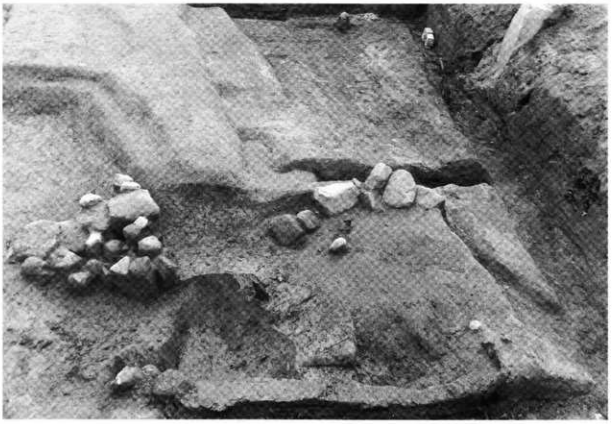
4区　全景(西から)

図版六

4区　SK41上部遺物出土状況（北西から）

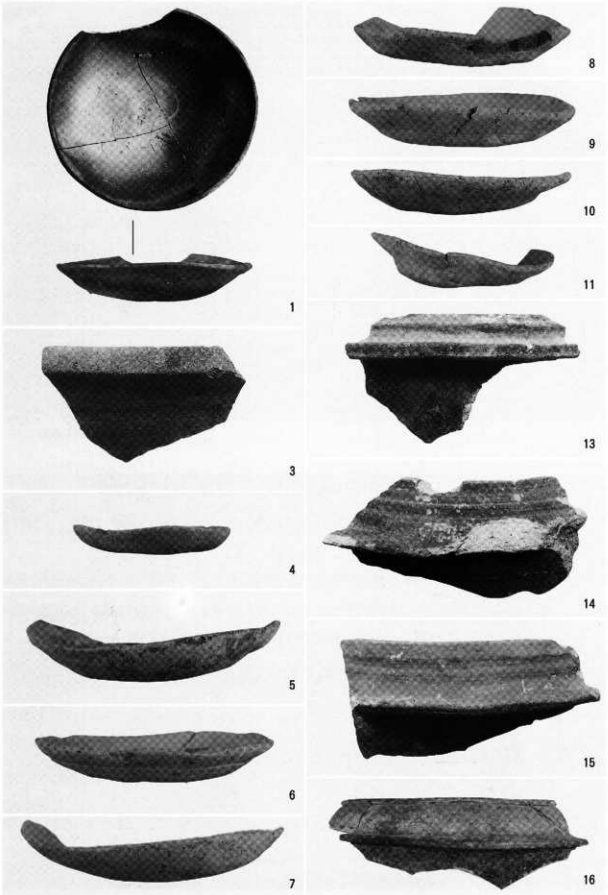
4区　SK41下部遺物出土状況（南から）

4区　SK41完掘状況(西から)

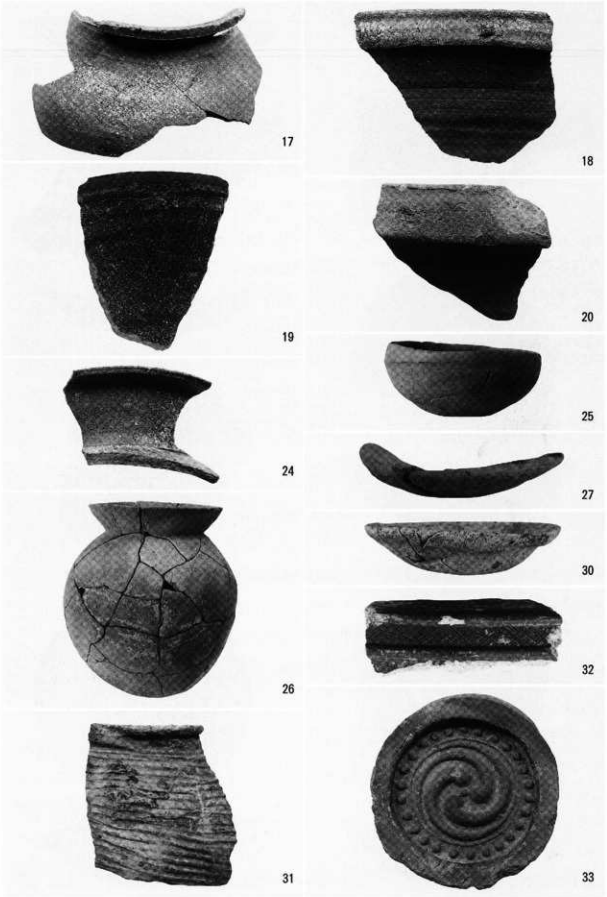


4区　SK41細部(北から)

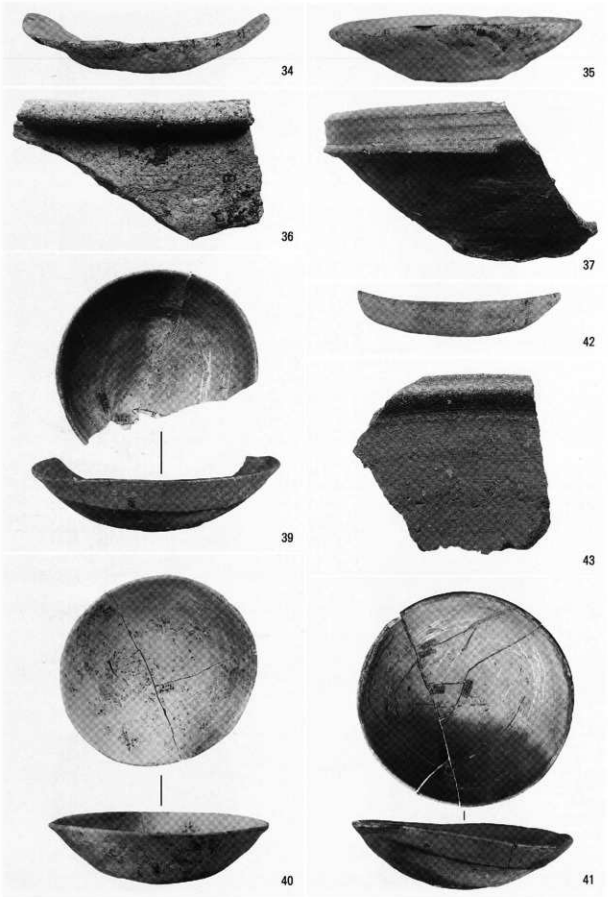
図版八



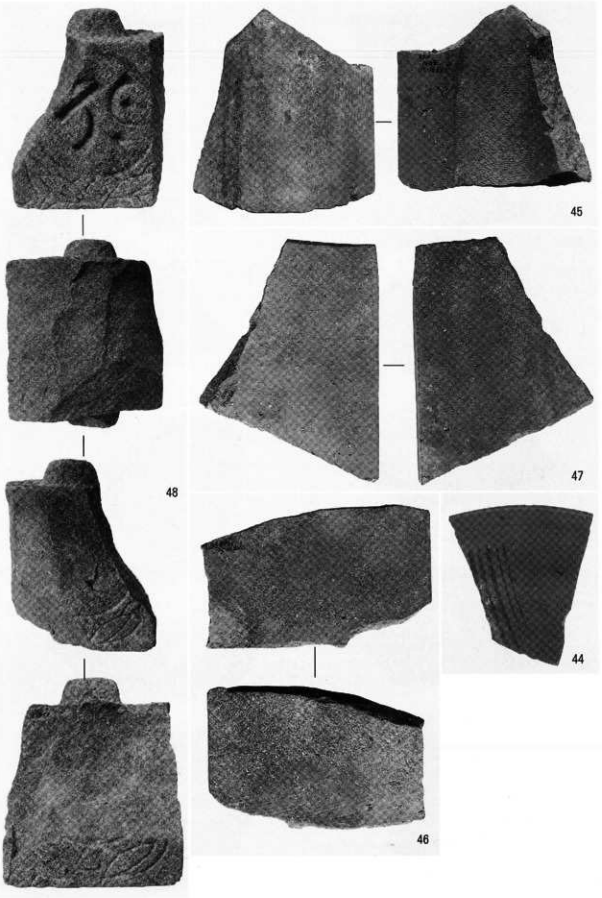
1区　SD11(1・3)、2区　SK22(4～11・13～16)出土遺物



2区　SK22(17～20)・SD22(24)・NR21(25・26)、3区　SK31(27・30～32)・SK32(33)出土遺物

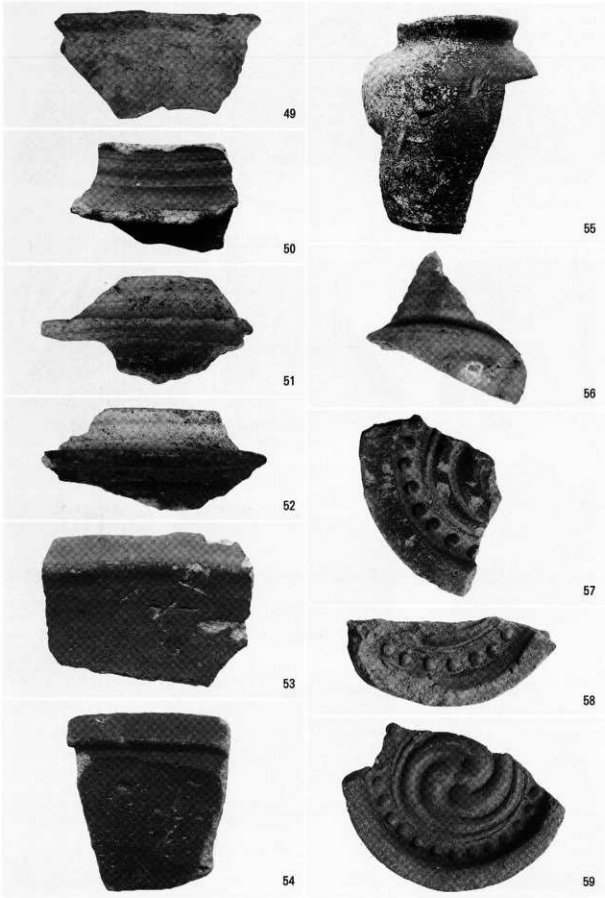


3区　SD31(34～37)・SD33(39～43)出土遺物

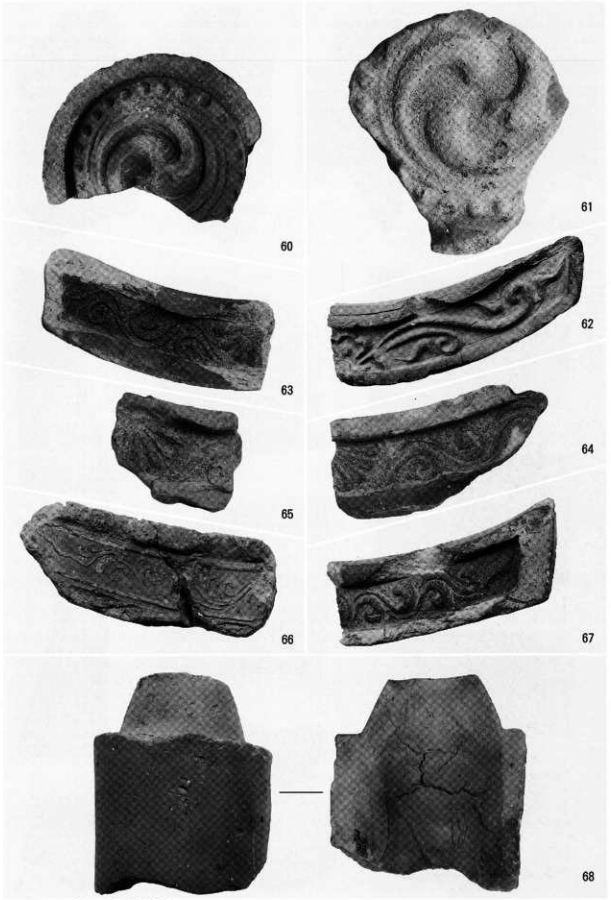


3区　S W31(44～48)出土遺物

図版一二

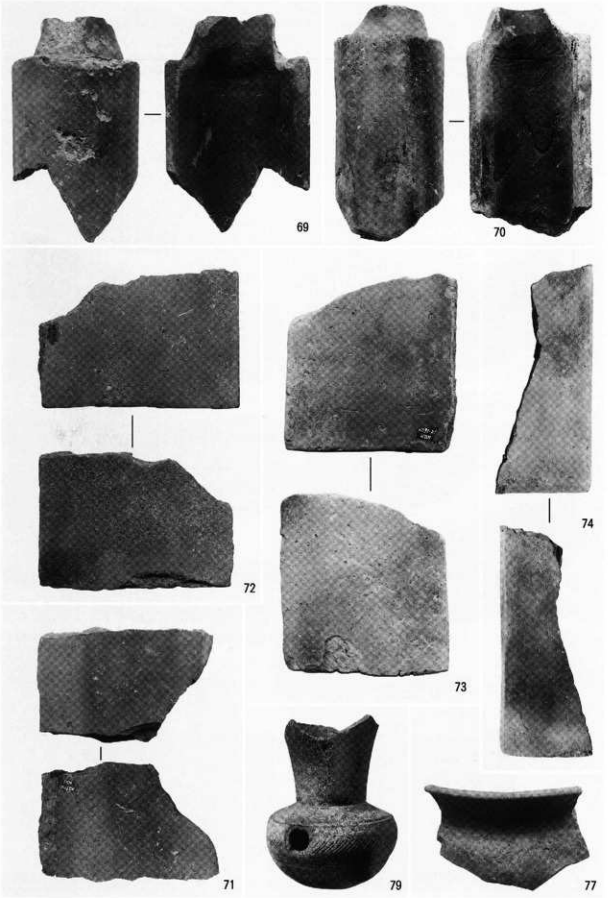


4区　SK41(49～59)出土遺物

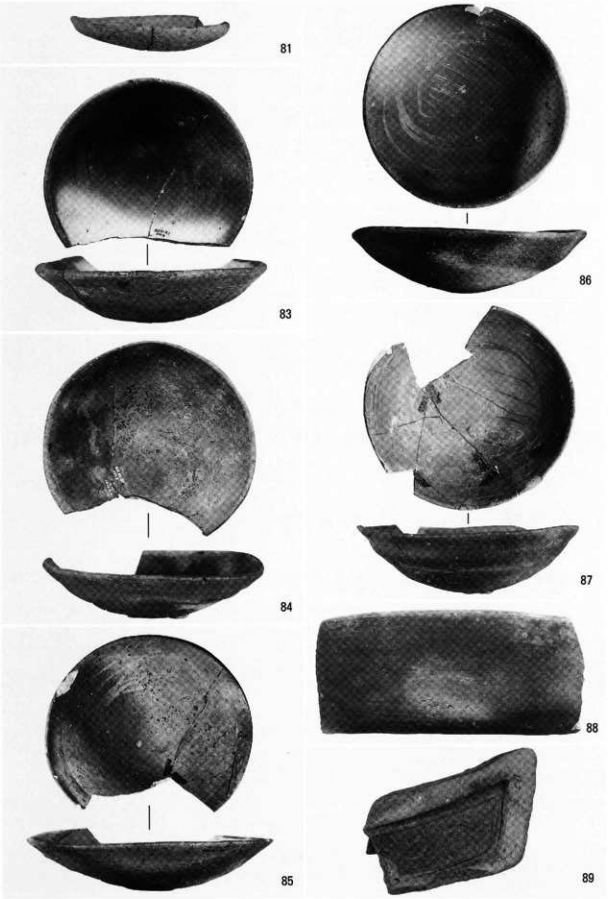


4区　SK41(60～68)出土遺物

図版一四



4区　SK41(69～74)・NR41(77・79)出土遺物



第5層(81・83～89)出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん　やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく101
書名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告101
副書名	Ⅰ亀井遺跡(第２次調査)　Ⅱ小阪合遺跡(第18次調査)　Ⅲ小阪合遺跡(第21次調査)
巻次	
シリーズ名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	101
編著者名	Ⅰ河村亜理　Ⅱ・Ⅲ原田昌則
編集機関	財団法人　八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町４丁目58　2　TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2007年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
かめいいせき 亀井遺跡 (第２次調査)	おおさかふ　やおし 大阪府　八尾市 みなみかめいちょう 南亀井町１丁目	27212	26	34° 36′ 44″	135° 34′ 50″	19890612 ～ 19890704	約200	倉庫および事務所建設
こさかいいせき 小阪合遺跡 (第18次調査)	おおさかふ　やおし 大阪府　八尾市 あおやまちょう 青山町３丁目	27212	40	34° 37′ 17″	135° 36′ 52″	19890404 ～ 19890428	約200	共同住宅建設
こさかいいせき 小阪合遺跡 (第21次調査)	おおさかふ　やおし 大阪府　八尾市 わかくさちょう 若草町	27212	40	34° 37′ 23″	135° 36′ 52″	19920108 ～ 19920210	約300	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
亀井遺跡 (第２次調査)	集落	弥生時代前期	溝１	弥生土器・石器	
		弥生時代中期～後期	溝２・土坑２・小穴４	弥生土器・石器	
		弥生時代後期	溝１	弥生土器・石器	
小阪合遺跡 (第18次調査)	集落	弥生時代中期前半	井戸・土坑６・溝12・小穴77・土器集積１	弥生土器・石器・木製品	
	山畑	弥生時代中期	畦１		
		弥生時代後期	水田３・大畦畔１・畦畔４		
		平安時代末期～鎌倉	溝21・自然河川１・溝１	土師器・須恵器・瓦器	
小阪合遺跡 (第21次調査)	集落	奈良時代中期	自然河川１	土師器・須恵器	
		鎌倉時代前期	溝３		
		鎌倉時代後期～室町時代中期末	土坑４・溝12・土器集積１	土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・中国産磁器・国産陶器・黒瓦・石製品	

要約

亀井遺跡第２次調査では、弥生時代前期～後期の遺構面を３面確認し、遺跡範囲南東部の状況が明らかとなった。小阪合遺跡第18次調査では、この調査により小阪合遺跡の成立が弥生時代中期前半に遡ることが確認された。また遺構・遺物が大量に出土しており、集落域が広範囲にわたる可能性が想定される。小阪合第21次調査では、鎌倉時代前期・鎌倉時代後期～室町時代中期末に至る居住域に関連した遺構・遺物が検出されている。屋瓦のなかには、平安時代後期～室町時代のものが含まれており、近接する位置に存在する式内社の坂合神社との有機的な関係が推定される。

財団法人八尾市文化財調査研究会報告101

Ⅰ亀井遺跡（第２次調査）
Ⅱ小阪合遺跡（第18次調査）
Ⅲ小阪合遺跡（第21次調査）

発行　平成19年３月
編集　財団法人　八尾市文化財調査研究会
〒581　0821　大阪府八尾市幸町４丁目58番地の２
TEL・FAX 072（994）－4700

印刷　服部印刷株式会社
〒578－0903　東大阪市今米１－16　１
TEL 072（961）－1634
表紙　レザック66　〈260kg〉
本文　ニューエイジ　〈 70kg〉
図版　マットアート　〈110kg〉